

也。追慕懷想，固當已極。但其長子

○○○○

也。追慕懷想，固當已極。但其長子

○○○○

富士宮市文化財調査報告書第5集

代官屋敷遺跡

西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)

1982

日本道路公団名古屋建設局
静岡県教育委員会
富士宮市教育委員会

序

移り变りが激しく、多様な価値感にあふれる现代社会において、豊かな人間性と限りない可能性をもとめて、新たな地域文化を創造しようとする国民の努力にはめざしいものがあります。

こうしたなかで、われわれの身边にある文化財、わけてもすべての先人がこの国土と係わってきた軌跡といえる“遺跡”への高まりは著しいものがあります。各地域における発掘調査の成果が、広く国民の注目を集め、人々の大きな関心と期待のもとにおかれる状況は、かつてみることのできなかったことであります。

さて、本県における埋蔵文化財の発掘調査は、近年、質量ともに著しい増大を示しその急成長には目をみはるものがあります。たとえば、昭和50年度において、発掘件数63件・調査費総額1億3千万円が、昭和55年度には、118件・6億7千万円という状況であります。このことはいうまでもなく、開発行為に伴う発掘調査が激増した結果であります。同時に各市町村を中心とする調査体制の整備がすすめられた成果ともいえるものであります。

県内における発掘調査のなかで、国道139号線バイパス西富士道路建設に伴う調査を迎えて、富士宮市当局および教育委員会が、日本道路公団の深い理解と協力のもとに、その調査体制の確立とその後の調査の推進に絶大な努力を注がれたことは、広く関係者の知るところであり、高く評価されるものであります。

昭和53年4月から昭和56年7月まで、3年4ヶ月にわたった発掘調査が、多大な成果をもって完了し、その後も詳細な整理作業が継続されてきておりますが、その成果が本報告書として刊行される運びとなりました。

ここに、日本道路公団ならびに富士宮市をはじめとする関係諸機関、あわせて発掘調査に従事された関係者の方々に深甚なる敬意を表するものであります。本書が、関係諸機関をはじめ、文化財保護関係者や研究者のみならず、広く社会教育・学校教育関係者に活用されるよう念願するものであります。

昭和57年3月

静岡県教育委員会教育長
吉川 晴夫

序

昭和17年に誕生した富士宮市は現在、人口11万余名を数えるまでに成長いたしました。したがって、いまやその装いをまったく変え市街化の波は日々広がりをみせております。それに伴って基幹道路である一般国道139号の道路事情の悪化は市民生活に大きな影響を与えており、このたびの西富士道路の建設は東名富士インターチェンジと富士宮バイパスとを直結し、岳南地域のより一層の発展のための一助ともいべきものであり、大きな期待と关心が寄せられています。

また、地方の時代、文化の時代と呼ばれ、産業経済優先から生活文化重視への発想の転換を余儀なくし、新しい創造性豊かな『まち』の実現が希求されております。産業の高度な発展のなかで、失い、忘れ去られたものが、何であるかを改めて問い合わせ時期がやって来たように思います。

このようななかで、西富士道路建設に先立って、予定路線内の埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。この調査は富士宮市にかつて例をみなかった大規模な発掘調査であり、先人の血と汗によって築かれた文化的遺産を私たち多くの市民に強力に印象づけさせてくれました。

富士宮市の象徴である富士山が、活発な噴火を続けながらも、現在の姿をとどめたころ、富士山のエネルギーを受け継ぐかのように、出現した、私たちの祖先に、発掘調査を通じて地表下2mでめぐり合うことができたことは大変意義あることと思います。それは自然と人間、富士山と富士宮市の深いかかわりあいを再認識させるものであります。文化財の研究、保護により、長い歴史とすばらしい自然にめぐまれた郷土富士宮の復原は、私たちの築き上げる調和ある未来社会のための、指針としなければならないものだと思います。

ここにこの貴重な成果を報告書として刊行できることはまことに喜ばしく、本書が文化財の理解、保護に役立つとともに、学術、研究の資料として、多くの人々に活用される事を期待しております。

おわりに、この調査に直接、間接に御指導、御協力をいただいた日本道路公団名古屋建設局、静岡県教育委員会、地元関係者の皆様に対しまして、深い感謝と敬意を表わす次第であります。

昭和57年3月

富士宮市長

植松義忠

序

富士宮市は富士山より南西および西方にかけてゆるゆるとした裾野の傾斜地にひろがる地であり、恵まれた気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれて、市内の隨所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財については文化財保護法に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めておりますが、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからざる影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっております。開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

このたびの西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、日本道路公団の埋蔵文化財における積極的な深い御理解と御協力によって、昭和53年4月より昭和56年7月まで、3ヶ年余にわたる長期の発掘調査を遂行することとなりました。

その結果、代官屋敷遺跡、若宮遺跡とも従来に例をみない貴重な資料を提供するに至り、それは富士宮の歴史を考える手がかりとなるばかりでなく、ひろく全国的にも注目されるものとなりました。

人類文明のあけぼのについての経過はいまださだかではありません。その問題を解明するためには、発掘調査という地味な成果を除々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は、単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として大切に生かされていくべきであろうことに大きな意義を持たなければならぬと思います。

ここに西富士道路埋蔵文化財発掘調査報告書、代官屋敷遺跡分を刊行して、多くの方々の御批判と御指導を承るとともに、最後になりましたが、本書の刊行にあたり、埋蔵文化財の意義を深く理解され、格段の御配意を賜わりました日本道路公団名古屋建設局の関係各位、また調査の完遂に御指導いただきました静岡県教育委員会、および地元関係者の皆様の御尽力に対しまして深い感謝の意を表します。

昭和57年3月

富士宮市教育長

塙川 隆司

例　　言

- 1 本書は、西富士道路（富士宮地区）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昭和53年一昭和56年にかけて実施した代官屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団名古屋建設局長からの委託を、富士宮市が受託し、静岡県教育委員会の指導によって、現地の調査を富士宮市教育委員会が実施した。
- 3 契約に基き昭和53～55年度まで、年度事業報告として発掘調査概報を刊行し、今回報告する代官屋敷遺跡は「西富士道路埋蔵文化財発掘調査（富士宮地区）概報」一昭和53年度一、同一昭和55年度一にて報告したが、記述に若干の相違があるので、本書をもって正式報告とする。
- 4 発掘調査資料の整理、ならびに報告書刊行作業は、富士宮市教育委員会調査員と補助調査員が主体として行い、一部、作業員の協力を得た。
具体的には遺構を馬飼野行雄、土器を伊藤昌光、石器を石川篤、阿部富士子が主体となって、他がこれを補佐した。
- 5 遺構、遺物の写真撮影は馬飼野、伊藤が行った。なお、航空写真の一部は市内東町在住の望月謙氏より提供された。
- 6 本書の執筆は次のとおりである。

第Ⅰ章.....	馬飼野行雄
第Ⅱ章.....	渡井一信
第Ⅲ章.....	馬飼野行雄
第Ⅳ章第1節.....	馬飼野行雄
第2節1.....	伊藤昌光
第2節2.....	馬飼野行雄
第Ⅴ章.....	馬飼野行雄
第Ⅵ章.....	馬飼野行雄
- 7 地形図、遺構図に記す高度は全て海拔高度をもって示している。
- 8 本書の編集は馬飼野、伊藤が行い、若干の文体、用語の統一をはかった。
- 9 印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。
- 10 発掘調査に関する資料は全て富士宮市教育委員会が保管している。

代官屋敷遺跡

目 次

序	静岡県教育委員会教育長 吉川晴夫
序	富士宮市長 植松義忠
序	富士宮市教育長 塩川隆司
例 言	
第Ⅰ章 遺 跡	1
第1節 代官屋敷遺跡	2
第2節 地理的環境	2
第3節 歴史的環境	5
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	10
第1節 調査の経緯	10
第2節 調査の体制	12
第3節 調査の経過	14
第Ⅲ章 土 層	17
第1節 代官屋敷遺跡の土層	17
第2節 土層と遺構	20
第Ⅳ章 繩文時代	22
第1節 遺 構	22
1. 集石跡	22
集石跡について	29
2. 竪穴住居跡	30
竪穴住居跡について	33
3. 土 塚	33
土塚について	34
4. 黄褐色粘土を内包する土塚	35
黄褐色粘土を内包する土塚について	39
第2節 遺 物	41
1. 土 器	41
土器について	55

2. 石器	57
石器について	59
第V章 歴史時代	74
第1節 造構	74
1. 円形土塁	74
円形土塁について	77
2. 溝状造構	77
溝状造構について	78
第VI章 調査総括	79
1. 遺跡	79
2. 繩文時代早期中葉～末葉	79
3. 繩文時代前期後葉～中期初頭	81
4. 歴史時代	81

挿表目次

第1表 富士宮市遺跡分布表	8
第2表 調査経過表	14
第3表 早期土器群出土表	55
第4表 第Ⅳ群土器分類表	56
第5表 石器計測表①	57
第6表 石器計測表②	58
第7表 石器計測表③	59
第8表 円形土塁計測表	74

挿 図 目 次

第1図 代官屋敷遺跡位置図	1
第2図 富士西南麓の地質図（佐々木実）	3
第3図 富士宮市遺跡分布図	7
第4図 西富士道路（富士宮地区）路線図	10
第5図 代官屋敷遺跡地形・グリッド設定図	15
第6図 G-10グリッド北壁断面図	18
第7図 地区別土層断面図	19
第8図 土層と遺構の相関図	21
第9図 縄文時代遺構全体図	23
第10図 集石跡全体図	25
第11図 第1号集石跡実測図	26
第12図 第2号集石跡実測図	27
第13図 第3・4号集石跡実測図	27
第14図 第5号集石跡実測図	28
第15図 第1号住居跡実測図	31
第16図 第2号住居跡、および第1・3・4号土域実測図	32
第17図 第2号土域実測図	34
第18図 黄褐色粘土を内包する土域実測図	37
第19図 土器拓影図①（第Ⅰ・Ⅱ群土器）	43
第20図 土器拓影図②（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器）	45
第21図 土器拓影図③（第Ⅵ・Ⅶ群土器）	47
第22図 土器拓影図④（第Ⅷ・Ⅸ群土器）	49
第23図 土器拓影図⑤（第Ⅹ群土器）	51
第24図 土器拓影図⑥（第Ⅺ群土器）	53
第25図 土器拓影図、および実測図⑦（第Ⅻ群土器）	54
第26図 土器出土分布図	55
第27図 石器実測図①	60
第28図 石器実測図②	61
第29図 石器分類図	63
第30図 石器実測図③	66
第31図 石器実測図④	67

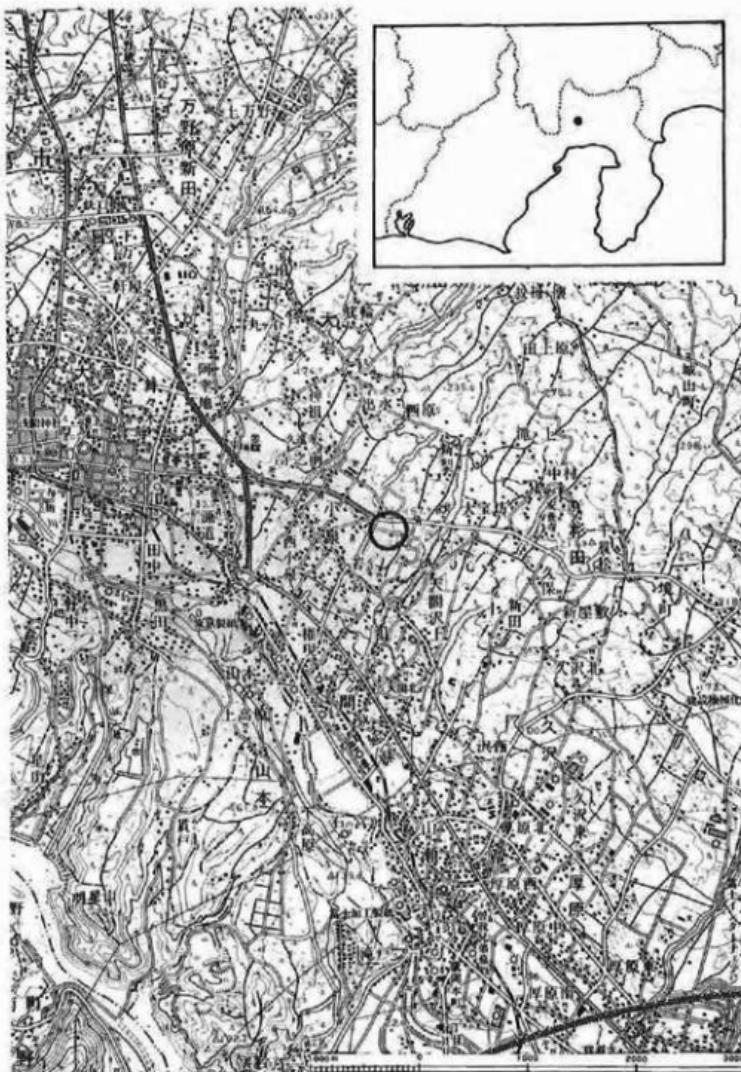
第32図	石器実測図⑤	70
第33図	石器実測図⑥	71
第34図	歴史時代遺構全体図	75
第35図	第27号円形土塁実測図	77
第36図	第1号溝状遺構(部分)実測図	78

図 版 目 次

- 図版第1 A. 航空写真(1)
B. 航空写真(2)
- 図版第2 航空写真(3)
- 図版第3 A. 発掘調査状況(1)
B. 発掘調査状況(2)
- 図版第4 A. 発掘調査状況(3)
B. 発掘調査状況(4)
- 図版第5 A. 土層堆積状況(1)
B. 土層堆積状況(2)
- 図版第6 A. 遺物出土状況(1)
B. 遺物出土状況(2)
- 図版第7 A. 遺物出土状況(3)
B. 遺物出土状況(4)
- 図版第8 A. 第1号集石跡全景
B. 第2号集石跡全景
- 図版第9 A. 第3号集石跡全景
B. 第4号集石跡全景
- 図版第10 A. 第5号集石跡周辺遺物出土状況
B. 第5号集石跡全景
- 図版第11 A. 第1号住居跡全景
B. 第1号住居跡炉断面状況
- 図版第12 A. 第2号住居跡遺物出土状況
B. 第2号住居跡全景
- 図版第13 A. 第5号ドーナツ状遺構断面状況

- B. 第8号ドーナツ状遺構断面状況
- 図版第14 A. 第1号ドーナツ状遺構全景
B. 第3号ドーナツ状遺構全景
C. 第4号ドーナツ状遺構全景
D. 第5号ドーナツ状遺構全景
E. 第6号ドーナツ状遺構全景
F. 第7号ドーナツ状遺構全景
G. 第8号ドーナツ状遺構全景
H. 第9号ドーナツ状遺構全景
- 図版第15 A. 大沢ラビリ面遺構全景（A地区南側）
B. 第1号溝状遺構全景
- 図版第16 A. 第5～12号円形土塹完掘状況
B. 第13～18号円形土塹完掘状況
- 図版第17 第Ⅰ群土器
- 図版第18 第Ⅱ群土器
- 図版第19 第Ⅲ・Ⅳ群土器
- 図版第20 第Ⅴ群土器(1)
- 図版第21 第Ⅴ群土器(2)
- 図版第22 第Ⅴ群土器(3)
- 図版第23 第Ⅵ・Ⅶ群土器(1)
- 図版第24 第Ⅷ群土器(2)
- 図版第25 第Ⅸ群土器(3)
- 図版第26 第Ⅹ群土器(4)
- 図版第27 第Ⅺ群土器(5)
- 図版第28 第Ⅻ群土器(6)
- 図版第29 第Ⅼ群土器
- 図版第30 石器（石鎚）
- 図版第31 石器（磨石）
- 図版第32 石器（石斧・石匙・石錐・異形石器）

第一章 遺 跡



第1図 代官屋敷遺跡位置図

第1節 代官屋敷遺跡

代官屋敷遺跡は静岡県富士宮市小泉字代官屋敷2244-2番地他に所在する。

遺跡は昭和45年4月、野村昭光静岡県文化財保護委員の文化財パトロールによって、縄文時代早期（山形押型文土器）・前期土器片が採集されたことから、富士宮市遺跡整理No.J-23、^{註1}さらに踏査の結果、土師器・須恵器片も確認されて整理No.H-16、遺跡No.11として登録されるに至った。^{註2}

遺跡規模は南北にのびる2本の小丘陵にまたがる東西250m、南北200m、包蔵面積50,000m²が推定されている。

現状は畠地、茶畠、雜林であり、西側斜面が道路拡張工事、また宅地造成によって若干削平されているが、他は原形をとどめて良好な包含層を有している。

註1 野村昭光 1970「富士宮市代官屋敷遺跡出土遺物について」『駿豆考古』第9号

註2 富士宮市教育委員会 1979『富士宮市遺跡地名表』付富士宮市遺跡分布図

第2節 地理的環境

代官屋敷遺跡は富士山頂から連なる裾野斜面、いわゆる富士山西南麓の末端部に位置する。標高は150~160mを測り、比高20m程で沖積面に没し、南に2km程して潤井川、さらに富士市街地より駿河湾を望む。東は慈眼寺沢川をはさんで富士市と境いし、西は約1kmで弓沢川に接して、約2.5km程して富士宮市街地に達する。

本遺跡を正面より眺めると、沖積面にせり出した一種の独立した舌状台地状の地形条件を備えている。台地中央部に若干の低位面が存在して小河川（鍋沢）が南流している。これを境いに西側に本遺跡、東側に若宮遺跡が存在する。^{註1}

本遺跡が所在する富士根地区を巨視的にとらえると、その自然、ならびに人文環境は富士山に負うところが多い。

富士山の成立過程は小御岳、古富士、新富士の3火山から成ることが知られている。^{註2}

現富士の基盤をなす小御岳火山は洪積世中葉（数10万年前）に活動を開始し、洪積世末葉には2,400mの容姿を駿河湾頭に現わした。その後、洪積世終末（3~2万年前）になって古富士火山が活動を始め、その噴出溶岩流は小御岳火山の大部分を覆い、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残すだけとなつた。また、古富士火山の噴出した集塊質泥流は富士川岸にまで達し、南西部に羽崩、星山両丘陵の基盤を形成した。

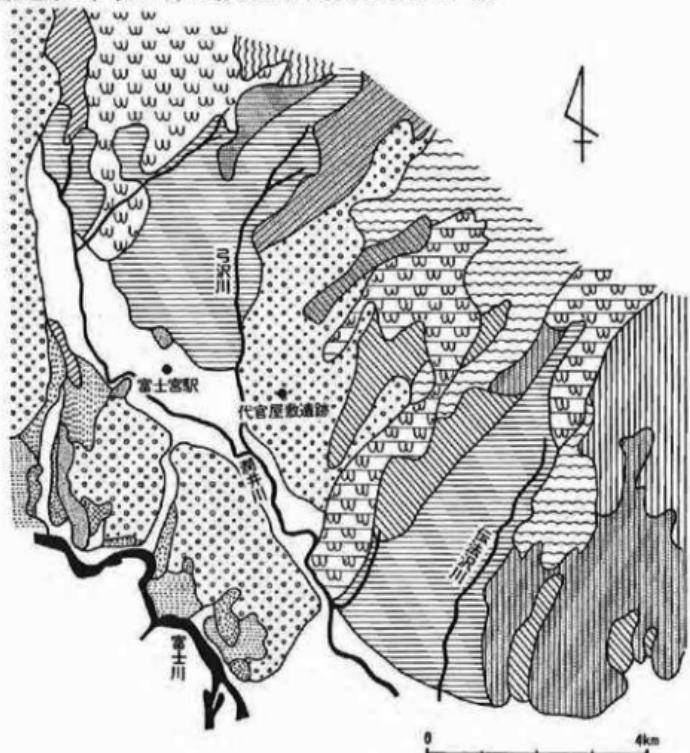
その後、約1万年位は大きな火山活動はなく、断層運動や浸食、堆積運動がくり返されていた。この時に生じた大宮断層によって、星山丘陵の浸食谷を南下し富士川に注いでいた潤井

川は流路を切断されたため、断層に沿って流路を東に転じ富士市塵岡に流入する結果となった。

沖積世（現世）になり、再び激しい活動が開始された。これが新富士火山で、その噴火活動は古富士火山と異なり多量の溶岩を噴出して、小御岳、古富士両火山を溶岩流と火山砂礫などで幾重にも覆うとともに、周辺の山麓部にも10数mという厚さで堆積した。

有史をむかえても新富士火山の活発な活動は続き、ついには円錐形火山（コニーラ）の代表的火山を形成するに至った。

現在は宝永4年（1707年）の噴火を最後に活動を休止している。



[Symbol: White square]	沖積砂礫層	[Symbol: Vertical lines]	宮内熔岩	[Symbol: Wavy lines]	万野風穴熔岩	[Symbol: Diagonal lines]	岩淵熔岩
[Symbol: Horizontal lines]	火山性砂礫層	[Symbol: Wavy lines]	天母山熔岩	[Symbol: Vertical lines]	今泉熔岩	[Symbol: Cross-hatch]	古富士火山噴出物層
[Symbol: Diagonal lines]	中井出熔岩	[Symbol: Horizontal lines]	坂下熔岩	[Symbol: Wavy lines]	入山瀬熔岩	[Symbol: Vertical lines]	別所疊層
[Symbol: Dotted pattern]	元村山熔岩	[Symbol: Wavy lines]	大峯熔岩	[Symbol: Vertical lines]	大宮熔岩	[Symbol: Cross-hatch]	岩淵火山噴出物層
[Symbol: Diagonal lines]	神成熔岩	[Symbol: Wavy lines]	沼久保熔岩				

第2図 富士西南麓の地質図（佐々木実）

上記の富士山の成立過程は古富士集塊質泥流が著しく不透水性である反面、新富士火山溶岩が透水性に富む特性から、富士宮市内各所に湧水を生む結果となる。

これは古富士火山の浸食谷が埋没後も旧河床として残り、この谷に沿って地下水脈が形成されたためである。この旧河床は昭和25年のボーリング調査で湧玉川と豊玉川の存在が確認され、湧玉川は富士根地区を南西に下り浅間神社境内の湧玉の池まで、豊玉川は北山より外神を南下して淀師渋沢付近までを流路にもつことが知れた。^{註3}

富士根地区は古富士火山の噴出した集塊質泥流を基盤とする。屋根上に位置したため新富士火山初期の溶岩流が及ばず島状となって残ったためである。上部には新富士火山の火山性砂礫層が降下して、なだらかな丘陵地帯を形成している。この火山性砂礫層が前述したように極めて透水性に富むため、小泉、出水、滝ノ上などの地名が示すように湧水地が多く、市内でも有数の富水地帯となっている。

地形的には富士山を中心に同心円状の等高線によって描かれている。詳細な観察を行うと、湧水を伴った多数の小谷が形成され侵食作用を促進した結果、独立した丘陵、いわゆる舌状台地状の地形が連続して「ノコギリの刃」状となっている。

湧水地と舌状台地状地形による地理的条件が動、植物の繁殖をもたらしたであろうことは箕輪・出水・滝ノ上・天間沢遺跡など、20数ヶ所の縄文時代遺跡が、それぞれ標高100～200m間に0.5～1km程の距離を隔てて占地することから容易に知れ、本市における遺跡密集地帯を形成している。^{註4} ^{註5} ^{註6}

反面、本地区より北西側に接する万野原一帯は、前述した両河床の中間にあたるため湧水が不可能な乏水地帯である。近年、上水道の発達によって発展の一途をたどっているものの過去に遺跡の確認はなく、原始・古代より現在に至るまで、その生産活動や集落立地に富士山による大きな制約を受けたであろうことは言うまでもない。

註1 日本道路公团名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1980『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報Ⅱ—昭和54年度—』

註2 津屋弘達 1964『富士山についての証言—山の生立ちと地質学的背景』『科学朝日』8

註3 堀川隆司 1971『総説第1章 富士山』『富士宮市史 上巻』 富士宮市

註4 植松草八 1971『第1章 千居遺跡や月の輪平遺跡—ふるさと富士宮のあけばのー』『富士宮市史 上巻』 富士宮市

註5 静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981『滝ノ上遺跡』 富士宮市文化財調査報告書第3集

註6 富士市教育委員会 1979『天間沢遺跡第7次(F地区)発掘調査概報』

第3節 歴史的環境

富士宮市に確認される遺跡は現在123ヶ所である。遺跡分布は南部に集中して、しかもその大部分が富士根地区、星山丘陵一帯に限られる特色をもつ。これは前節で述べた古富士集塊質泥流の分布と合致する。遺跡内容は縄文時代に属するものが84ヶ所と他を圧倒する。古墳時代初頭遺跡も比較的充実し、この両者で本地域の遺跡分布図を形作っている状況である。したがって、先土器時代、弥生時代、古墳時代初頭以降の遺跡は未発見部分、または時代、時期別の地理的条件の相違による遺跡の伸長があるにせよ極端に少ない。

近年、すなわち昭和40年代にはじまった高度経済成長の波は例外なくこの富士宮市にも押しよせ、この開発に伴って遺跡に対する影響も数知れないものとなってきた。比例するように緊急発掘調査の数が増したことは言うまでもない。それらをここに拾うと以下の通りである。

- 昭和44年（1969）月の輪平遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
^{註2}
- 昭和45年（1970）月の輪平遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
千居遺跡 縄文時代中期 学術調査
^{註3}
- 昭和46年（1971）月の輪平遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
千居遺跡 縄文時代中期 学術調査
- 昭和47年（1972）月の輪平遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
月の輪下遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
^{註4}
南部谷戸遺跡 古墳時代初頭 放水路建設
^{註5}
王藤内の塚 江戸時代 放水路建設
^{註6}
- 昭和51年（1976）淹戸遺跡 縄文・弥生・古墳時代初頭 学校建設
^{註7}
- 昭和52年（1977）淹戸遺跡 縄文・弥生・古墳時代初頭 学校建設
月の輪上遺跡 古墳時代初頭 宅地造成工事
^{註8}
- 昭和53年（1978）代官屋敷遺跡 縄文時代早・前・中期 道路建設
^{註9}
大宝古墳 古墳時代 保存目的
- 昭和54年（1979）若宮遺跡 縄文時代早期 道路建設
^{註10}
淹戸遺跡 縄文時代中期 学校建設
^{註11}
- 昭和55年（1980）代官屋敷遺跡 縄文時代早・前・中期 道路建設
^{註12}
若宮遺跡 縄文時代早期 道路建設
^{註13}
淹ノ上遺跡 縄文時代中・後期 道路建設
^{註14}
月の輪上遺跡 弥生時代後期 宅地造成工事
^{註15}
- 昭和56年（1981）若宮遺跡 縄文時代早期 道路建設
月の輪平遺跡 古墳時代初頭 土石採集
^{註16}

（昭和56年8月現在）

上記の発掘調査で遺跡内容は除々に明らかにされつつある。それらを理解しながら縄文時代を上限として、本遺跡の歴史的環境についてみたい。

本地域の人間活動の開始は古富士火山第Ⅱ期活動中の後期旧石器時代より認められる。

遺跡は沼久保坂上（大場山）^(95—富士宮市遺跡No. 以下同じ)、南部谷戸⁽¹⁰⁶⁾、月の輪平⁽¹⁰⁷⁾、芝川町小塚A遺跡^{註17}、富士市天間沢遺跡^{註18}が認められ、いずれも新富士火山の溶岩流が及ばない地域に限られる。今後の新発見遺跡がこの地域に限られることが予想されて、新たに若宮遺跡⁽⁹⁾に有舌尖頭器が確認された。しかし遺跡規模は貧弱で、包含層が確認されたのは芝川町小塚遺跡以外ない。

縄文時代をむかえて、早期の遺跡占地は旧石器時代を継承しつつも星山、羽畠丘陵、富士根地区に若干の発展をみせる。

従来、本地域でもっとも古い縄文文化は中葉に至って出現するとされ、田戸式系土器が盛行する時期に押型文土器を伴出することが知られていた。表面探査による資料が対照であったが、代官屋敷⁽¹¹⁾、奥山地⁽¹¹³⁾、沼久保坂上、南部谷戸、月の輪平遺跡である。これらの資料のうち楕円押型文土器が比較的卓越して、楕円粒も粗大であることから押型文文化の終末期があたえられた。さらに資料の貧弱さも手伝って遺跡は小規模である把握が同時になされて現在に至った。

しかし、近年早期遺跡の発掘調査が活発化して除々に内容が明らかにされるように、本地域でも若宮遺跡によって大きく覆された。

若宮遺跡で得た竪穴住居跡・炉穴群等によって構成される集落跡は完全に早期遺跡の概念を反転されるとともに、本地域の縄文最古の遺跡となった。

早期後葉の条痕文系（茅山式系）土器群の時期になると、浅間神社⁽⁷⁶⁾に新たな進出がみられる。奥山地、沼久保坂上遺跡、茅山上層式に属する良好な資料を出土する坊地上遺跡⁽¹⁰²⁾地名表による小松原A遺跡⁽⁹⁹⁾など星山丘陵一帯に発展的となる。それに代官屋敷遺跡が本調査で資料を得て加えられる。

前期に至ると星山丘陵一帯の遺跡が影をひそめて富士根地区に発展をみせる。しかし、遺跡数は貧少である。

木島式土器の良好な資料が出土する単純遺跡の出水遺跡⁽³⁷⁾、隣接して峯石遺跡⁽³⁸⁾があげられる。以後、中葉に文化がとだえて諸吸式系文化に至って遺跡の再出現をみる。

諸吸式系土器群には北白川下層式土器が伴出することから、関東系土器文化圏にありながら関西的な要素をあわせもつことが知れる。遺跡は代官屋敷、南部谷戸遺跡の早期から再出現した遺跡に加えて、焼畑⁽¹⁾、新梨⁽⁶⁾、寺内遺跡⁽¹⁹⁾をみる。

中期前葉の文化は勝坂式土器に代表され、その繁栄の中心は中部高地の山岳地帯であり、本地域もその周辺地域として理解することができる。遺跡占地は丘陵斜面の小規模遺跡が多く、中部山岳地方の大規模な集落遺跡の形成と極めて対象的である指摘もなされている。



第3図 富士宮市遺跡分布図

番号	整理番号	遺跡名	番号	整理番号	遺跡名	番号	整理番号	遺跡名	番号	整理番号	遺跡名
1	J-30	焼 畑	33	K-14	天 神 墳	68	J-61	丸山(田原西)	100	K-19	戸塚古墳
2	J-31	杉 田 中 村	34	K-13	虚空藏塚	69	H-49	101	J-78	明 月 山	
3	J-29	滝 ノ 上	35	J-8	箕 輪(A)	70	J-60	田 尾	102	J-40	坊 地 上
4	J-75	田 上 原	H-2			J-59	青 木	H-28			
5	J-32	丸 球	36	J-9	箕 輪(B)	71	H-55	青 見	103	J-53	倭 文 神 社
6	J-28	西 梨	37	J-16	出 水	72	H-56	琴 平	104	J-43	野 中 中 村
7	J-76	杉 田 西 原	H-8	J-14	寒 石	73	Y-4	淡 泽	H-31		
8	J-27	大 古	H-57	H-5		74	H-39	途 鮎	105	J-46	泉
9	H-66	若 宮	38	J-15	丸 ケ 谷 戸	75	J-50	神 貴 町	H-34		
K-5			39	H-6		76	J-51	浅 井 神 社	S-2		
10	J-26	橋 通(天瀬沢)	40	J-10	辰 野	77	H-43		J-41		
H-20			H-4			Y-3		H-30			
11	J-23	代 宮 屋 敷	41	J-13	時 田	H-35		K-20			
H-16			J-5			78	H-54	城 山	S-1		
12	J-25	蟹 人 越	42	J-12	室 田(元大君)	79	H-44	北 神 田	107	J-39	月 の 輪 平
H-19			H-58			80	H-41	二 ノ 宮	H-25		
13	J-20	小 京 向 原	43	J-11	峰 ケ 谷 戸	81	H-42	懸 知 神 社	108	J-45	滝 戸
14	J-80	尾 無 沢	H-58			82	H-36	西 町	H-33		
15	J-71	蒲 田	44	H-7	出 水 東	83	H-40	貴 舟 小 学 校	109	J-44	野 向 原
H-61			45	H-9	出 水 西	J-70	H-59	甲 石	H-32		
16	J-18	寺 後	46	J-3	石 原	84	H-59		J-42	スギナクボ	
17	J-24	上 領(田下屋)	47	J-4	松 蓬(神威)	85	J-47	福 伝	111	J-37	五 反 田
H-17			J-6			H-37		H-23			
18	J-72	神 祖	48	J-6	東 谷 戸	86	J-48	大 中 里 反 下	112	J-38	月 の 輪 上
H-62			H-1			H-38		H-24			
19	J-19	寺 内	49	J-5	木 佐 山	87	J-49	大 中 里 反 上	113	J-36	奥 山 地
H-11			50	J-7	鶴 千 岩	88	K-8	中 里	H-22		
20	J-17	大 葉(矢ノ下)	51	K-1	元 村 山	89	K-9	南 原	114	Y-1	田 中
H-10			52	J-1	社 隆 東	90	J-52		115	H-29	坊 地 下
21	J-73	小 京 中 村	53	J-2	社 隆 西	91	H-45	別 所	116	H-27	坊 地 南
H-63			54	K-15	舞 々 木 1 月 墳	92	K-10	別 所 1 号 墳	117	H-26	月 の 輪 下
22	J-21	三 ツ 室	55	K-16	舞 々 木 2 月 墳	93	K-11	別 所 1 号 墳	118	K-7	塚 本 古 墳
H-12			56	K-12	行 人 塚(宮 塚)	94	L-2	別 所 2 号 墳	119	K-6	月 の 輪 印
23	J-22	本 ノ 行 寺	57	H-52	健 六	95	S-3	別 所 2 号 墳	120	L-1	王 蔵 内 の 塚
H-13			58	H-51	後 敷(社 収)	96	J-54	(大 堀 山)	121	J-35	上 高 原
24	H-18	椎 現	59	J-65	白 糸 海	97	H-46		J-79	出 口	
25	H-60	石 敷	60	J-81	白 糸 左 折	98	J-55		122	H-67	
26	H-15	向 田	61	J-66	田 貢 草 原	99	H-47	谷 外	123	Y-2	田
27	H-14	中 沢	62	J-67	進 之 釜 墓 墓	100	J-56		124	H-53	光 藤 坊
28	K-2	大 室	63	J-68	高 土 岡	101	H-48		125	J-34	高 原 重 宮 山
29	K-3	神 祖 1 号 墳 (岳ノ神古墳)	64	J-69	根 原	102	J-57	小 松 原(B)	S	先 ト 20 世紀代	
30	K-4	神 祖 2 号 墳	65	S-4	千 居(B)	103	J-56	下 田	J	後 江 戸 代	K 史 墳
31	K-4	神 祖 3 号 墳	66	J-64	千 居(A)	104	H-48		Y	生 殻 時 代	L 史 墳
32	K-17	寺 内 山 ノ 神	67	J-62	青 莖 の 滝	105	J-57	小 松 原(B)	H	上 領 朝	(古 墓 時 代)

第1表 富士宮市遺跡分布表

遺跡は歴代遺跡へと発展していく場合もあるが、単独で存在して以後消滅してしまうものが多い。高原愛宕山(125)、泉(105)、神賀町(75)、坊地遺跡である。

本地域に特筆は中葉の加曾利E式期からの爆発的な遺跡増加である。それは堀之内I式期まで継続する。勝坂期に残存した遺跡はここで大きく転換して規模の大きな遺跡を営む。占地条件も小規模な丘陵斜面から広大な台地の平坦面に位置するようになり、本地域の歴代遺跡、すなわち基地的遺跡に発展する。箕輪A(35)、同B(36)、滝ノ上(3)、滝戸(108)、富註19

土市天間沢遺跡である。

さらに基地的遺跡とは別に新たに形成された小規模遺跡が58ヶ所発生する。縄文時代遺跡の約70%にあたり、この時期は富士西南麓一帯が遺跡といつても過言ではない状況となる。しかし、いずれの遺跡も壠之内Ⅱ式期には退潮してしまい、わずかな歴代遺跡のみ残存する結果となる。

こうした停滞現象は海岸部の魚撈文化の発展の裏返しと考えられているが、諸条件も相まって原因を明らかにするには至らない。

晩期の遺跡も辰野(40)、大中里(87)、滝戸遺跡に微量の資料が認められるにすぎず、また前葉に限られることから、本地域の文化は弥生時代をむかえるまで中断される。

註1 富士宮市教育委員会 1979『富士宮市遺跡地名表』付富士宮市遺跡分布図

註2 月の輪遺跡発掘調査団 1972『星山放水路関係遺跡発掘調査概報』

富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群』富士宮市文化財調査報告書第1集

註3 小野真一編 1975『千居』加藤学園考古学研究所

註4 註2に同じ

註5 註2に同じ

註6 註2に同じ

註7 富士宮市教育委員会 1977『滝戸遺跡発掘調査(第I次)概報』

1978『滝戸遺跡発掘調査(第II次)概報』

註8 註2に同じ

註9 日本道路公団・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1979『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報』

註10 富士宮市教育委員会 1979『大室古墳墳丘実測調査報告』

註11 日本道路公団・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1980『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報II』

註12 富士宮市教育委員会 1980『滝戸遺跡発掘調査(第III次)概報』

註13 日本道路公団・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1981『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報III』

註14 静岡県清水土地改良事務所・富士宮市教育委員会 1981『滝ノ上遺跡』

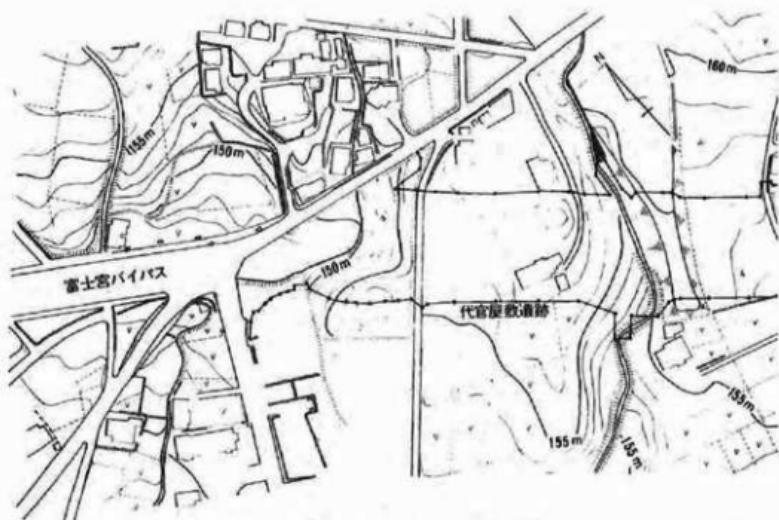
註15 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群II—月の輪上遺跡(B地区)ー』

註16 昭和56年6月より2ヶ月間にわたって月の輪平遺跡の西側残存部約3,000m²が調査された。
この調査で31棟の古墳時代初頭窓穴住居跡が検出され、計117棟に達した。

註17 野村昭光 1969『富士宮市大場山出土の縄文土器』『駿豆考古』第8号

註18 芝川町教育委員会 1972『駿河小塚』—静岡県における先土器文化の研究—

註19 野村昭光 1976『箕輪遺跡出土の玉について』『駿豆考古』第18号



第4図 西富士道路(富士宮地区)路線図

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

代官屋敷遺跡発掘調査の起因となったのは西富士道路建設である。

この建設計画は年々交通事情の悪化する富士、富士宮市間の国道139号の混雑緩和と交通環境の保全、また駿河湾工業地帯の中核を形成する岳南地域の発展に寄与するものとして、静岡県をはじめ地元市町村より建設の強い要請と陳情がなされたものであった。

日本道路公团による西富士道路建設目的は下記である。

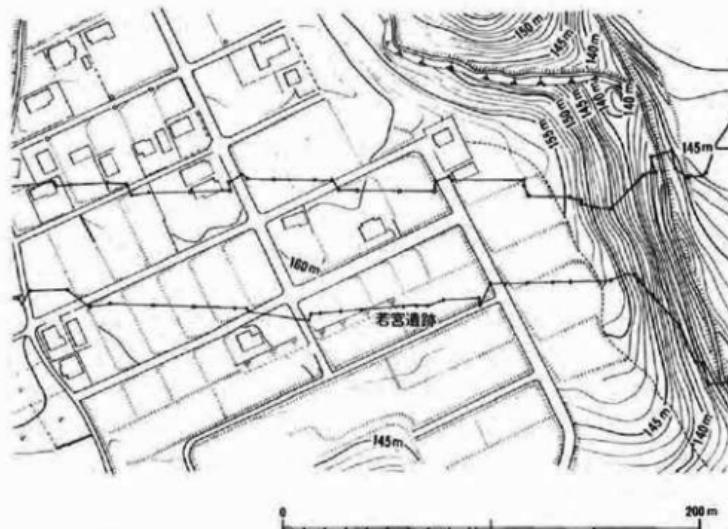
「西富士道路は我国有数の観光地である富士山西麓に位置し、富士周遊の一環をなすものであり、駿河湾工業地帯と甲信越とを結ぶ国道139号の一部区間の改築（バイパス）事業である。」

この139号のうち、すでに改築工事として富士宮道路（有料）及び富士宮バイパスが供用されて円滑な交通を確保しているが、富士市と富士宮市間が現道二車線であり混雑を極めている。

このため西富士道路は、この区間の交通混雑の緩和を図るべく建設しようとするものである。

当道路は富士市伝法を起点とし、富士宮市小泉を終点とする延長6.9kmを有し、この間富士（6.2km）と富士宮市（0.7km）の両市を通過する。

起点である都市計画道路（田子浦臨港線）との接続から、一般国道139号（東名高速道路富士インター接続）をオーバー・バスし、富士インター料金所の東側に沿って北上し、同高速道



路の本線をアンダー・パスすると、これより終点の富士宮バイパスまでは、ほぼ同一な地形のゆるやかな丘陵地を通過する。

また当道路は、昭和50年2月24日に事業許可となったものである。』

この工事計画が昭和50年に、日本道路公団名古屋建設局西富士道路工事事務所から、静岡県教育委員会に提示された。以後、路線予定区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされ、静岡県教育委員会は富士宮市教育委員会に対し、路線予定区域内埋蔵文化財分布調査の実施を要請した。

これを受けた富士宮市教育委員会は、日本道路公団の立合いのもとに富士市教育委員会と合同で、昭和51年8月23・24日に確認調査を実施した。

西富士道路（一般国道139号）埋蔵文化財分布調査報告—富士宮市分抜粋—

Ⅱ 各説

3 若宮遺跡 富士宮市小泉

すでに宅造による破壊を受けているが、一部には良好な包含層の存在が認められた。縄文時代中～後期の遺跡で、その範囲、性格は不明である。包含層の残存状況を確認する必要がある。

4 代官屋敷遺跡 富士宮市小泉

東西2丘陵にわたる遺跡でその全域に土師器片が散布するが、若干稀薄であるので、遺構の有無、性格は不明である。

また西側丘陵は現状が森林であるが、予定路線の若干南側には縄文時代早・前期の遺物が

出土しているので、その時期の調査も必要であろう。

Ⅲ まとめ

若宮遺跡 繩文中・後期

包含層の存在は確実であるが、範囲は不明瞭、その残存状況を確認する必要あり。

代官屋敷遺跡 繩文早・前期

土師器散布縄文・土師器の両期にわたる全域調査が必要である。

なお、富士宮市小泉若宮地区は古墳の密集地であったといわれる所以で、現況茶畠の地点について工事進行途上における注意が必要であろう。

これにもとづき、日本道路公団、静岡県教育委員会、富士宮市教育委員会の三者協議が重ねられて、路線内の遺跡については発掘調査を実施し、記録保存することで意見の一致をみた。

発掘調査は、昭和53年度に代官屋敷遺跡と宅地造成工事のため範囲の明確でない若宮遺跡の包蔵範囲確認を目的とする予備調査を実施することになった。特に若宮遺跡については予備調査により包蔵範囲が確認された場合は次年度に調査が継続することを日本道路公団、静岡県教育委員会との協議により確認された。

具体的な準備は昭和52年度に行われ、日本道路公団名古屋建設局からの委託を富士宮市が受け、静岡県教育委員会の指導のもとに富士宮市教育委員会が調査にあたる事になった。

昭和53年4月1日付で日本道路公団、静岡県教育委員会、富士宮市の三者契約が成立し、同6月1日より発掘調査が実施された。その結果、若宮遺跡の存在が確認されたことや、土地買収、家屋退ちのき等の遅れによる諸事によって第2～4年次に調査が継続された。

第2節 調査の体制

調査委託機関 日本道路公団名古屋建設局

調査受託機関 富士宮市

調査指導機関 静岡県教育委員会

調査実施機関 富士宮市教育委員会

調査主体者 塩川隆司（富士宮市教育長）

調査員 馬飼野行雄・渡井一信（富士宮市教育委員会技師）伊藤昌光（富士宮市教育委員会学芸員）

補助調査員 赤池長次・石川篤・井出紀夫・斎藤泰彦・佐藤幸治・杉沢正敏・恒松慎彦・馬飼野一正・武藏金臣・望月秀行・依田孝壽・阿部富士子・伊藤邦江・太田智子・木川知子・鈴木春代・田中徳代・深沢由美子・松田恵子・吉野順子

作業員（一般）赤池忠・赤池正・天野金吾・井出富士男・井出正夫・磯部一明・小野田敏雄・勝亦英雄・木ノ内誠・小林七造・佐野秋男・佐野一・友野勝・深沢威文・前

島正秀・村松正・望月秀雄・森武久・芦川美智子・飯塚寛子・飯室久子・石川京子・石川純代・伊藤まさ子・市原教衛・稻葉喜美江・稻葉ふじの・稻葉はる子・稻葉よし江・井上英子・井出喜久江・井出利江・井出文江・井口光代・岩間桂子・大勝久子・太田和子・大畠加代・大原初江・大豆生田律子・小川貞子・小野田芳恵・木下朋子・監物京子・佐野克子・佐野ヤヨイ・渋谷里江・杉田ます子・高田和代・滝口たけ子・田村かず代・土井満里子・中山民子・西山よしえ・新田八重子・荻野良枝・日吉ウタ・深沢光枝・深沢幸路・村松明子・望月たみ子・望月たみ子・安江和子・山田恵子・渡辺純子・渡辺すみ子・渡辺房子・渡辺規子・渡辺暉江

作業員（学生） 赤池克美・赤池金弥・伊藤齊・井上君夫・岩見文義・長田昌行・小沢貴美・小野晴敏・笠井桂司・笠井宇・梶原邦明・久保田邦治・神山伊吹・後藤和秀・佐野克己・佐野正和・佐野昌史・塙川浩正・小豆川裕男・須藤和彦・鈴木達仁・鈴木豊秀・鈴木誠・諏訪幸宏・竹川暢昭・坪井當章・旗持章敏・深沢恒臣・深沢宏住・深沢正志・深沢行夫・村松貴彰・森井尚・山本哲也・吉野和史・吉野公彦・渡辺悟・赤池美里・芹沢由利子・石川貴美子・石川良子・伊藤由美子・影山直美・佐野菜穂子・鈴木千文・竹川円・鳥居いすゞ・武藤百合子

学術指導 若林淳之（静岡大学教育学部長）

小川賢之輔（富士市域自然調査研究会会長）

岸島 淳（静岡県立伊豆中央高校教諭）

野村昭光（静岡県文化財保護委員）

技術指導 加納俊介（筑波大学大学院博士課程）

湯川锐夫（神奈川県立藤沢高校教諭）

事務局 富士宮市教育委員会教育次長美濃部惣（昭和53年4月～54年3月）

関 尊（昭和54年4月～54年9月）

佐野三郎（昭和54年9月～56年3月）

風岡大晃（昭和56年4月～）

社会教育課課長 諏訪重夫（昭和53年4月～）

課長補佐 佐野久雄（昭和53年4月～56年3月）

塩川哲章（昭和56年4月～）

社会教育係係長 杉浦秀実（昭和53年4月～54年3月）

後藤章（昭和54年4月～56年3月）

文化振興係係長 成瀬正光（昭和56年4月～）

社会教育課課員 渡辺孝秀・篠原照美・横田辰男・四條悦子
臨事事務員 望月富士子・佐野多恵子・遠藤里美

第3節 調査の経過

本調査区は代官屋敷遺跡の北辺部にあたる。路線予定域は南東～北西にかけて巾50m、長さ130m、面積約6,100m²である。

遺跡は南北にのびる2丘陵とそれにはさまれた低地であり、調査区が細長いこともあって、全地域を対象とするには今後の調査に支障をきたすであろうことが予想された。

したがって、遺跡全面にN-44° 21' 20" - Eの5mグリッドを設定し、基本的には道路長辺を西側からA・B・C……、短辺を南側から1・2・3……と呼称することにしながら、地形の起伏を意図として、中央低地をA地区、東側丘陵をB地区、東側斜面をC地区、西側丘陵をD地区と便宜上呼んだ。

発掘調査の方法は5mグリッド内に3m四方の発掘区を設けて、遺構・遺物が確認された場合は全面発掘に移行することにした。

昭和53年4月～5月

発掘調査の準備を行う。

昭和53年6月1日～8月22日・9月16日～12月1日

A地区と称した、A～H-1～11グリッドの発掘調査を行った。

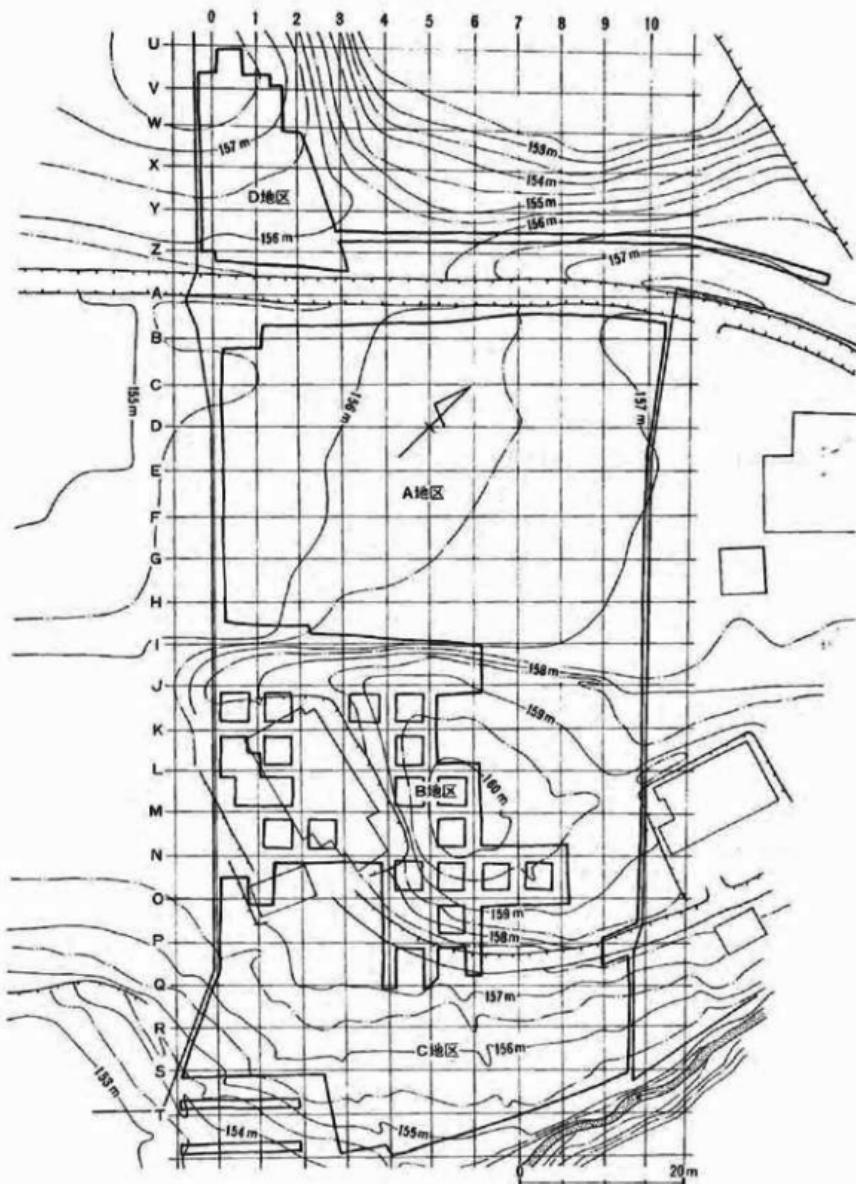
両丘陵にはさまれた、南西側に緩やかに傾斜する低地であり約2,000m²である。

調査は排土の問題から、土砂の円滑な移動を行うため南北25mに半割して、A地区一南側、A地区一北側として進めた。

遺構は大沢ラビリ層上面に中世～近世と思われる円形土塙27基、溝状遺構3基が検出された。縄文時代包含層からは黄褐色粘土を内包する土塙8基が検出された。遺物は好資料に恵まれず縄文時代前期後葉の土器片等が散在する程度にとどまった。

	53	54	55	56	(年度)
代官屋敷A地区	—	—	—	—	
B地区	—	—	—	—	
C地区	—	—	—	—	
D地区	—	—	—	—	
若宮遺跡	—	—	—	—	
整理・検討	—	—	—	—	
内実測	—	—	—	—	
報告書作成	—	—	—	—	

第2表 調査経過表



第5図 代官屋敷遺跡地形・グリッド設定図

昭和53年7月25日～9月25日・昭和55年5月28日～8月14日

B地区と称した、1～Q-1～10グリッドの発掘調査を行った。

中央丘陵部分で中央より北南に緩やかに、東西に急激に斜面をもつ。北側に茶畠、植木、南側に家屋が存在する。家屋移転にともない北側が昭和53年、南側が昭和55年に調査を実施した。調査面積は約1,650m²であった。

本地区は丘陵尾根部にあたるため、大沢ラビリ層が木の根等の擾乱を受け、その面の遺構の確認はなかった。縄文時代包含層も北側尾根上の背の部分は流失し、中央小丘櫛部に認められるだけであった。南側西部分は家屋建築の際に完全に削除されていた。

遺構は縄文時代前期後葉と思われる竪穴住居跡1基が北側尾根上に検出された。さらに良好な包含層が残存する南東側より集石跡5基、黄褐色粘土を内包する土塙1基が検出された。遺物は北側に散在的であったが、南側の平坦面に集中して縄文時代早期中葉～末葉の土器片が検出され、東側斜面からも縄文時代前期後葉と思われる土器片が集中して検出された。

昭和53年11月12日～昭和54年1月20日

C地区と称した、P～T-1～10グリッドの発掘調査を行った。

東側丘陵（B地区）の東側斜面であり、北側に斜面がきつく、南側は緩やかである。調査面積は約1,550m²である。

調査は排水の問題から南北を任意にわけて行った。南側東半分はトレーナーを設定して包含層の有無の確認を行ったが、傾斜が強く、地山面も露出していたため遺跡の範囲外と判断して全面発掘をやめた。

遺構は大沢ラビリ層上面より中世～近世と思われる円形土塙6基を検出した。縄文時代包含層からは前期末葉～中期初頭の竪穴住居跡1基が調査区中央に、その周辺より土塙4基が検出され、南西端に黄褐色粘土を内包した土塙1基を確認した。遺物は竪穴住居跡内、および周辺に集中的であったが、他は散在的であった。

昭和56年7月1日～7月17日

D地区と称した、U～Z-1～10グリッドの発掘調査を行った。

西側丘陵部分の北向き斜面で、調査区南側に最頂部をもって西、北側に急激に下って沖積地に没する。比高20m程度をもつ。南は緩やかに下り、この部分で資料が表採された。調査面積は約900m²である。

本地区は丘陵斜面のため、頂部に近い部分は表土下5～15cm程度で地山面に達する。したがって遺構は確認できず、遺物も頂部寄りの二次堆積的な褐色土内に縄文時代前期後葉の土器片・石器等が散在的に遺存するにすぎなかった。

室内における整理作業は現地の発掘調査の間隙を縫って行い、昭和53年度、昭和55年度概報を刊行した。

最終的な整理作業はD地区発掘調査終了後に行い、昭和57年3月30日に本書を刊行した。

第Ⅲ章 土層

第1節 代官屋敷遺跡の土層

本遺跡の地質的基盤は古富士集塊質泥流である。その上部に新富士火山の噴出した火山性降下物が堆積し、這構・這物はそのなかに埋没している。堆積巾は地形的制約を受ける場合が多く、本遺跡の場合も東西に2丘陵が存在するため、その部分に薄く、中央（A地区）、南（B地区南側）方向にむかって厚い。したがって詳細な土層堆積状況は各部分によって差異があるが、先にG-10グリッド北壁土層断面（第6図）によって基本的な層序関係を確認したい。

第Ⅰ層 表土層

黒色有機質土からなる表土層で、上半部は耕作土となる。下半部には小粒で少量のスコリア粒が点数している。

第Ⅱ層 大沢ラビリ層

緻密なスコリア粒が堅固なマサ層をつくる、いわゆる富士マサである。乾燥すると白っぽく変色する。

第Ⅲ層 黒褐色土層

3層に分類される可能性もあったが、特別な意味をなさないと判断して1層に扱った。

上半部は第Ⅱ層の影響を受け、小粒のスコリア粒が若干含まれるが、極暗褐色を呈した本地域でいう黒ボクである。下半部は茶褐色土と暗褐色土が互層をなしている。上半部程ではないがスコリア粒が若干含まれる。

第Ⅳ層 褐色土層

本地域で縄文時代の鐵層となる栗色土にあたるが、他遺跡で把握される栗色土層とは若干の差異を感じられるため褐色土層と呼称した。それは連続した堆積を示すものではなく、鎖状となって若干暗い層を混入するものである。少量のスコリア粒が含まれる。

第Ⅴ層 富士黒土層

大粒のスコリア粒を含む、量的には上半部に少なく下半部に量を増すが、混入度合は第Ⅲ層と同程度である。同様の黒土層であるが、スコリア粒が大粒であるため若干明るい。

第Ⅵ層 橙色土層漸移帶

橙色土層漸移帶と呼称したが、色彩的には黒褐色系統であり、第Ⅴ層の下部より徐々に大粒のスコリア粒の量が増し第Ⅶ層に連続する。

第Ⅶ層 橙色土層

大粒のスコリア粒を多量に含むため赤色に近い。スコリア粒の混入度合は部分的に差異がある、斜面に少なく平坦面、特に窪み部分に量、堆積も多く厚い。その部分は第Ⅱ層に似て堅固で乾燥すると白っぽく変色するが、混入される土層がローム系統の黄褐色土であるため

極立って白さが増すことはない。

第Ⅶ層 黃褐色粘質土層

スコリア粒が極端に減り皆無に近い。非常に粘性に富み、本土層断面内では異質である。

第Ⅷ層 暗黃褐色土層

第Ⅸ層より色調が暗くなり、スコリア粒も皆無に近い。粘性はまったくなく、むしろ小砂礫を含んで砂質である。

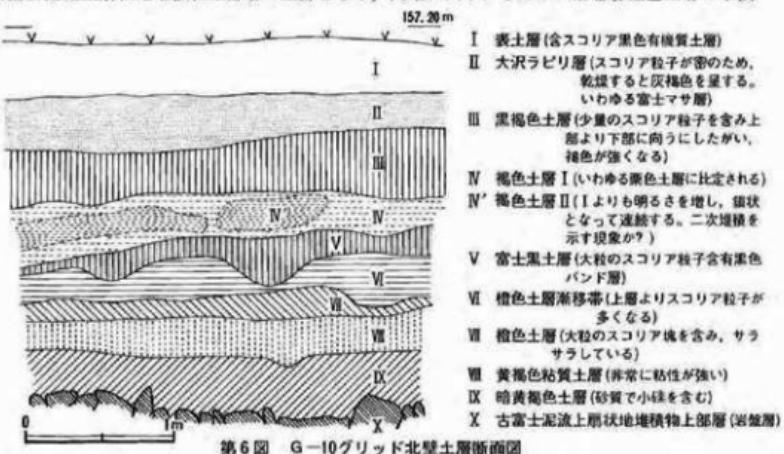
第Ⅹ層 古富士泥流上扇状地堆積物上部層

本遺跡の基盤である古富士泥流が浸食、堆積した、いわゆる扇状地の上部層である。拳大～人頭大の礫から成る。

6ライン土層堆積状況

調査区中央を北西～南東に走るラインである。A～HまではA地区と称した調査区で2丘陵より3～4m程低位の平坦面である。A・Bに第Ⅶ層橙色土が浅くなり「舟底状」の弱い谷地形を示す。したがって各層は中央部分(D～F)に深く「レンズ」状に堆積する。第Ⅰ層表土層～第Ⅶ層橙色土層間は約2m程である。Iで2m程の段が作られたため、Hでは第Ⅱ層表土層下数cmで第Ⅹ層古富士泥流上扇状地堆積物上部層の上部が露出し、G付近より第Ⅱ層大沢ラビリ層以下第Ⅷ層橙色土層漸移帶が削取されている。

J～PまではB地区と称した調査区で両端に低くなる「半球」状の鞍部である。第Ⅰ層表土層は薄く、第Ⅱ層大沢ラビリ層も耕作、樹根などで軟弱である。第Ⅲ層黒褐色土層以下は非常に複雑で上、下が逆転する箇所もみられる。頂部にあたるMでは第Ⅰ層表土層下数cmで第Ⅹ層古富士泥流上扇状地堆積物上部層の上部となり、両端に向うにしたがい第Ⅶ層橙色土層の堆積



第6図 G-10グリッド北壁土層断面図

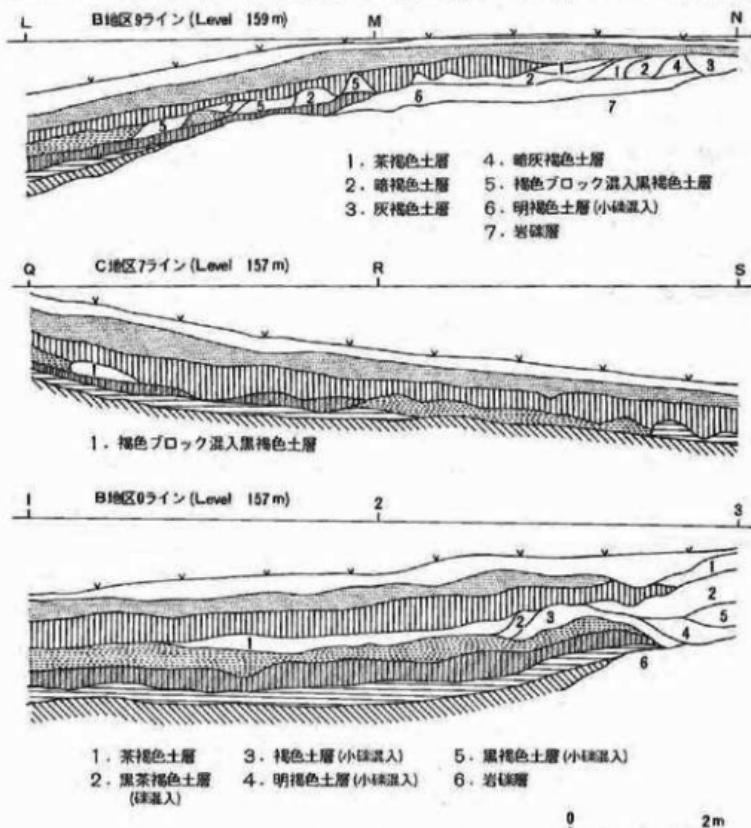
をみると、第Ⅰ層表土下数10cmと巾は薄く、各層が複雑に絡み合って分層に困難を要する。

Q～Tまでの東側斜面がC地区と称した調査区である。B地区より第Ⅱ層大沢ラビリ層の堆積巾は厚く堅固となり、第Ⅲ層橙色土層間も1m前後と厚くなる。しかし第Ⅲ層黒褐色土層以下は同様に複雑な様相を示す。なお調査区東側を南流する小河川（鍋沢）付近では第Ⅱ層大沢ラビリ層下に砂質層が存在する箇所もみうけられる。

○ライン土層堆積状況

調査区中央東寄りを北東～南西に走るラインである。それは小丘鞍部（B地区）を縦断する。

1～3に基本層序とした堆積が残る。第Ⅰ層表土層～第Ⅲ層橙色土層間の堆積巾は2m程度である。3・4で宅地造成のため第Ⅱ層大沢ラビリ層が削除されており、4～10にかけては斜面



第7図 地区别土層断面図

となるため前述したB地区堆積状況と同様に薄く複雑となる。

それは3・4付近で基本層序とした堆積と接する。状況を詳細に示すと1～3の第V層橙色土層は南西方向に若干高位となるため「舟底」状となる。したがって第VI層橙色土層漸移帶、第V層富士黒土層が「レンズ」状に堆積して一応の平坦面を形成する。その上部を第IV層褐色土層が覆うが4付近では第VI層橙色土層以下の褐色土系土層の2・3次堆積土層に連続する。つまり小丘上部の堆積土が低位部分に流入して層位が逆転した結果である。

この状況が第IV層褐色土層=栗色土層にあてられない原因である。基本層序で述べたように明暗をもつて「鏡」状となる状況は確実に小丘より流入、堆積した2・3次堆積を示すものであって、他層も同様であろうことは言うまでもない。

第2節 土層と遺構

本地域の遺構・遺物の包含層、各層の年代については淹戸遺跡の発掘調査によって指標される。
註1

第II層 大沢ラビリ層

富士火山西南麓に広く分布し、その堆積時期はB.P(1950年を0年とする)約2,700年前であり、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の遺構は第II層を切って構築、遺物は第I層表土層下部を中心に包含される。

第III層 黒褐色土層

極暗褐色土層と下層の栗色土層との漸移帶層に分層されているが、本土層分類では上・下層と理解してよいであろう。堆積時期は極暗褐色土層が混入するカワゴ平バミス(天城火山群のカワゴ平火口由来の安山岩質軽石)からB.P2,880±120年前に、漸移帶層は散在する赤色スコリア粒が千居遺跡や田貫湖周辺に標式的にみられる千居ラビリ(赤田貫)に該当するとして、千居遺跡の発掘調査結果より、およそB.P3,500年前後と考えられている。この層には縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物がみられ、遺構は漸移帶層中を主体に存在する。

第VI層 栗色土層

本土層分類の褐色土層にあたり、下部を漸移帶層としている。この層は鬼界ヶ島カルデラ起源と思われる茶色の火山ガラスが混入していることからB.P6,000年前位であり、栗色土層下部に縄文時代中期前葉の遺物が包含される。

第V層 富士黒土層

富士山東麓ではその堆積時期がB.P6,000～8,000年前とされている。縄文時代早期中葉～前期の遺物が包含される。

第VI層 橙色土層漸移帶

層の確認がなかったか、下層に含めたためか記述はない。

第VII層 褐色土層

本遺跡土層分類の橙色土層にあたる。ツツウ輝石を多量に含む点から休場層（沼津市休場遺跡で細石器の包含層となつたことから命名された）の最上部にあたり、堆積時期は洪積世最末期～沖積世初頭（B.P10,000年位前）と考えられる。旧石器時代包含層とされる。

次に本遺跡の遺構・遺物と土層の関係を述べよう。

第Ⅱ層 大沢ラビリ層

中世～近世にかけてと思われる円形土塙と溝状構が検出される。本来は第Ⅰ層表土層下部より構築されている状況が認められる。

第Ⅲ層 黒褐色土層

A地区には縄文時代前期後葉～末葉の土器片が散在的に包含されている。しかし比較的まとまった資料を検出するB・C・D地区では複雑な土層堆積状況下で明確な包含層は認められない。さらにC地区褐色土系2次堆積土層内に検出される土器片とA地区検出土器片が接合される事実もあり、滝戸遺跡の成果からしても本層が縄文時代前期後葉の包含層であることは疑問である。

豊穴住居跡は縄文時代前期後葉～中期初頭に位置付けられるが、第1号豊穴住居跡がB地区小丘上、第2号豊穴住居跡がC地区斜面に構築されることから明確な構築層位を得ることはできない。一般的な縄文時代土塙も同様である。

第Ⅳ層 褐色土層

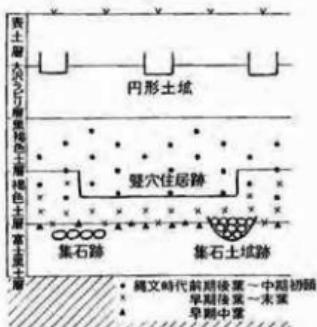
褐色土層上面に黄褐色粘土を内包する土塙が検出される。

遺物はA地区に確認はなく、B地区南側に良好な資料が検出される。それは斜面より下る褐色土系2次堆積層に連続する土層である。下層の第V層富士黒土層上層にかけて縄文時代早期後葉～末葉の土器片が包含される。

第Ⅴ層 富士黒土層

第Ⅳ層下部より富士黒土層上部にかけて集石跡5基が検出される。明確に集石跡に伴う土器は得られなかつたが、縄文時代早期中葉～末葉に営まれた遺構であることは確実である。上面には縄文時代早期中葉土器片の遺存をみる。

以下、下層に遺物の包含はない。



第8図 土層と遺構の相関図

註！ 増島淳 1978『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅱ次）概報』富士宮市教育委員会

第Ⅳ章 繩文時代

第1節 遺構

1.集石跡

集石跡はN～P-1～4グリッドの平坦部に5基がまとまって検出された。検出層位はおおまかに第V層富士黒土層上面であった。縄文時代早期中葉～末葉の土器片が覆うように散布して、また下部には包含層をもたないことから、その時間巾のなかに営まれたものであろう。

第1号集石跡（第11図、図版第8）

第1号集石跡は0-2グリッドの南東隅に検出された。南北140cm、東西130cm程の範囲に36個の角礫で構成されていた。礫は25-30cm、10cm、5cm前後のおよそ3種類である。礫に加熱、加工痕は認められない。

集石状況は小形礫を配した後、上部に大形礫をのせて瞬間部分に中形礫を詰めている。集石の高低は20cm程で、各礫ごとに接点をもって連続していた。平面形に企画性を見い出すことはできないが、主体としては南北に列状となって他は粗となる。他集石跡より大形礫が目立つ。

遺物は内部に数点の頁岩片が混在していた他はない。

第2号集石跡（第12図、図版第8）

第2号集石跡はP-3ポイントより南へ1m程、東側丘陵より南東方向へくだった斜面が平坦面に変わった部分に検出された。範囲は南北75cm、東西80cmを測る。検出過程で南半部の大形礫を数個除去してしまったが、ほぼ円形に配置されたものと思えた。

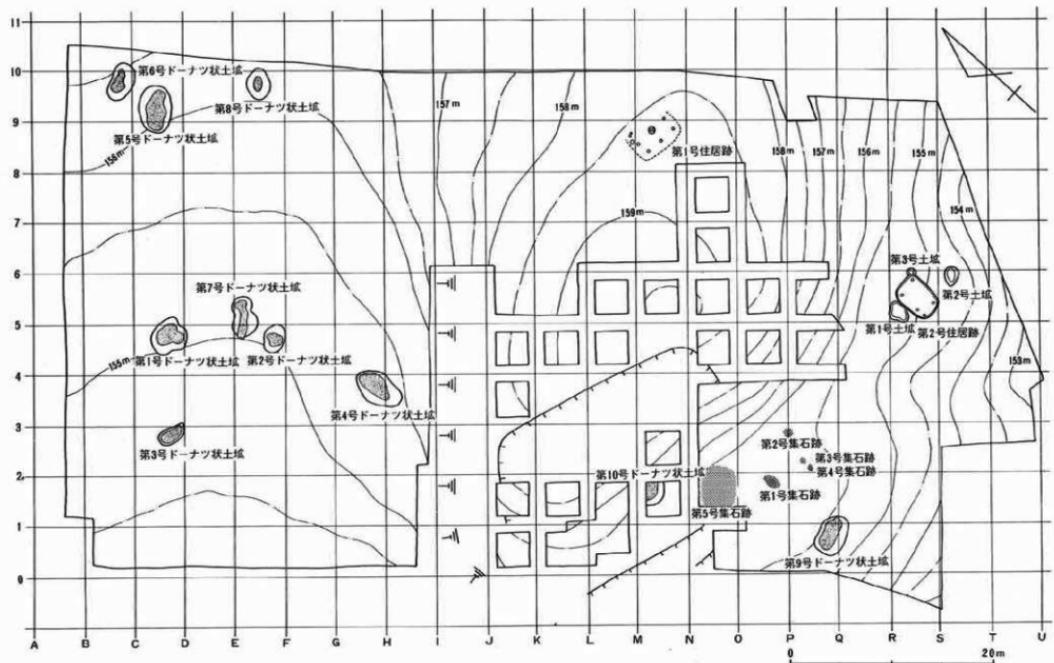
残存する集石跡の大部分は富士黒土層に位置していた。そのため検出時には明瞭な土塙を判断できず、後になって礫を除去しながら周囲より若干暗い土層、少量の炭化物混入土を取り除いた結果、「集石土塙」と判明した。土塙南半部はグリッド発掘によって削除されたが、推定される規模は検出面で径90cm、深さ20cm程を測る椀状の土塙であった。

構成される礫は全て角礫で25-30cm程を測る大形礫と10cm前後の中形礫からなり、南半部の大形礫を除去したため定かでないが、南半部に大形礫を、北半部に中形礫を配する状況が伺えた。礫に加熱、加工痕は認められない。

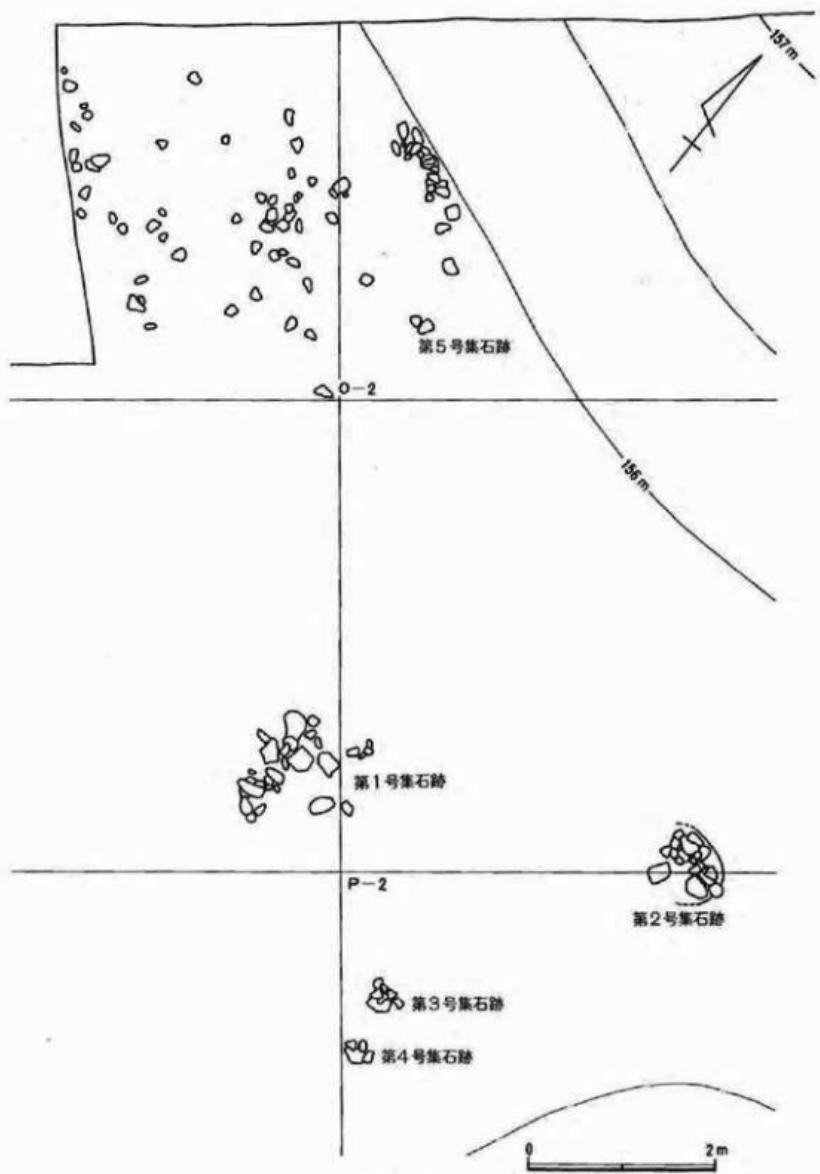
遺物は集石内、おそれび塙内には皆無であった。しかし本集石土塙跡が褐色系土層中程より構築が予想されること、周辺の土器が広義の茅山系土器群に限られることから、他集石跡との形態差も考えて、それより後出であるとしてさしつかえないであろう。

第3号集石跡（第13図、図版第9）

第3号集石跡はP-3グリッド南西寄りに第4号集石跡と0.5m程離れて検出された。集石状況は25×20cm、厚さ3cm程の赤色偏平礫の上部に10cm前後の角礫を4個重ねてあった。この赤色礫は火山性のもので加熱によるものではなく、角礫は割礫されたものでなく自然礫である。



第9図 純文時代遺構全体図



第10図 集石跡全体図

範囲は偏平礫の中のなかに納まるように30×20cm程で、集石の高低15cmを測り、計5個の礫からなる小規模のものであった。

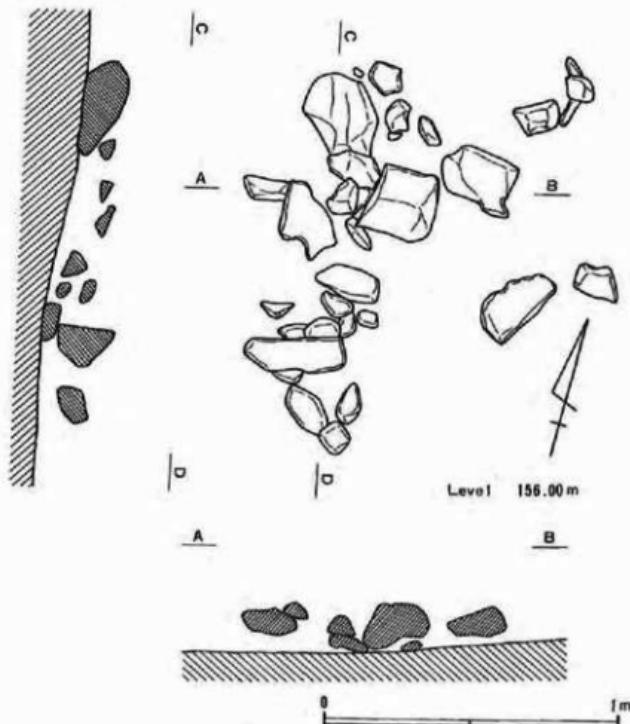
検出面は褐色土層下部で、集石跡下部は富士黒土層内に含まれていた。調査で確認できなかったが、集石跡下部の同一レベルに遺物の包含がないこと、構築状況が立面上的であることを考へると『集石土塙』の可能性がたかい。

遺物は集石内部には確認されなかった。上部に条痕文土器片と橢円押型文土器片が検出されたが偶然性のたかいものである。

第4号集石跡（第13図、図版第9）

第4号集石跡は第3号集石跡の南0.5m程離れて検出された。集石状況は第3号集石跡にちかい形態を示し、中央に20×15cm程の偏平状角礫を置き、10cm前後を測る角礫3個で囲むよう配されていた。礫には加熱・加工痕は認められなかった。

範囲は東西35cm、南北25cm程、高低は10cm弱を測り、ほとんど平面的で小規模であった。



第11図 第1号集石跡実測図

検出面は褐色土層下部、集石跡下部は富士黒土層上面であつて、第3号集石跡とほとんど同様であった。やはり調査によって確認できなかつたが、「集石土塙」の可能性をもつと言えよう。

遺物の遺存はなかつた。

第5号集石跡

(第14図、図版第10)

第5号集石跡はN-3グリッド南東寄りからN-2グリッドにかけて検出された。

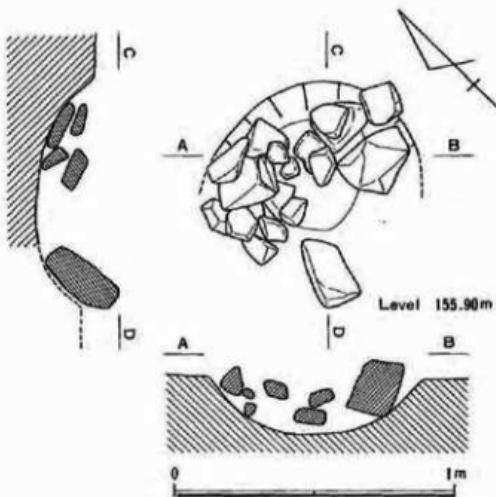
範囲は南北400cm、東西400cmで、第1~4号集石跡と比べて広域で集石形態は異なる。

南西側を家屋の農業用便槽によって攪乱されて範囲は明確でないが、ほぼ全容を検出したと思う。

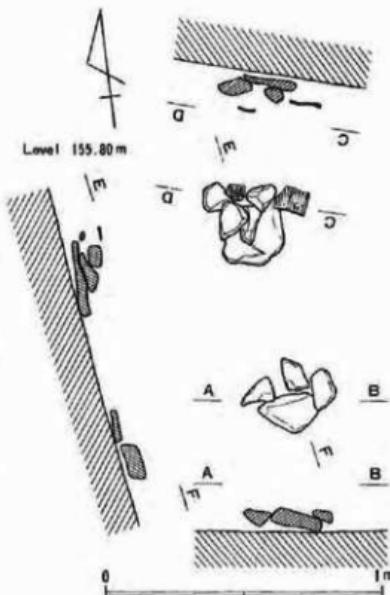
構成される礫は比較的平均したまるみを帯びる角礫で、10~20cm前後を測る。大形礫は用いることなく他の集石跡の構成礫とも異なる。礫数は79個であった。加熱・割砕等加工痕は認められなかつた。

集石状況は北側に列状となって密な部分が、中央に極端ではないが密な部分が円状に、さらに南側に列状となっていた。したがつて3基の集石跡の集合にみえるが、集石跡外縁が粗密の差はあるものの環状となって巡ることから1基として扱つた。形状から「配石」的性格が伺えた。

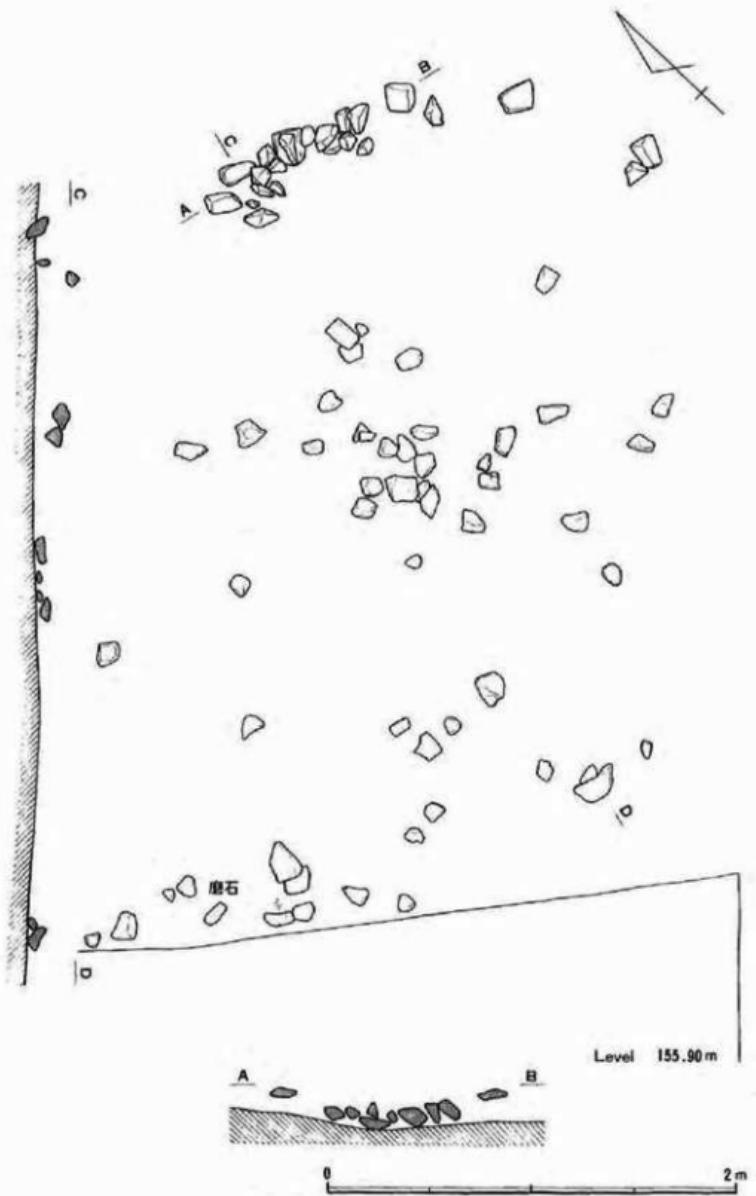
集石跡の高低は20cm程度であるが、若干の傾斜地に位置するため同一面に配されたものである。範囲内に土塙状落ち込みは検



第12図 第2号集石跡実測図



第13図 第3・4号集石跡実測図



第14図 第5号集石跡実測図

出されなかった。

検出面は富士黒土層上面であった。したがって他集石跡より時期的に前出と思われる。

遺物は南西側の外縁部に三角柱状の特殊磨石、いわゆる「こくぎり石」が検出された。集石跡内部に土器の遺存はなかったが、上部には撫糸文土器が集中して検出されることから、それを伴うとしてよかろう。

集石跡について

集石跡はおおきく『配石遺構』に包括される。広範囲に総合的な配置をなす配石遺構に対して、小単位で無造作にちかい状況をなす。主体的に縄文時代早期遺跡に発見され、前・中期に至るまで続く。近年、集石跡として独立して呼称される。

集石跡、あるいは集石土塙跡の一般的特徴は加熱による赤色礫、加熱・人為的割礫等によって構成される。礫は割礫等の行為が意味をもつかのように挙大の礫が普通で人頭大をこえるものはない。集石跡は粗密の差をもつが200×300cm程度の範囲に限られる散在的なものと、50~100cm前後に集約されるものがある。集石土塙跡は径100cm前後の塊状を呈した塙内に礫が充満、ないしは塙底より若干浮いて内包される。塙内には炭化物等が含まれる例もあるが、塙内に焼成された痕跡をもつものは少ない。中部高地等に認められる集石炉とはおのずから性格を異とする。集石跡においても焼成された痕跡を内部にもつ例はさらに少ないと。

上記の特徴から早期遺跡に伴出関係をもって発見される炉穴跡に類するものとする考え方^{註1}が一般とされつつ、蒸焼に使用された跡、それに使用された焼石を廃棄した場所に発展させるむきもある。さらに中・後期に盛んになる集・配石遺構の初源的なもの、いわゆる墓域・祭祀の場^{註2}等の性格もある。

本遺跡の集石跡は第5号集石跡が第II群土器（撫糸文系土器）を伴ってもっとも前出で、第2号集石跡（集石土塙）が第V群土器（茅山系土器群前半）を伴ってもっとも後出である予想はされる。他は具体的な伴出土器をもたないため時期的に不明瞭であるが、検出面が褐色系土層下部であり、構成礫が第5号集石跡と若干差異をもつて第2号集石跡（集石土塙）に類似し、第3・4号集石跡が集石土塙の可能性をもつことなどから第2号集石跡（集石土塙）にちかい構築が考えられる。したがって時期的にも、比較的形態の異なる集石跡の集合であるが、共通する特徴は全て角礫が用いられ、加熱礫、および加熱による割礫、人為的な割礫は認められない。いいかえれば『火』に関する行為は全く認められないことである。^{註3}

本地域の縄文時代早期集石跡（含・集石土塙跡）は駿東郡長泉町陣場上遺跡調査報告に集成^{註4}される。資料的にはいまだに貧弱であるが、火に関する行為が認められないのは沼津市元野遺跡^{註5}であり、石材集積所の性格があげられている。長泉町陣場上遺跡をはじめとして他遺跡は火に関する行為、割礫行為を有する例が多い。

構成礫は伊東市吉田シンジ山遺跡、修善寺町桜台遺跡が比較的小形の自然礫、熱海市ゆざり^{註6}

葉遺跡が角礫と以外に差異をもつ。割礫行為がある種の儀礼的な行為であるとするなら本遺跡例はまったく意味をなさないものとなる。むしろ挙大・人頭大をこえることない構成礫の『大きさ』を考えたい。集石形態は中・後期に盛隆する、意図をもった『配石』行為に対して、『集める』ことを行為とした場合大過ない。

『火』に関する行為、おおきくは礫自体の加熱、周辺の焼土跡等の存在であるが、ガ穴跡を伴う遺跡では納得される。しかし炉穴跡の消滅後、周辺に焼土跡の確認のないまま加熱礫による集石跡を有する遺跡例が多いのは何故か。

本地域の岩盤露出地には火山性赤色礫が多く認められる。本遺跡周辺も例外ではない。したがって集石構成礫中に赤色礫が含まれる場合が多く、岩盤露出地の赤色礫混入率よりたかい比率で混入する。若宮遺跡^{注10}にも時期差をもつが同様である。本地域の特徴とするか、『火』に関する行為に対応すべき行為かは判断できない。類例をまちたい。

煮沸に関する可能性は完全に皆無である。故に中期後葉～後期に盛隆する配石遺構の初源として墓域、祭祀の場を設定するには早急である。集石跡（含 集石土堆跡）の一形態として提起するに止めた。

2. 積穴住居跡

積穴住居跡は東側丘陵鞍部上に第1号住居跡、南東側斜面に第2号住居跡が検出された。

第1号住居跡

（第15図、図版第11）

第1号住居跡はM-9グリッドに検出された。北西側に傾斜の始まる部分にあたるため、土層堆積状況は薄く複雑な箇所であった。

検出状況は第2層大沢ラビリ層直下に炉跡が確認されたことから周辺の精査を行った結果、数本の柱穴状ピットが炉跡を囲むように検出された。しかし壁面は流出、床面も炉跡北西半部½以上を損失していた。

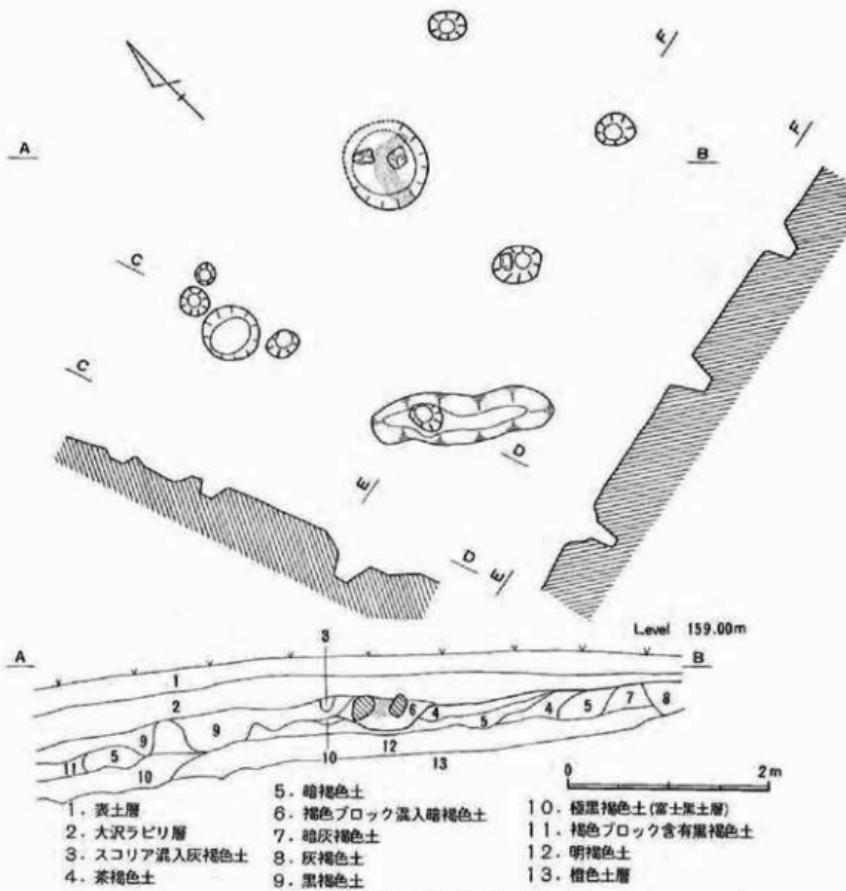
床面下の状況も褐色土系堆積上に黒褐色、灰褐色等の2次堆積土が互層をなして、正確な構築面は明らかでなかった。

遺物は皆無で時期判断する資料に欠けるが、両側斜面より諸磧b・c式の土器片が検出されることから、伴った可能性をもつとした。

炉跡は径約90cm、深さ約30cmを測る円形のすり鉢状掘り方を有し、巾約20cm、長さ約60cm、厚さ20cm程を測る帶状の焼土を対にして20cm程の角礫が2個置かれていた。

柱穴状ピットは南側に列状に3本、炉跡東側に1本、西側に小ピットを含めて4本が検出された。東～南側ピットは状態もよく径30～40cm、深さ20～40cmを測った。

これらピットの配置から、本住居跡は475×330cm程を測る方形にちかい形状が推測された。



第15図 第1号住居跡実測図

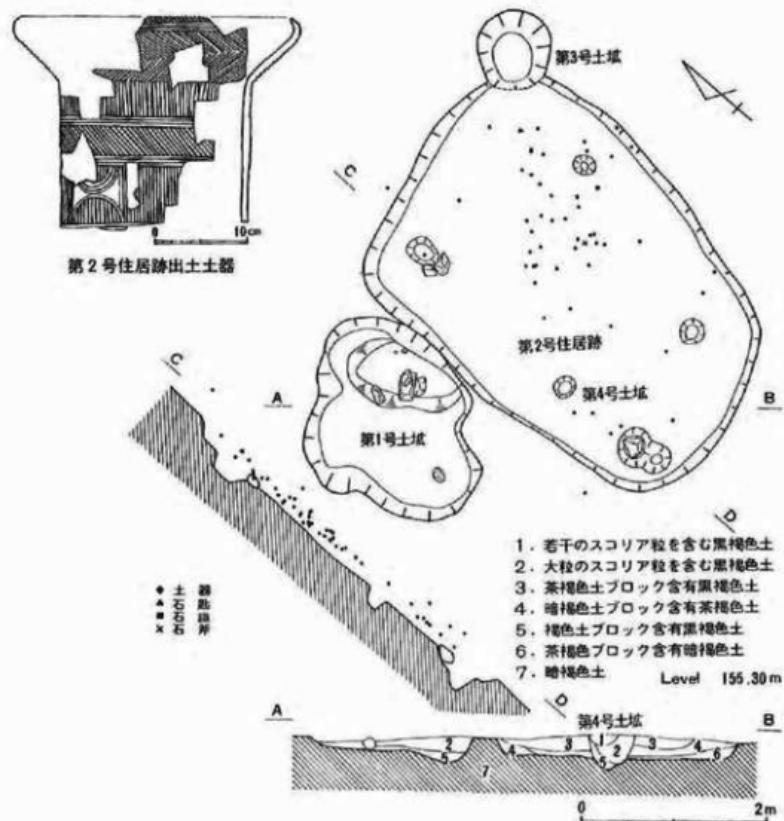
第2号住居跡（第16図、図版第12）

第2号住居跡は東側丘陵より南東側に下がる斜面が若干勾配を緩める部分、R-6グリッドに検出された。発見はR-6グリッド一帯に周辺土層より若干暗い土層が堆積し精査した結果、同一個体と思われる土器片が集中して検出されたことによる。

検出面は斜面上であって基本層序に認められない暗褐色土層であった。再堆積土層である。下層に富士黒土層は認められず、橙色土漸移帶層から橙色土層に達していた。

規模は450×330cm、床面積14.85m²を測り、平面形は若干歪んだ隅丸長方形、住居跡長軸方位はほぼ南北にとっていた。

床面は比較的綺麗であり、検出された壁上端までの高さは約20cmを測った。



第16図 第2号住居跡および第1・3・4号土塙実測図

柱穴は4本検出された。西列は壁際に接するように径30cmと太い。両柱穴とも10~20cmの礫を捕強し、南柱穴は段掘りされていた。東列は径20cm前後で貧弱である。深さは15~25cmであった。炉跡は確認されない。

遺物は住居跡覆土から床面にかけて、一面にひろがって遺存し、50~60片の破片の状態で深鉢型土器1個体（第16図・第25図259）が検出された。縄文時代中期初頭、五領ヶ台式土器に比定される。その他に床面より打製石斧（第32図85）、石點（第33図91）、石鎌（第28図48）各1点の出土をみた。

本住居跡は西壁に接して第1号土塙、北東隅に第3号土塙、西辺中央に第4号土塙を重複していた。第1・3号土塙は新旧関係を土層断面に確認できなかったが、第1号土塙内より検出

された土器片は本住居跡出土土器より先行するものである。第4号土塙は明らかに本住居跡より後出であった。

竪穴住居跡について

縄文時代前期後葉～中期初頭の竪穴住居跡の調査例は非常に少なく、本地域に初例である。本遺跡の竪穴住居跡は第1号住居跡が不確定要素も多いが、形状は方形、時期は諸磯系土器群の時間軸が考えられる。第2号住居跡は五領ヶ台式期の所産である。形状は若干重んだ隅丸長方形、詳細には南半部が円形、北半部が方形である。

この時期に至ると竪穴住居跡形状が、前期的な方形から中期的な円形への変換が計られることが関東地方を中心と予想されている。

その過程をとらえた例は少ない。神奈川県横浜市東方第4遺跡に十三菩提式期住居跡が円形ともとれる不整形方形、西に300m程した東方第7遺跡に五領ヶ台式期住居跡が椭円形で検出された。一方→円への転換が十三菩提式期と五領ヶ台式期の間か、五領ヶ台式期のなかで行われたかは疑問としながら、十三菩提式期の円形ともとれる不整形住居跡を過渡的な前段階に意味をもっている。^{注12}

この過渡的住居跡の存在に対して、中部山岳地方には地域によって円形、方形、円・方形両系が併存する。より中期的な諸要素を含んだ住居跡と、いまだ完全に前期的な形態から脱却できない住居跡が併存して、中期初頭に至ると、具体的には九兵衛尾根I式期への移行期に円形系統住居跡へ転換、包括される。したがって南関東地方に円形系統住居跡が個定する前段階に一方→円への移行的中間形態の崩れた方形、不整形の存在の普遍的ありかたに疑問するむきもある。^{注13}

本遺跡の第2号住居跡は五領ヶ台式期の古い段階に併行する。住居跡形態が各地方によって個有の条件を有し、その変換に際しては他地方の文化の流入・進展が考えられるならば、あくまでも関東的土壤になりたっており、過度的形態の存在の有無を考えざるを得ない状況下にある。

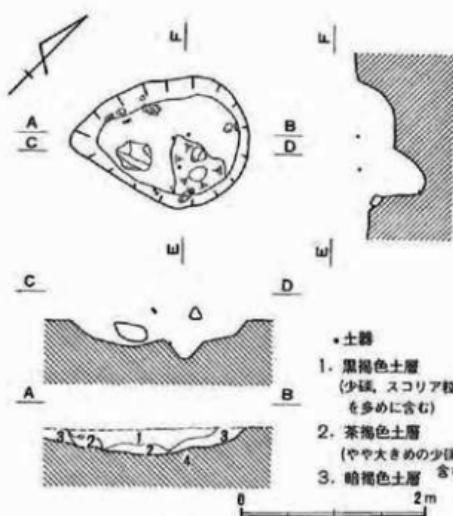
ここではやがて中期円形系統住居跡に包括されべき外郭地域の前段階としての、地域性の相違、社会構造、あるいは集団の背景に意味をおきたい。本地域における条件は不充分すぎる。

3. 土 塙

縄文時代包含層より検出される一般的な土塙である。R-6グリッドに検出された第2号住居跡に重複、ないし隣接して4基が検出された。

第1号土塙（第16図）

第1号土塙は第2号住居跡西壁に接するように検出された。



第17図 第2号土塙実測図

45cm、深さ塙底より25cmの小ビットが掘り込まれていた。

塙内には大小の角礫が10個程置かれていた。埋土上部から小ビット底面に諸磯b式土器(第22図131~134)が検出された。第1号土塙同様に縄文時代前期後半の所産とした。

第3号土塙(第16図)

第3号土塙は第2号住居跡の北東壁隅に重複して検出された。新旧関係は不明である。

形状は円形にちかく、規模は85(推定)×80cmを測る。断面形は椀状で深さ15cm程を測った。遺物の出土はなかった。

第4号土塙(第16図)

第4号土塙は第2号住居跡の埋土内、西辺中央に検出された。土層帶内に存在したことから上半部が削取された。新旧関係は本土塙が後出であった。

形状は円形が推測される。土層断面によれば径50~60cm、深さが30~40cm程であった。

遺物の出土はなかった。

土塙について

土塙自体、いくつかの性格、機能を有してひろい意味をもつ。

本遺跡の土塙は比較的大形一小形が認められ、特別に深い例はない。

第2号土塙底面に小ビットが掘り込まれるが、一般にいわれる「落し穴」に設置されるビッ

形状は不整、達磨形に近い。規模は205×165cmを測る。断面形は皿状で、底面東側部分に150×82cmの梢円形落ち込みを有して、深さ15~20cmを測った。

落ち込み内には10~30cmを測る角礫が4個置かれていた。底面、周辺より諸磯b式土器(第22図135)が検出された。縄文時代前期後葉の所産とした。

第2号土塙(第17図)

第2号土塙は第2号住居跡東壁より東側へ2.5m程離れたS-6グリッド北隅に検出された。

形状は卵形、規模は195×140cmを測り、断面形は椀状にちかく、深さ20cm程を測る。底面には70×

トとは性格が異なる。

第1・2号土塙は諸磯b式期の所産である。塙内に礫が散在するが、集石土塙的な配置でなく、同時に、埋没時に上部に置かれた様子が伺える。土塙埋土は褐色系ブロック土が含まれることから人為的な埋没行為も考えられるが、検出数から性格、機能を論追するには至らない。

4. 黄褐色粘土を内包する土塙

黄褐色粘土を内包する大形の土塙である。検出面である褐色系土層において平面形をとらえると、褐色系土層と内包される黄褐色粘土間に黒褐色系土が環状、ないしはそれにちかい形で流入して、平面形がいわゆる『ドーナツ』状となるため、本土塙群を『ドーナツ状土塙』として一般的土塙と区別した。

※黄褐色粘土を内包としたが、これは検出当初に内包された土質が褐色土層より粘性を帯び、黄色にちかい褐色系土であったため、以後統一して呼称したことによる。全ての土塙に共通するものではなく、各土塙は内包される土質に差をもつ。

検出状況は褐色系土層が再堆積層であり、その表面もリング状の連なりとなるため、断面観察の段階で確認される場合が多い。したがって大半が $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ を削取された状況となった。

遺物は全土塙より出土しない。

第1号ドーナツ状土塙（第18図、図版第14）

A地区調査区域の中央C-5グリッド北東隅に検出された。

平面形は「8」字状で 388×350 （推定）cmを測り、断面形も中央に段をもった「3」字状で最深部で120cmを測った。形状から2基の重複の可能性もあつたが、明確な重複断面が観察されず1基と認めた。平面観察の不確から南西部分 $\frac{1}{3}$ を削取してしまった。

黄褐色粘土の内包状況は平面形の50cm程内側に沿った状態でやはり「8」字状となり、厚さは80cm程を測った。北側部分に黄色の粘質土が濃く、南側に薄い。

底面、壁面との境いには黒褐色系土、ならびに褐色ブロック土が流入していた。底面は橙色土層をぬき、下部層である黄褐色粘土質土層に達していた。内包される土質はこの黄褐色粘土質土であることが判明した。

第2号ドーナツ状土塙（第18図）

第1号ドーナツ状土塙より南東へ7m程したE-5グリッドの北東隅に検出された。内包する黄褐色土が薄く、土塙も浅いことから約 $\frac{1}{3}$ 程を削取し、土層観察によって確認された。

平面形は隅丸長方形を呈するようで、規模は 207×250 （推定）cmを測り、断面形は皿状で深さは55cm程であった。底面には30cm程の小ピットを持っていた。

内包される土質は黄褐色粘土とするよりは褐色土が濃い状態であった。内包の範囲は平面形と反して南北方向にひらがりを持ち、 170×170 cm、厚さ30cmを測った。

底面は橙色土漸移帯層に止まり、壁面間には褐色ブロック土に若干の黒褐色系土が混入する状況で、平面形は明確な環状となっていた。

第3号ドーナツ状土塙（第18図、図版第14）

第1号ドーナツ状土塙より南西に8m程したC-3グリッド北東隅に検出された。検出時に西側 $\frac{1}{3}$ を削取してしまった。

平面形は不整の長円形に近く、規模は175×300（推定）cmを測り、断面形は皿状で深さ65cm程を測った。

内包する土質は第2号ドーナツ状土塙と同様に黄色が薄く、褐色土が濃い状況であった。範囲は平面形より30cm程内側に沿った状態で厚さは30cm程を測った。

底面は橙色土層上面に止まり、底面、壁面間は褐色ブロックに若干の黒褐色系土が混入する程度で、やはり明確な環状を呈していなかった。

第4号ドーナツ状土塙（第18図、図版第14）

第2号ドーナツ状土塙より10m程南、G-4グリッドの東隅に検出された。B地区からの傾斜が平坦面に変ろうとする地点で表土より橙色土層間がせまい状況にあった。検出時に西側 $\frac{1}{3}$ を削取してしまった。

形状は南北に長い不整の長円形で、規模は515×315（推定）cm、断面形はすり鉢状で深さ80cm程を測る。比較的大形の土塙であった。

底面は橙色土から下部層にかけて深く達しており、地山礫が露出していた。したがって内包される土質は黄色に近く粘性をもつが、黄褐色粘質土内には多くの拳大の礫が含まれ、それが地山礫に類似することが知れた。

範囲は平面形に沿って380×200cm、厚さ80cm弱で、斜面側では地山と内包される土質が区別つきにくく、黒褐色系流入土がつくる環状は半月状となった。底面部分も同様であった。

第5号ドーナツ状土塙（第18図、図版第13・14）

A地区調査区域の北辺、第7号ドーナツ状土塙の南1.5m程のC-9-10グリッドに検出された。若干北側に向って地山（橙色土）がたかまる地点で検出面も比較的浅かった。

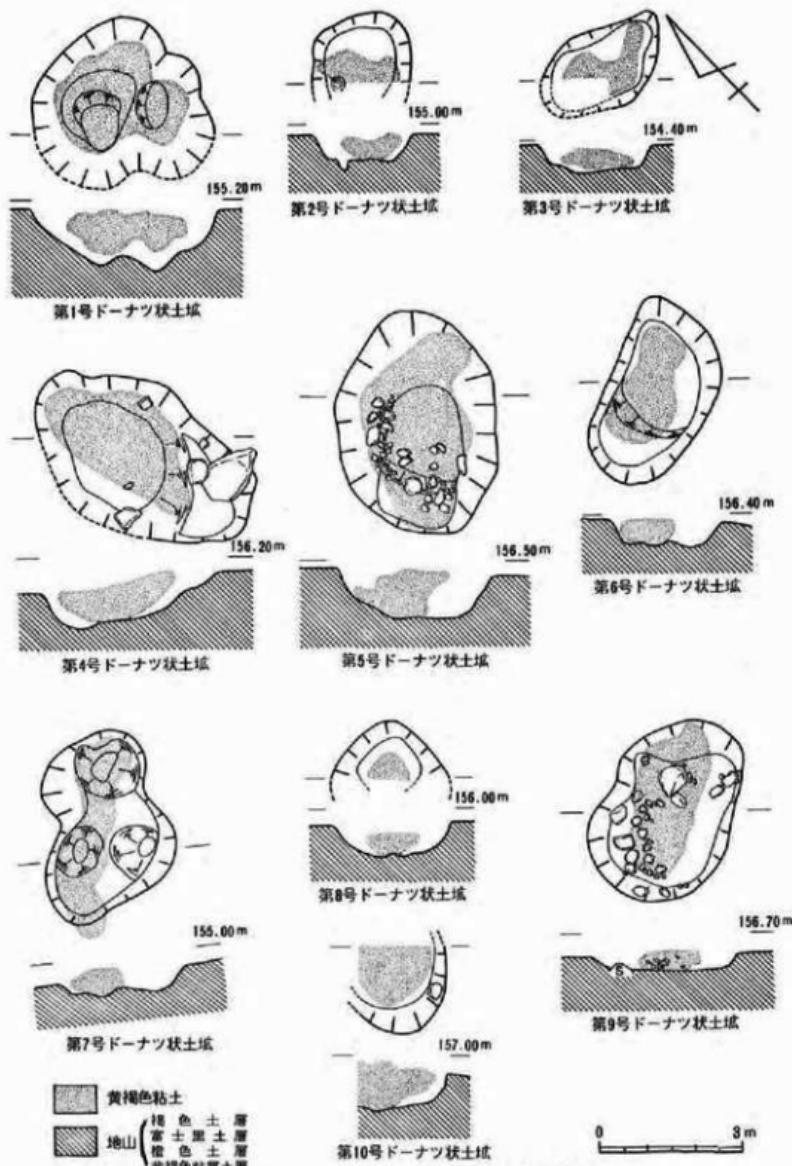
形状は若干不整となった卵形で、規模は475×335cmを測る。断面形は椀状で深さ100cm程を測り、底面は橙色土から下部層の小礫含有土層に達していた。

内包される土質は粘性に富んだ黄褐色土が上部に、小礫を多く混入した黄褐色土が下部に位置し、斜面側には人頭大から拳大の礫があつかも人に配されたように黄褐色土をまいていた。

範囲は黄色の濃い部分は平面形と同様に卵形にちかい。全体的には南北に長い不整形で400×150cm、厚さ90cm程を測る。したがって南北に黒褐色系土の環状がせまくなっていた。底面部分は地山層と区別がつきにくかった。

本土塙は比較的良好に残存、検出できた。

ここで詳細に内包される土質を検討すると、地山となった橙色土層の下部層である黄褐色粘



第18図 黄褐色粘土を内包する土塙実測図

土質土層、暗黄褐色土層、古富士泥流の岩礫層が、そのまま宙に浮いた、もしくは逆転した状況であり、その間に黒褐色系土が流入していた。この過程のもとに礫群混在率の多い斜面側部分にあたかも人的な配置とも思える礫群が土坡表面に浮いたと考えられる。

第6号ドーナツ状土坡（第18図、図版第14）

第5号ドーナツ状土坡の北1.5m程のB-10グリッドに隣接して検出された。やはり地山（橙色土層）がたかまつた地点で、検出面も浅かった。

形状は不整の長円形で、規模は380×220cmを測り、断面形は皿状で深さは60cm程を測った。底面は橙色土層下部層に達して若干凸凹であった。

内包される土質は第5号ドーナツ状土坡に類似し、上部に黄褐色の粘性の強い土質が、下部に小礫を混入する暗黄褐色土となっていた。

範囲も黄色の濃い部分が斜面側に寄り、全体としては250×150cm程の「8」字状となっていた。厚さは50cm程を測って底面に接していた。環状に流入する黒褐色系土に黒耀石片が2点検出された。

第7号ドーナツ状土坡（第18図、図版第14）

A地区調査区中央のD-E-6グリッドに、第1・3号ドーナツ状土坡にはさまれて検出された。

形状は第1号ドーナツ状土坡と類似して不整の「8」字状となって、規模は400×250cmを測る。断面形も類似し、さらに底面には100cm前後の落ち込みを3個所もって凸凹であった。深さは最深部で67cmを測り、底面は橙色土層移帯層から橙色土層中に達していた。

内包される土質は底面が浅いためか、粘性に富むことなく黄色も弱かった。範囲は平面形に沿って細長く330×80cm、厚さは底面に接して60cm程を測った。南西側は平面形より30cm程せり出していた。したがって黒褐色系流入土は南北側にひらく、「8」字状の一隅が切れた形となっていた。

第8号ドーナツ状土坡（第18図、図版第13・14）

第5号ドーナツ状土坡より13cm程南東にむかったE-10グリッドに単独で検出された。下層の調査の為、その過程で1%以上を削取してしまった。

形状は卵形にちかいと思われ、規模は250×350（推定）cmを測る。断面形は椀状で、底面は橙色土層上面に止まっていた。深さは70cm程を測った。

内包される土質は比較的粘性が強く、黄色の強い土質を褐色粘質土が包む状況であった。範囲は平面形より70cm程内側に同様の形状で内包され、厚さは50cm程を測った。底面には黒褐色系土が流入して、断面形では浮いている状況であった。したがって平面的にとらえると「ドーナツ」状を呈していた。

第9号ドーナツ状土坡（第18図、図版第14）

C地区西端、B地区よりぐだる斜面が平坦面に変わるP-1グリッドに検出された。さらに

南にくだる斜面の頂部にあたるため岩礫層が露出して、検出面も浅かった。

形状は不整の隅丸長方形で、規模は400×260cmを測る。断面形は卵形で、底面は岩礫層に達して、表面にも多くの小礫が露出している状況で深さは35cm程と浅かった。

内包される土質は粘性ではなく、小礫を多く含んで、地山（岩礫層）同様であった。範囲は平面形の内側に30~50cm程で沿うように内包され、厚さは底面に接して35cm程を測った。黒褐色系土の流入は南北辺にひらく東西辺にせまく、環状の一隅が切れる状況であった。

第10号ドーナツ状土塙（第18図）

B地区調査区の南西側、丘陵がくだって平坦面に変わる部分、第9号ドーナツ状土塙より15m程北にむかったM-2グリッドに検出された。M-2グリッド発掘中に劣化が検出されたもので、以後、周辺、下層に遺物・遺構が確認されないためあえて全形を把握しなかった。

形状は卵形と思われ、推定規模で450×400cm程、深さは105cmで断面形は椀状となると思われた。

底面は橙色土層から黄褐色粘質土層に達するため、内包する土質も粘性が強く、黄色の濃い土質を橙色土、ならびに小礫を混入した褐色土の2次的な土質がとりまいていた。範囲は平面形より50cm程内側に同様の形状で内包されて、底面部分は接していた。黒褐色系土は比較的しっかりした環状を描いて流入していた。

黄褐色粘土を内包する土塙について

黄褐色粘土を内包する土塙、つまりドーナツ状土塙はその性格に統一見解がないことから、名称にいたっても各報告によりまちまちである。

性格については横浜市港北ニュータウン地内文化財調査で人為的、非人為的の相反した見解^{註14}がとられた。以後、非人為的な所産、いわゆる「性格不明の落ち込み」は「風倒木痕」に発展していった。^{註15}

しかし本遺構に対する論者はとどまらず、性格不明遺構として賛同する例や、テーブル状ロームマウンドとして明らかに人為的である^{註16}または大型ローム詰り土塙として、土塙内より木片が検出された事実から風倒木痕説に有利だが、風倒木痕にしては土塙が大型であることに疑問する例など、その性格については依然として模索したままである。^{註17}

本地域では富士市天間沢遺跡に径4~5mを測る巨大土塙として2基が検出されるが、中期勝坂式の土器片を伴出することから人為的所産とするらしい。性格の論追はない。

本遺跡に得られた事実は、内包される土質が検出面から土塙底部が位置する土層までを含む。これは人為的、非人為的を問わず同所に堆積する土層が擾乱されて浮いた状況が考えられる。

『ドーナツ』状として黒褐色系流入土をとらえたが、明確に環状をなす例はない。片側に寄って「C」字状、対の部分も正切れて「匁」状となるなど、平面形に一定の規格はみられない。検出面は褐色土層、橙色土層といった褐色系土層である。伴出遺物を持たないため時期判断

は不能だが、土層把握から縄文時代中期・早期にあたる。したがってこの時期に限ることになって特徴的である。

他遺跡でも大半が縄文時代早期～中期例である。すなわち本遺跡でいう褐色土系土層まで調査を実施した遺跡に限られる。これは褐色土系土層に至って黒褐色系流入土を色別しやすいことに起因すべきでなかろうか。黒褐色系土層内において形成されれば、確認は極めて不可能となる。

同路線内に位置する若宮遺跡第9号ドーナツ状土塙をあげる。

註19

第9号ドーナツ状土塙は褐色土層から橙色土層、黄褐色粘質土層に達する、460×360cm、深さ110cmを測る。内包される黄褐色粘質土と底面には黒褐色系土が流入して完全に浮いた状況を呈していた。

若宮遺跡は褐色土層から橙色土層間に遺物包含層のため、黒褐色系流入土に遺物が混在する例はしばしば認められた。第9号ドーナツ状土塙は極立って多いが、周辺に遺物が多量に遺存していたことから当然の結果といえた。

第9号ドーナツ状土塙を人為的な所産と想定すると、早期包含層でない褐色土層から包含層の富士黒土層、さらに無遺物層の橙色土層、黄褐色粘質土層まで掘り込む。以後、土塙底面、壁面に土器片等の遺物を混じえた黒褐色系土を貼って、遺物を全く含まない黄褐色系土を「卵の黄身」状に配することになる。極めて超人的な作業である。

本遺跡のドーナツ状土塙は積極的な事実を得るまでに至らなかったが、上記の事実から時期的な気象条件、樹木の育成状態の考慮をおいて、非人為的所産＝風倒木痕の可能性を支持したい。

註1 遠藤麻呂 1973 「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」『長野県考古学会誌』長野県考古学会

註2 桜井清彦・玉口時雄・岡田威夫 1970 『世田谷区立総合運動場内遺跡調査報告』世田谷区立郷土資料館紀要第2集

註3 石曾根嘉子・小松虎 1971 「集石跡（火所）」「唐沢・洞」長野県考古学会研究報告書10

註4 平林幹信 1976 「集石遺構について」『陣場上・平塚遺跡』一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・静岡県長泉町

註5 本遺跡の集石跡に時期的変遷はあるが集石跡の性格上、遺存土器が曖昧で明確な変遷をさぐれなかった。構成礫も同様であるが、これは集石構築に入手しやすい周辺礫を用いれば当然の結果となるかも知れない。構成礫には赤色礫が多く含まれる。この赤色礫は古富士泥流岩盤層中に多く混入して、露頭部分で容易に入手される。

註6 註4に同じ

註7 沼津市教育委員会 1975 『元野遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告第8集

註8 長田実 1958 「原始時代」『伊東市史』伊東市

- 註9 小野真一 1975 「駿豆地方における縄文時代の墳墓について」 加藤学園考古学研究所報3
- 註10 小野真一・秋本真澄 1975 「ゆずり葉」 加藤学園考古学研究所報告第10号
- 註11 日本道路公団名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1980『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報Ⅱ』一昭和54年度
- 註12 十菱駿武 1971 「東方第4遺跡」「港北ニュータウン地域内文化財調査報告(I)」横浜市埋蔵文化財調査委員会
十菱駿武 1972 「東方第7遺跡」「港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅲ」横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 註13 初岡幸雄 1974 「扇平集落の分析」「扇平遺跡」岡谷市教育委員会
- 註14 能登健 1972 「東方第13遺跡」「港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅳ」横浜市埋蔵文化財調査委員会
十菱駿武 1972 「東方第7遺跡」同上
- 註15 能登健 1974 「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として」『信濃』第26巻第3号 信濃史学会
- 註16 藤の台遺跡調査会 1980『藤の台遺跡Ⅱ』
- 註17 川崎市 1978 『川崎市多摩区黒川東遺跡発掘調査概報』
- 註18 富士市教育委員会 1979『天間沢遺跡第7次(F地区)発掘調査概報』
- 註19 註11に同じ

第2節 遺 物

1. 土 器

本遺跡より出土した土器は、縄文時代早期～中期初頭のもので、総数1,195片である。以下分類可能な1,008片を第I群～第IV群に分類して説明を進める。

第I群土器 (第19図1～14、図版第17)

椭円押型文を器面全面に施した土器を本群とする。出土総数54片。

1は、復原口径25cmの同一個体口縁部破片である。長さ30mm、径5.7mmの原体を、口唇部直下より縦位に2～3回転し、以下右さがりに施したものである。縦位施文部は弱く、斜位施文部は強く押圧される。口縁部は内湾ぎみに外反し、口唇部は丸く整形される。補修孔は外から内にむかって穿孔され、裏面は横位、斜位の擦痕状器面調整痕が観察できる。焼成良好。胎土は微量の金雲母と、長石、石英を含有。器厚8mm。2は、復原口径21cmの胴上半部の破片である。長さ43mm、径5.7mmの原体を、口唇部に沿って横位に施したものである。口縁部は直行し、口唇部は平坦に整形される。補修孔は外から内にむかって強く穿孔され、裏面は丁寧な研磨が施される。焼成良好。胎土は多量の金雲母と、長石、石英を含有。器厚9mm。輪積み痕が顕著に残り、粘土帯の巾は3～3.5cmで、下から上への積み上げが観察できる。原体の両端

は、両側から $\frac{1}{2}$ づつ削られた楔状を呈する。3は、同一個体と思われ、復原口径20cmの胴上半部破片である。長さ27mm、径5.7mmの原体を口唇部に沿って横位に1帯、以下縦位に施文したものである。口縁部は内湾ぎみに外反し、口唇部は整形が不十分で波をうつ。裏面は擦痕状器面調整痕が観察できる。焼成良好。胎土は長石、石英、砂粒を含有。器厚6~8mm。4は、小さな長椅円押型文を、口唇部に沿って横位に2~3帯、以下を右さがりに施文したものである。口縁部は直行し、口唇部には爪形状の刺突文が施される。表面は押型文施文前の器面調整が粗雑なためか、明瞭な施文効果が得られていない。細かな亀裂が多い。裏面の器面調整も粗雑である。5・6は、押型文が重複して施文される。8は文様構成が縦位施文帶の下位に横位施文帶の存在が推定される破片である。織維痕は1・3に観察されるが、明瞭なものではない。

類II群土器 (第19図15~第20図46、図版第18)

撚糸文を施した土器を本群とする。出土総数88片。

第1類土器 (15~25)

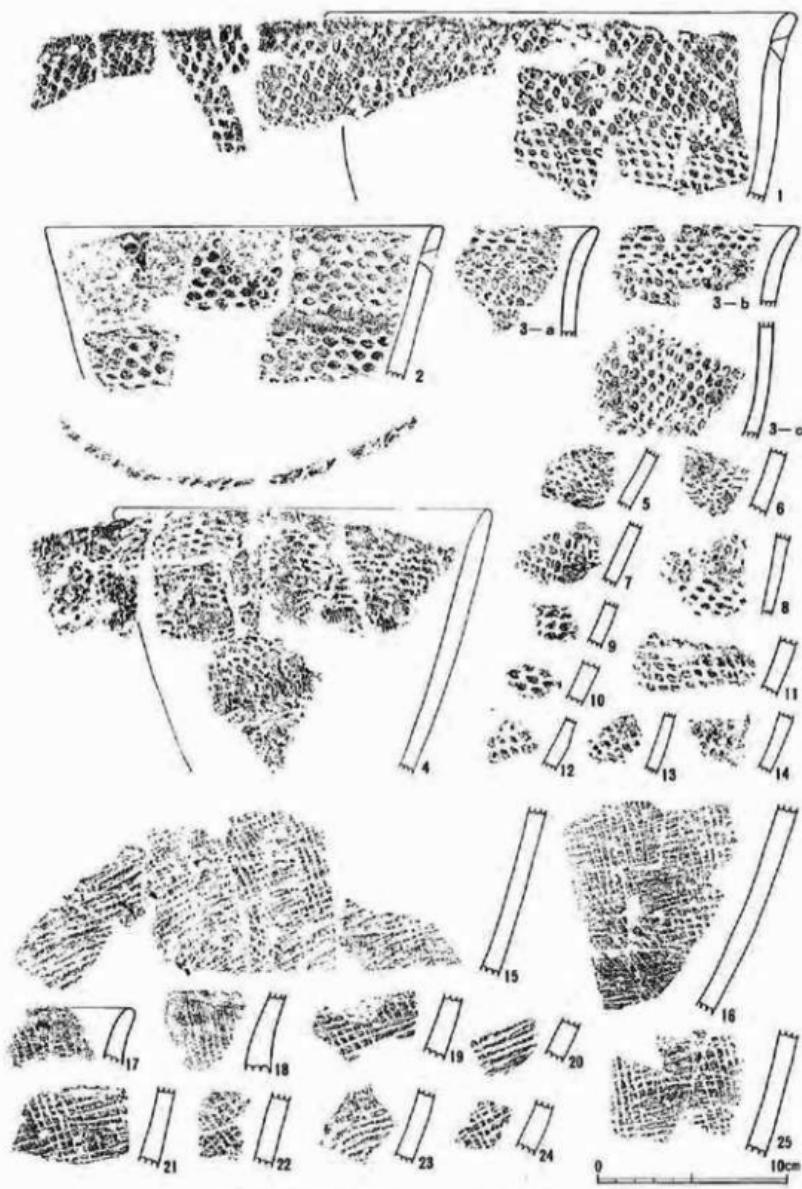
撚糸文を縦・横・斜位の異方向に交叉して、格子目状に施文したものの一括する。同一個体と思われる破片が37片出土している。撚りは1段Rの撚りである。施文順序・文様構成に規則性は見られないが、撚糸文施文前に、撚り紐の押圧による圧痕文を、3~3.5cmの幅で横位に数段巡らすものが15・16に観察できる。口縁部(17・18)はやや外反し、口唇部は丸味をもつ。裏面は丁寧な研摩がなされる。焼成良好。胎土は多量の金雲母と長石、石英を含有。器厚9~11mm。

第2類土器 (26~30)

撚糸文が網目状を呈する、網目状撚糸文を一括する。撚り紐は1段Rである。小破片9片のみの出土で詳細な観察は不可能である。胎土は多量の金雲母、長石、石英を含有する脆弱なもの(26・27)と、微量の金雲母と長石、石英を含有する硬質なものとに別けられる。器厚7~8mm。

第3類土器 (31~46)

斜位の撚糸文が施文されるものを一括する。31~38は胎土に多量の金雲母と長石、石英を含有する器厚7~8mmの脆弱な土器で、同一個体と思われる。31・32の口縁部はやや外反ぎみに直行し、口唇部の整形、裏面の器面調整は丁寧である。撚りは一段Rで、口唇部直下より右さがりに不規則な施文がなされる。39~45は胎土に長石、石英、小礫を多量に含有する器厚7~10mmの硬質な土器である。撚りは一段Lで横位に回転して、横位帶状文様帶を構成する。46は外反ぎみに直行する口縁部で、口唇部直下より一段Rの細い密な撚糸文を、右さがりに施文したもの。口唇部に擦痕状整形痕が観察できる。胎土は微細な金雲母、長石、石英を多く含有する器厚8mmの硬質な土器である。154~156は胎土に金雲母を多量に含有する器厚11~13mmと厚手の脆弱な土器である。太い撚糸文を深く施文したもので、撚りは判別できない。



第19図 土器拓影図① (第I・II群土器)

第三群土器（第20図47～60、図版第19）

繩文のみが施文されるものを本群とする。47は胎土に微細な金雲母、黒雲母と、長石、石英を含有する硬質な土器で、燃りはRLである。48～53の胎土は長石、石英、小礫を多量に含有し、第二群39～45に酷似する。燃りはLRで、49は羽状繩文をなす。56は胎土に多量の金雲母、長石、石英を含有する器厚13～14mmの厚手の土器で、剥落が激しい。RLの燃り紐を横位に回転させている。60は口縁部で、無文帶の下位に羽状繩文を有する。47～53は早期土器に伴出し、54～60は出土地点・層位を異にし、前期後半以降の所産かと思われる。

第四群土器（第20図61～63、図版第19）

集合沈線、爪形文より文様構成される薄手の土器を本群とする。出土総数7片。

61、62は同一個体で、口径10cm弱と推定される小型土器である。肥厚する口縁部には、爪形状刺突文が横位に二段施される。以下数条からなる斜位の集合沈線と、胴部の横走する集合沈線との間に、三角形、平行四辺形の区画を形成し、区画内を半截竹管先端による刺突文によって充填する。補修孔は表面より強く穿孔される。器厚は5mmと薄く、焼成良好。胎土は多量の長石、石英、小礫を含有。63は貝殻腹縁文を縱位に施文する胴部破片で、器厚は6mmで、胎土は61、62に酷似する。

第五群土器（第20図64～第21図108、図版第20～22）

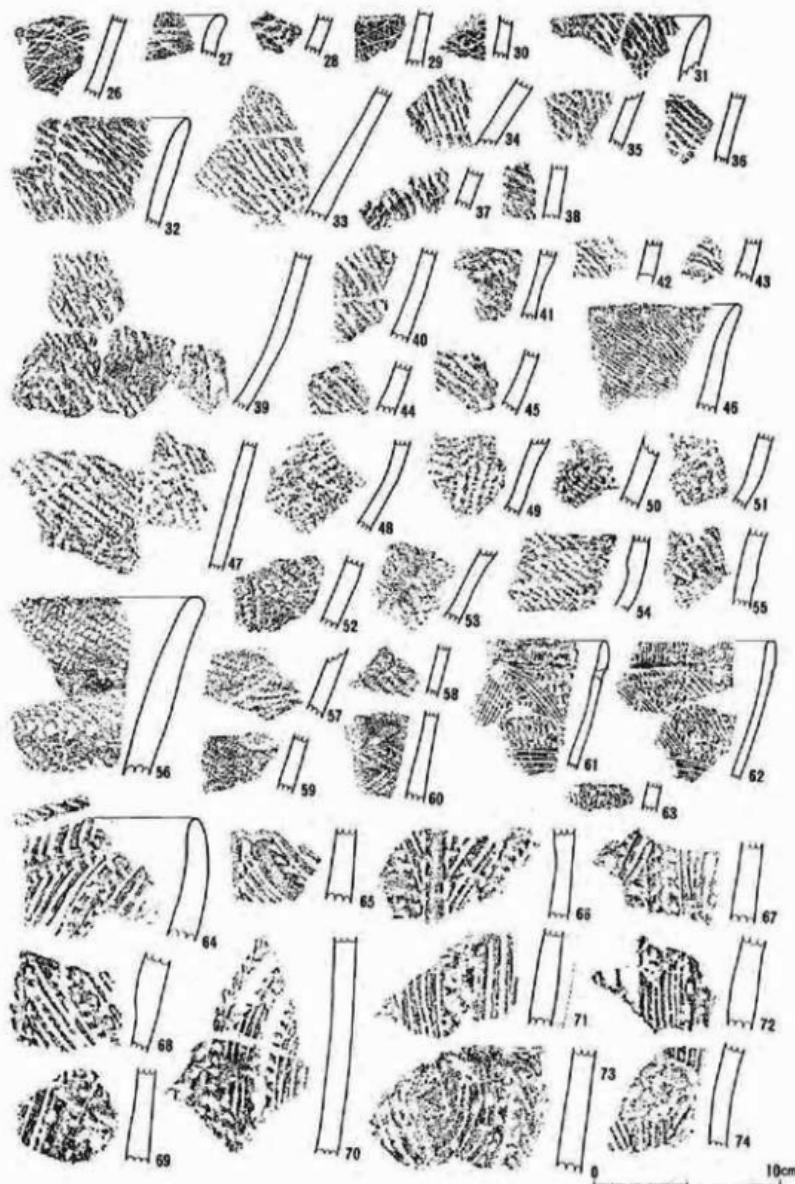
四線文、沈線文、刺突文の組み合わせにより文様構成され、胴部に段を有するものを本群とする。出土総数有文73片、無文66片。

第1類土器（64～75・90・105）

指頭あるいは太い丸棒状工具により描出した凹線文で器面を区画し、区画内を細い丸棒状工具により描出した沈線文により充填した土器で、凹線文の両側辺に描出される微隆起線状文様上に、丸棒状工具先端による刺突文を施したものの一括する。胎土に白色砂粒と纖維を多量に含有し、器厚10～15mmの厚手の土器である。口縁部（64・65）は液状を呈し、液頂部より垂下する凹線文、口縁部に沿う凹線文、その間を二分する凹線文が見られる。口唇部内面（64）、口唇部上面（75）に丸棒状工具の側面圧痕文が施される。胴部は垂下する凹線文に対して、凹線文を対角線状に施すもの（66・67）、弧を描くもの（70・73）が見られる。90は段を有する胴部破片で、段上部は文様帶となり、斜位の凹線文に対してへ状の沈線文が並行する。段下部は無文帶となり、平底の底部（65）に連続する。胎土、器厚を同じくする無文土器が出土している。

第2類土器（76～89、91～104）

凹線文、沈線文により文様構成されるものを本群とした。第1類とは刺突文を有しない点で分類する。胎土、焼成、器厚は第1類に近似するものが多い。凹線文、沈線文が曲線をなすもの（76・79・80）、沈線文が異方向をとるもの（77・78）、沈線文がとぎれるもの（84・85）がある。81の口縁部は器面両面より補修孔が穿孔される。83は鉛状工具による沈線文を施す。



第20図 土器拓影図② (第II・III・IV・V群土器)

93は段を有する胴部大破片で、段上部は凹線文、沈線文とからなる文様帶となり、段下部は無文帶に一部細い沈線文が並行するよう施文される。99、100は弱い段の上下に沈線文が施され、複数の文様帶をもつものである。101、102は巾広い隆帶を縦位に付し、隆帶上に沈線文を施す。

第3類土器 (106~108)

凹線文、沈線文、刺突文により文様構成され、第1類に類似するが、胎土、焼成を異にし器厚は8mmと薄い。口縁部は波状をなし、口唇部は平坦に整形されV字状の刻み目を施す。裏面は斜位の擦痕状器面調整痕が観察できる。胎土は微細な白色砂粒を含有し、繊維は含まれない。焼成良好な硬質な土器である。

第VI群土器 (第21図109~第22図122、図版第23)

条痕文のみによって文様構成される土器を本群とする。

第1類土器 (109~112)

巾広の貝殻条痕文を器面全面に施文したものを一括する。出土総数11片。口縁部は波状を呈し、口縁部先端で外反する。口唇部および裏面は丁寧な研磨がなされる。補修孔は表面より穿孔される。条痕文は右あがりに約3cmづつ施文される。胎土は長石、石英、小礫を多量に含有し、繊維は含まれない。焼成良好。器厚7~10mm。

第2類土器 (113~122)

巾狭の貝殻条痕文を器面表裏に不規則に施文したものを一括する。出土総数13片。口縁部先端で外反し、底部は平底(118)と、尖底となるもの(115)がある。補修孔は表面より強く穿孔される。胎土は多量の繊維・白色砂粒を含有。器厚7~12mm。

第VII群土器 (第22図123~153・第23図157~第24図258、図版第23~28)

前期後葉~末葉の土器を本群とする。

第1類土器

縄文と半截竹管状工具を用いた平行沈線文により文様構成されるものを一括する。

a種 (124~127)

平行沈線文で弧を描き、レンズ状に区画する区画内に、縄文RLを横位に施文するもの。出土総数7片。縄文を地文とするものか、縄文を充填したものか判別できない。

b種 (131~134)

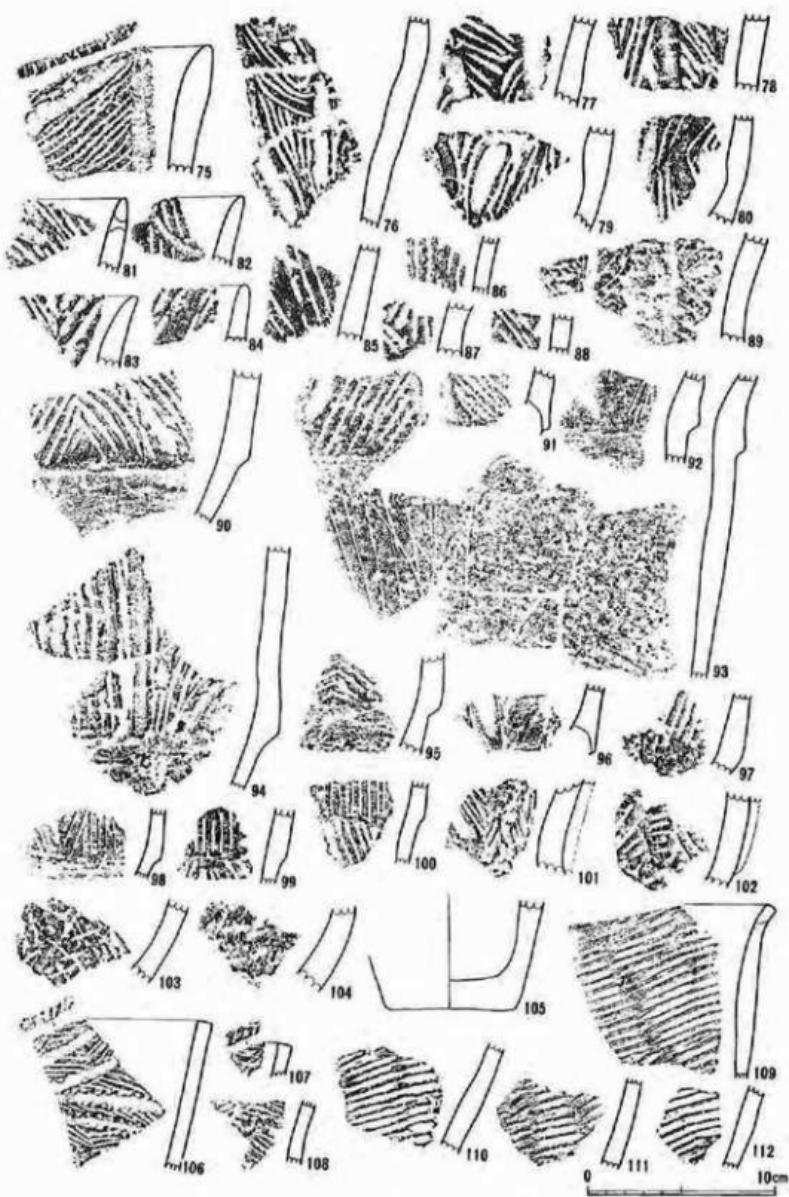
縄文RLを地文とし、巾狭の平行沈線文を施すもの。胎土は金雲母を多量に含有する脆弱な土器である。

c種 (150~153)

口縁部が内湾するキャリバー形の深鉢形土器の口縁部破片である。縄文RLを地文とし、口唇部に並走する平行沈線文が施される。

第2類土器 (157)

縄文RLとLRを交互に施文して描出する羽状縄文を、器面全面に横位に施文し、口唇部に



第21圖 土器拓影圖③ (第V・VI群土器)

粘土紐を貼付した土器。188片が集中して出土した。胴部からゆるく聞くように外反し、口縁部先端で内側に小さく屈曲する大型の深鉢形土器。胎土は多量の金雲母と長石、石英を含有。

第3類土器（123・128～130）

平行沈線内を半截竹管先端の刺突による爪形文で充填する連続爪形文を有する土器、123は第1類a種と同じ平行沈線文を有し、胎土・焼成が酷似するもので同一個体と思われる。128は波状口縁部で、口唇部に粘土紐を貼付し、口唇部直下に凹線をはさんで隆帯を貼付する。隆帯に並行して連続爪形文を施す。

第4類土器（135～142）

巾広の平行沈線文により文様モチーフが描かれる土器。口縁部はゆるいカーブを描いて朝顔状に外反する。平行沈線文を口唇部直下に2条、胴部中位に2条横位に施し、その間を平行沈線文で大きな波状を描く。胎土に大粒の長石、石英を多量に含有。

第5類土器（143～149）

キャリバー形の深鉢形土器で、器面全面に浮線文を貼付した土器。

a種（143～148）

縄文を地文とし、浮線文上に縄文を施すもの。口縁部は波状を呈し、口唇部は平坦に整形され、内側に刻み目を施す。浮線文は横走するものを基本とし、浮線文間の地文は擦り消される。胎土は長石、石英、白色砂粒を多量に含有する粗雑な土器である。

b種（149）

浮線文上に丸棒状工具の側面を押圧するもの。地文は判別できない。

第6類土器（158～182）

半截竹管状工具を用いた平行沈線文を器面全面に施したもの。

a種（158・159）

2条の縦位平行沈線文に対して、直角に横位の平行沈線文を施したもの。

b種（160～166）

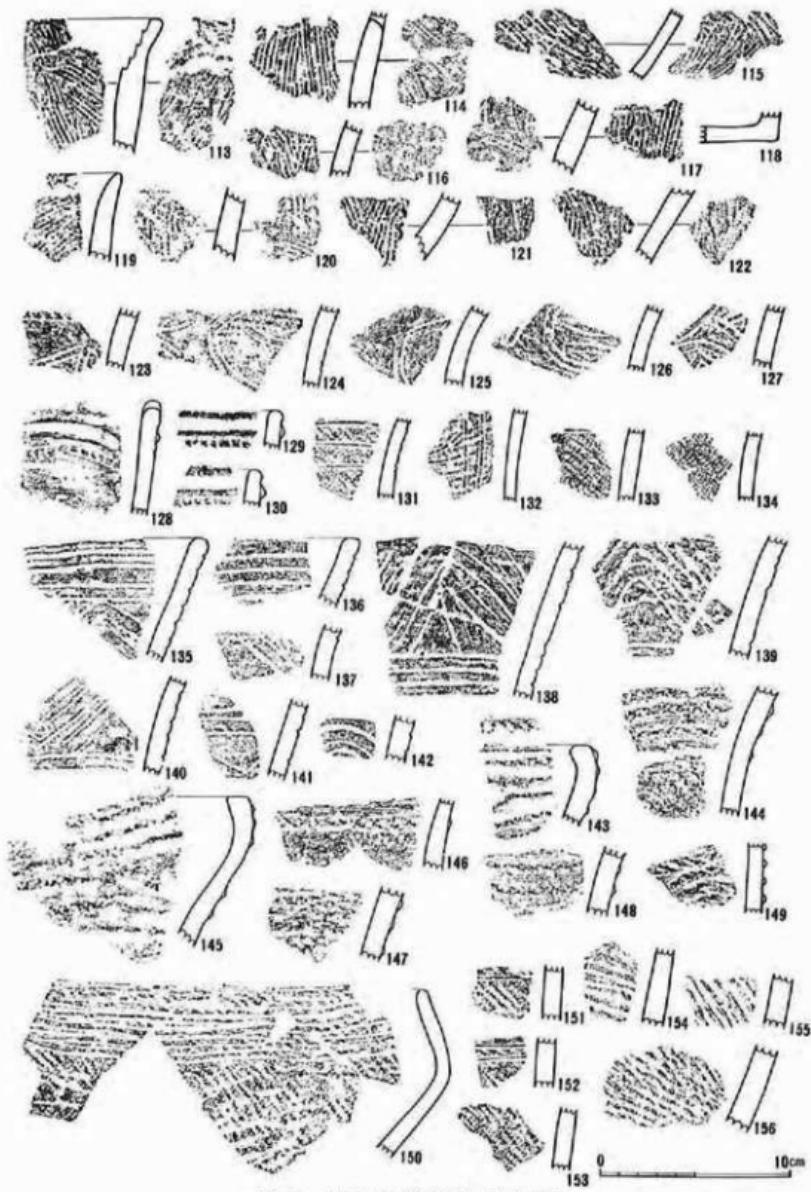
平行沈線による集合沈線文を縦位・横位に配して器面を区画し、区画内に集合沈線文を対角線状・接移文状に施したもの。沈線は深く明瞭に施文される。

c種（167・168）

円形浮文を貼付するもの。167は平行沈線文を接移文状に施し、その上に半截竹管によ押引き文と円形浮文を施している。168は平行沈線文上に2つの円形浮文が貼付される。

d種（169～171・174・175・185～187）

半截竹管をさらに半截したような多截竹管状工具を用いた平行沈線文により文様モチーフが描かれるもの。文様断面は浅く弧状となる。口縁部は胴部からゆるやかに外反し、波状口縁となる。胴部中位に弱い段を有する。口唇部に沿う2条の沈線文と、胴段部に横走する沈線文との間に、斜位および円弧状の沈線文を施す。胎土は黒雲母・白色砂粒を多量に含有。



第22図 土器拓影図④ (第VI・Ⅶ群土器)

e種 (176・178・180)

太い2本の沈線と、その間の細い沈線の3本からなる平行沈線文を施すもの。3片は接続する同一個体胴部破片で、横位施文部と、それにはさまれる斜位施文部とから文様構成される。

f種 (186)

平行沈線文と角棒状工具先端の刺突文が施されるもの。

g種 (172・173・177・179・182~184)

平行沈線文を横位施文・縦位施文したもの。a種~f種の範疇に入らないものを一括した。

172・173・177は沈線を横位に不規則に施文したものである。

第7類土器 (188~193)

粘土紐を指頭の押庄により器面に貼り付けた、押庄隆帯文を付す土器を一括する。189は胎土に多量の纖維を含む土器で、器厚7mm、器面は凹凸が激しい。他に同一胎土の無文土器が出士しており、時期をさかのぼる一群と思われる。188は内湾する口縁部で、器厚10~13mmと厚く、胎土に金雲母、白色砂粒を多量に含有する。190は2段の押庄隆帯文が貼付される胴部破片である。193は押庄隆帯文の下に、粘土紐上に半截竹管状工具先端を連続して斜めに押圧した、いわゆる結節状浮線文が施される。

第8類土器 (195~197)

沈線を地文とし、結節状浮線文を施すもの。195は波状を呈する口縁部で、口唇部は平坦に整形される。結節状浮線文を口唇部に沿って密に施し、以下縦位に垂下させ、その間に円形浮文を貼付する。裏面は丁寧な研摩がなされる。196は結節状浮線文が円弧状に施される。197は結節が長く、深く施される。

第9類土器 (198~223)

縄文を地文とし、結節状浮線を貼付するものを一括する。

a種 (198~212)

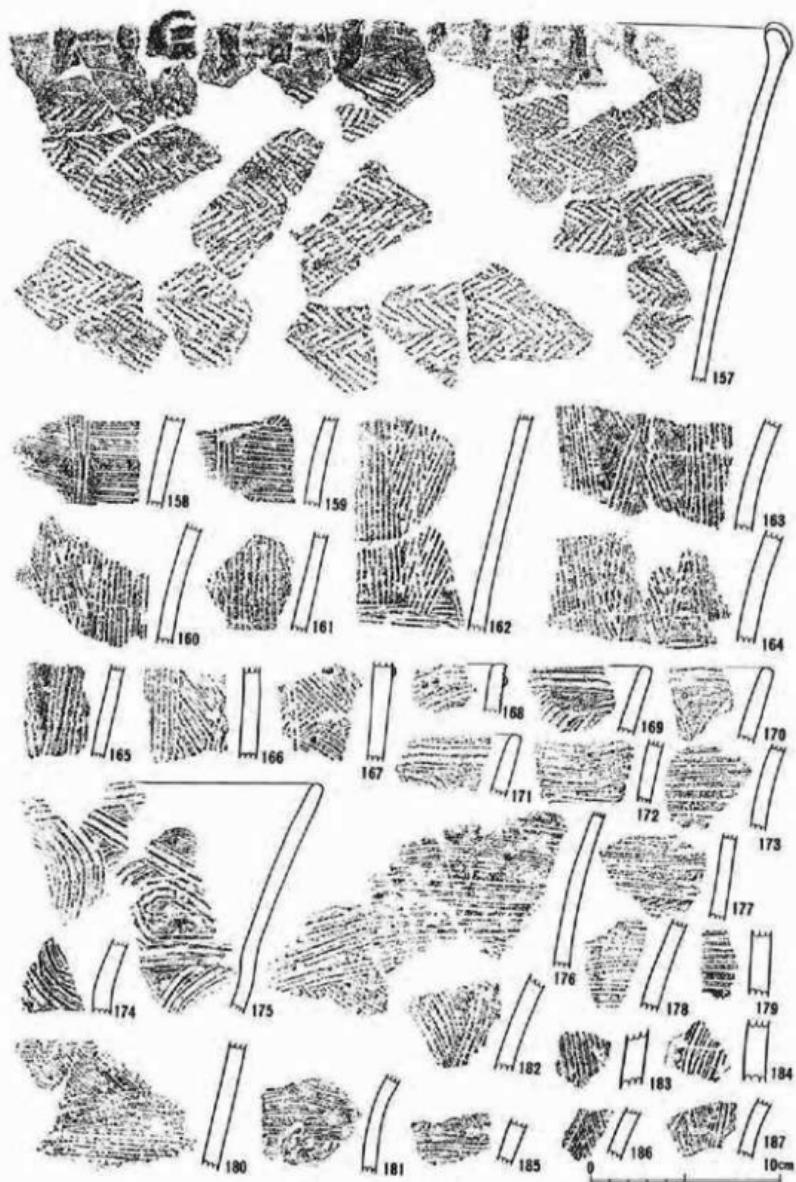
R Lの斜位縄文を全面に施文して地文とし、横位に巾広の結節状浮線文を貼付する。キャリバー形の深鉢形土器、198は口唇部に沿う一帯の粘土紐を貼付し、以下粘土紐上に半截竹管状工具先端を連続して刺突する結節状浮線文を横位に貼付する。202は交叉する粘土紐が貼付される。以下胴部破片の結節状浮線文はすべて横位に貼付される。器厚8mm。

b種 (213~223)

細いR Lの斜位縄文を地文とし、a種に比して細い結節状浮線文を、縦位に垂下するものを基本とし、一部弧状に貼付するものも(213・220)も見られる。器厚4~5mmと薄く、a種に比し、焼成・器面調整とともに粗雑である。

第10類土器 (224~229)

三角陰刻文を施すものを一括する。平行沈線文により三角形を規則的に連続して描出し、三角形内を籠状工具により陰刻したもの。小破片22片の出土で、器形・文様構成は把握できない。



第23図 土器拓影図⑤（第Ⅳ群土器）

突起状破片が数片含まれる。

第11類土器 (230~236)

連続爪形文と羽状繩文より文様構成されるもの。器厚は5mmと薄く、色調は灰白色を呈し、胎土に長石、石英を多量に含有する。連続爪形文は平行沈線内を充填したもので、口縁部および胴上半部に施され、羽状繩文は、連続爪形文以下に横位に施文される。羽状繩文は、原体O段3本燃りのRLとLRを交互に施文したものである。231~234には赤色顔料の彩色が見られる。

第12類土器 (237~247)

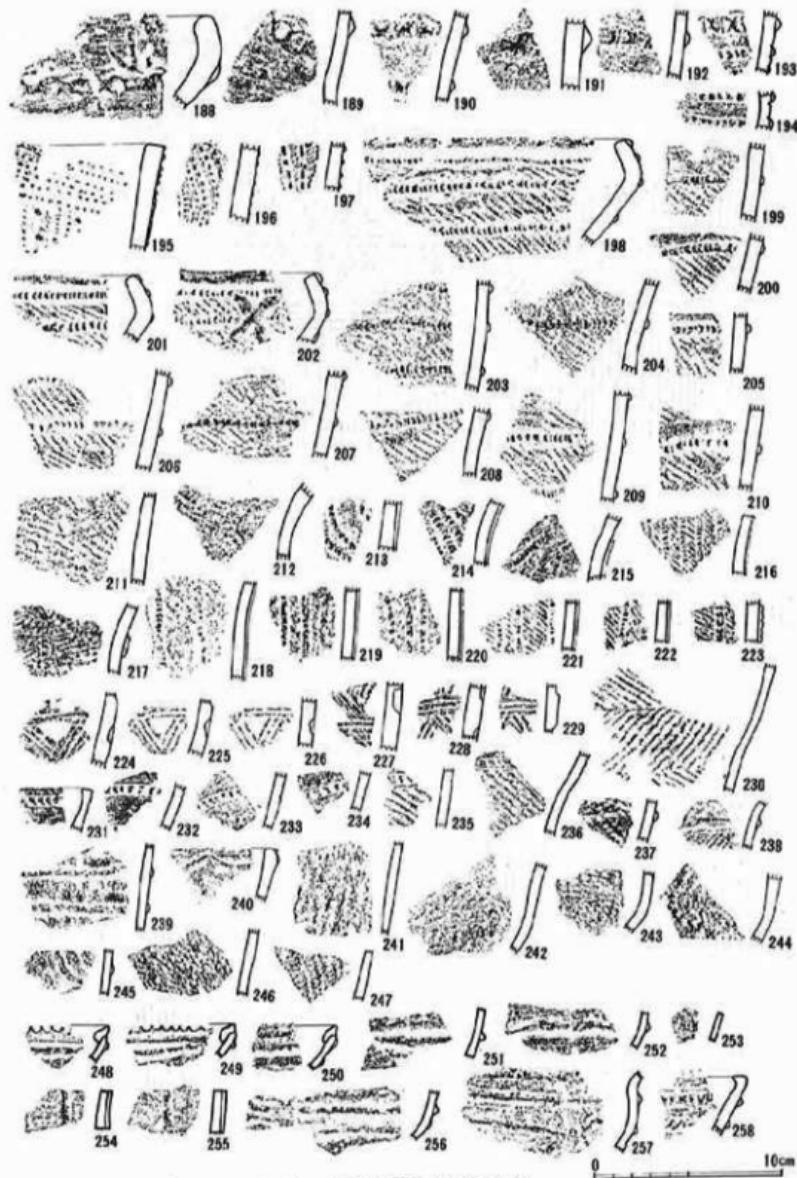
繩文を地文とし、粘土紐を横位および弧状に貼付するものを一括する。器厚は5mm前後と薄く、焼成は良好で、胎土に長石、石英、砂粒を含有する。繩文は太めのRLを浅く、不明瞭に施文したものと、細いLRを施文するものがある。239の粘土紐上には、繩文が押圧される。240の口縁部は、粘土紐が口唇部外辺に一帯と、弧状に貼付される。器形は胴部下半で弱いふくらみをもつものである。

第13類土器 (248~258)

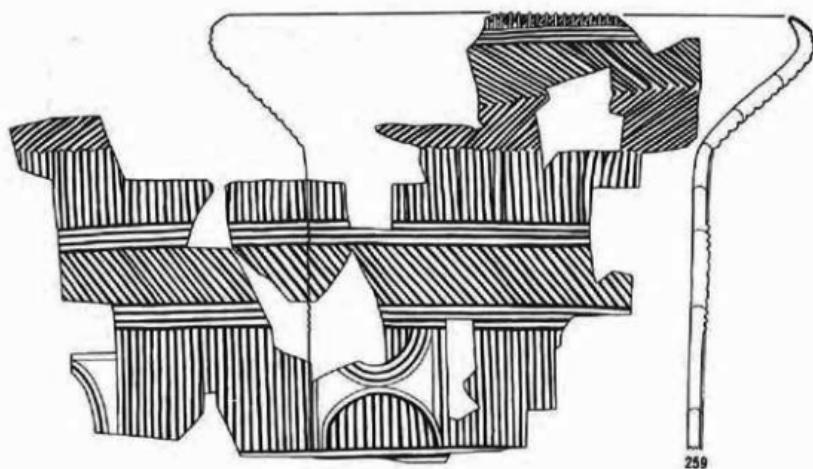
器厚5mm前後の薄手の土器に、粘土紐を貼り付けた隆帶文を横位・縦位に施文するものを一括する。胎土に黒雲母、白色砂粒を多量に含有する。器面表裏ともに剥落が激しい。器形は、直立する胴部から、胴上半部でふくらみをもち、頸部でくびれ、口唇部で大きく外反する。口唇部は内側から先端にかけ巾広く粘土帯を貼付し、先端部には刻み目が施される。隆帶文は口唇部では横位に、胴上半部で横位・弧状・渦巻き状に、以下縦位に貼付される。地文に繩文を有するものは見られないが、253は胎土が酷似する器厚3mmの土器で繩文RLが施される。258は隆帶上に刻み目が施される。

第14類土器 (第25図259、図版第29)

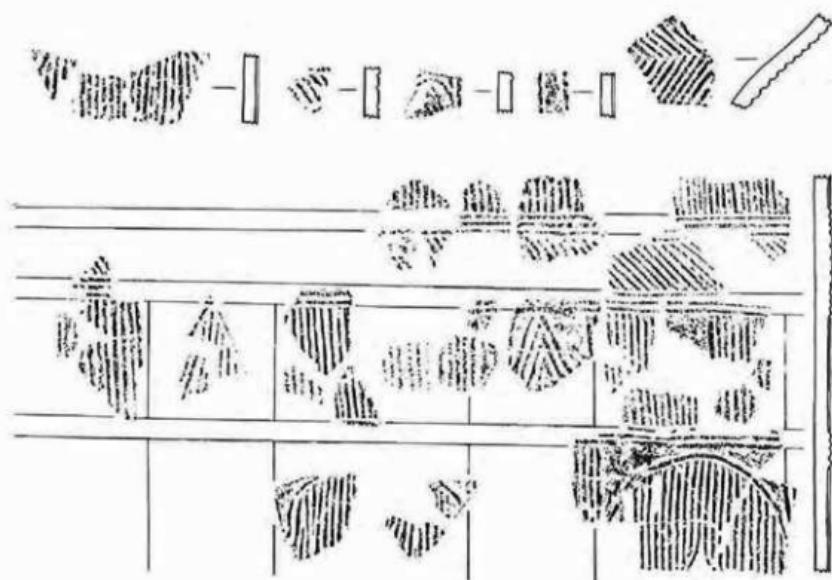
第2号住居跡より一括出土した土器。胴部は直立し、口縁部が大きく外反して、口唇部で小さく内湾する深鉢形土器。半截竹管による平行線文を深く規則的に施して文様構成される。口唇部には地文として繩文LRを施し、巾2mmの粘土紐を2~3mmの間隔で、口唇部内面にかけ縦位に貼付する。貼付した粘土紐の先端上に、同じ粘土紐を口唇部に平行するように横位に貼付する。それに接して、粘土紐と同じ巾の平行線文を2条巡らす。以下曲折部との間は左開きの羽状に平行線文を施文する。曲折部以下の胴部は、横位の平行線文により4段に区画する。文様構成は、口縁部より連続する第1区画は巾4cmで縦位。第2区画は巾3cmで右下りの斜位。第3区画は巾6~6.5cmで、縦位に施文した後、三角形、あるいは半円を対称に描き、图形外を削り取り無文部とする。第4区画は巾6.5cm以上で、縦位に施文した後、さらに半円を描き、無文部を描出する。以下底部および底部に連続する破片は出土せず。器形、文様構成は判断できない。器厚は7~8mm。胎土は長石・石英を含むが、混入物は少なく硬質である。



第24圖 土器拓影圖⑥ (第Ⅲ群土器)



259



0 10cm

第25図 土器拓影図、および実測図⑦（第Ⅸ群土器）

土器について

第Ⅰ群～第Ⅵ群土器

群類	I			II			III			IV			V			VI	
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	1	2	
点数	54	37	9	42	32	7	20	49	4	66	11	13	88	139	24		

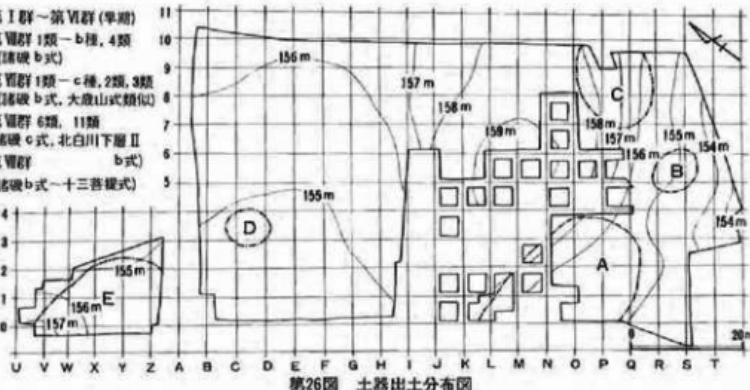
第3表 早期土器群出土表

出土が富士黒土層上層までおよぶのに対して、第Ⅴ・Ⅵ群土器は褐色土層中より出土する点が指摘できる。

第Ⅰ群土器とした押型文土器は、すべて楕円押型文土器で、総数54片を出土した。整理の結果、4個体分の口縁部大破片に接合され、胴下半部～底部の破片は出土していない。圧痕の観察より復原される施文原体は、長さ30mm・43mm・27mmと推定され不規則であるが、径は5.7mm前後ではば等しい数値を示す。原体両端は、1/2づつ削りとった楔状を呈するものが観察できる。楕円文は1周2単位で、各段が半分づつずれながら6段彫刻され、段数は原体長に関係せず、長い原体に比して、短い原体の楕円は偏平となる。回転による文様構成は、横位、構位→縦位、縦位→斜位となるもの他に、胴下半部で縦位→横位となるものが推定される。施文順序は口縁部が後である。

第Ⅱ群土器とした撚糸文の施文される土器は、総数88片を出土した。出土分布・層位ともに押型文土器と混在して出土する。褐色土層が再堆積土層である点、かならずしも両者が同時期のものであるという断定はできないが、富士黒土層上層にかけ出土することから、両者の伴出関係を指摘できるものと思う。さらに第Ⅲ群とした縄文土器は、撚糸文土器に胎土。出土分布、層位を同じくし、撚糸文土器に伴うものと思われる。

- A. 第Ⅰ群～第Ⅴ群(早期)
- B. 第Ⅳ群 I類～b種、4類
(撚糸 b式)
- C. 第Ⅳ群 I類～c種、2種、3種
(撚糸 b式、大庭山式類似)
- D. 第Ⅳ群 6類、11類
(撚糸 c式、北白川下層 II)
- E. 第Ⅳ群
(撚糸 b式～十三苦穀式)



第26図 土器出土分布図

第Ⅰ群～第Ⅳ群に分類した土器は、縄文時代早期の土器である。第26図に示すように、東側丘陵南東平坦面の狭い範囲より総数344片が集中して出土した。出土層位は、褐色土層～富士黒土層上層である。さらに細分すると、第Ⅰ・Ⅱ群土器の

第VI群土器とした沈線文と刺突文よりなる薄手の土器は、2片の口縁部～胴部にかけての破片に接合され、1個体のみの出土かと思われる。出土層位は褐色土層下層～富士黒土層上面である。わずか7片の出土であることから、押型文土器・撫糸文土器との関係を指摘するには資料不足である。

第V群土器は、有文・無文土器合せて139片が出土した。出土分布は、北側斜面よりに集中し、出土層位は褐色土層である。本群の主体をなすものは、口縁部が波状となり、胴部に段を有して、平底の底部へと連続する器形を呈し、段上部は、凹線、沈線、刺突を文様要素とする文様帶となり、胴下部は無文帶となる。口唇部には刻み目が施され、胴部には輥位の陸帶を貼付し、陸帶上に沈線文が施される。器厚は10～15mmと厚く、胎土に纖維を含有する。主体となる土器の他に、口縁部が平線となるもの、段上下に沈線文が施されるものを含む。また第1・2類を粗製土器とするならば、第3類は精製土器として把握できるものである。以上本群は、绳文時代早期後葉茅山系土器群前半、型式上では野島式～鶴ヶ島台式土器の範疇に含まれよう。^{註1}

第VI群土器は、器面全面に貝殻条痕文を施文するもので、総数24片を出土した。出土は、第1類が褐色土層より集中して出土したものに対して、第2類は全面より散在的に出土した。第1類は巾広の条痕文が、器面表面に規制的に明瞭に施文されるのに対し、第2類は巾狭の条痕文が、器面表裏に乱雜に不明瞭に施文され、纖維を多量に含有する。両者の間に時期差を指摘できるものと思われる。

類	種	文 様	破 片 数	器 形
1	a	绳文十平行沈線文	7	キャリバー形深鉢 大型深鉢
	b	绳文十平行沈線文	4	
	c	绳文十平行沈線文	1 4	
2		羽状捲文十貼付文	1 8 8	
3		平行沈線内連続爪形文	4	
4		巾広平行沈線文	1 3	朝顔形深鉢
5		浮線文	1 4	キャリバー形深鉢
6	a	平行沈線文	2	
	b	平行沈線文	9	
	c	平行沈線文十円形浮文	3	
	d	平行沈線文	6	
	e	平行沈線文	4	
	f	平行沈線文十刺突文	1	
	g	平行沈線文	6	
7		押正陸帶文	9	
8		沈線文十結節状浮線文十円形浮文	3	
9		绳文十結節状浮線文	5 4	キャリバー形深鉢
		绳文十結節状浮線文	3 0	
		绳文	5 2	
10		三角陰刻文	2 2	
11		連続爪形文十羽状绳文	1 3	
12		绳文十浮線文	8 0	
13		浮線文	5 3	

第4表 第VI群土器分類表

第Ⅶ群土器

本群は撰文時代前期後葉～末葉の土器である。第1類～第5類は諸磯b式に、第6類～第8類は諸磯c式に、第9類～第10類は十三菩提式に、第11類は北白川下層IIb式に比定される。^{註2}また第12類も関西系土器で、第11類より新しい時期に比定されよう。第13類土器は関西の大歳山式土器に系統を求める一群かと思われる。各類は第26図に示すような出土分布をなす。西側丘陵東側斜面に諸磯b式～十三菩提式土器の分布が集中するが、これは、遺跡の主体部となる西側丘陵平頂面からの流れ込みによるものであろう。また東側丘陵東側斜面に比較的まとまって諸磯b式土器の分布が見られる。遺構に伴うものも見られるが、移動の激しい遺物としてよからう。また両丘陵にはさまれた中央低地には、諸磯c式土器が散在的に分布するが、一部北白川下層IIb式土器と混在して、集中的に出土する。これは移動の激しい黒褐色土層に伴い流入したものと考えられ、両者の伴出関係を意味するものではない。また東側丘陵東側斜面における、諸磯b式土器と大歳山式土器系の土器についても同様である。本遺跡における前期土器が、移動の激しい再堆積土層である黒褐色土層を包含層とし、斜面より出土する点、前期後半～末葉土器の編年、伴出関係を検討する資料とはなりえない。

第Ⅷ群土器

第Ⅷ群土器は、中期初頭の土器である。第2号住居跡内より一括して出土した。胴部は直立し、口縁部が外反して口唇部で内湾する深鉢形土器である。文様は口唇部に地文として縦文を施し、細い粘土紐を貼付する他は、すべて平行線文により構成される。器面を横位に区画し、区画内を縱位に充填した後、幾何学的图形を描き、一部分器面を削り取る印刻手法が施される。これらの要素は、五頭ケ台I式土器として把握できるものと思われる。^{註3}

2.石器

本遺跡より出土した石器は石鏃58点・磨石16点・打製石斧11点・石匙6点・石錐2点・石錐1点・異形石器1点の計95点である。

石器名	博団番号	法量			材質	出土地区	種別	遺存状況	備考
		長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)					
石	1	20.00	15.50	5.85	1.3	黒曜石	A-6	II-b	完 形
	2	34.00	17.50	3.60	1.9	硬砂岩	B-5	III-a	完 形
	3	16.20	14.25	3.45	0.5	黒曜石	B-6	IV-c	完 形
	4	21.00	15.70	6.45	1.4	黒曜石	B-10	II-b	完 形
	5	15.00	13.15	5.10	0.9	黒曜石	B-10	I-c	完 形
	6	19.10	13.30	4.85	0.9	黒曜石	C-3	II-c	完 形
旗	27	(11.75)	26.65	2.90	(0.5)	黒曜石	C-3	—	先端部欠損
	7	(15.45)	(12.10)	3.50	(0.3)	黒曜石	C-9	—	基部欠損
	8	15.10	14.00	2.75	0.3	チート	C-10	IV-c	完 形
	9	17.00	16.10	3.10	0.7	黒曜石	D-8	IV-b	完 形
	10	20.80	16.00	3.00	0.6	黒曜石	E-5	III-c	完 形
	11	13.55	(11.00)	2.55	(0.3)	硬砂岩	E-6	III-d	脚部欠損
	13	22.40	18.85	2.50	0.5	黒曜石	E-10	IV-b	完 形

第5表 石器計測表①

	14	17.70	15.35	3.10	0.8	真 岩	E-10	II-c	完 形	
	15	19.30	16.20	3.00	0.5	黑耀石	G-10	V-c	完 形	
	16	16.00	14.00	2.50	0.3	真 岩	I-8	V-c	完 形	
	17	21.65 (15.50)	4.70 (1.2)	黑耀石	L-1	II-b	脚 部 欠 损			
	18	26.90 (14.30)	5.65 (1.4)	黑耀石	M-2	III-b	脚 部 欠 损			
	19	27.70 (16.20)	4.80 (1.7)	硬砂岩	M-3	II-a	脚 部 欠 损			
	20	20.00	17.10	3.10	0.6	黑耀石	M-3	V-b	完 形	
	21	16.00	18.50	2.50	0.4	黑耀石	M-8	V-c	完 形	
	22	20.10 (17.60)	2.60 (0.8)	黑耀石	M-9	I-b	脚 部 欠 损			
	23	19.80 (14.10)	3.60 (0.7)	真 岩	M-10	II-c	脚 部 欠 损			
	24	21.10 (11.70)	3.90 (0.4)	チャート	N-1	V-c	脚 部 欠 损			
	25	17.90	14.25	4.40	0.8	黑耀石	N-3	III-c	完 形	
	26	(14.80) (11.65)	4.10 (0.5)	黑耀石	O-1	III-c	先端部欠损			
	27	(18.60) (15.60)	4.60 (1.1)	黑耀石	O-2	II-a	先端部欠损			
	28	13.60	12.10	2.35	0.2	黑耀石	O-2	V-d	完 形	
石	29	16.00 (10.30)	3.00 (0.3)	黑耀石	O-2	II-c	脚 部 欠 损			
	30	21.90 (15.70)	5.00 (1.0)	真 岩	O-2	—	脚 部 欠 损			
	31	12.00 (10.30)	2.20 (0.1)	硬砂岩	O-2	V-d	脚 部 欠 损			
	32	20.60 (12.10)	2.30 (0.4)	黑耀石	O-3	V-b	脚 部 欠 损			
	27	33	21.65 (14.30)	4.30 (1.0)	チャート	P-1	III-b	脚 部 欠 损		
		34	17.00 (10.65)	3.10 (0.3)	硬砂岩	P-2	V-c	脚 部 欠 损		
		35	(12.65) (11.30)	3.75 (0.4)	黑耀石	P-3	I-c	先端部欠损		
		36	(11.65) (11.30)	3.60 (0.4)	黑耀石	P-3	II-b	先端部欠损		
礁	28	37	11.80	11.20	3.40	0.2	黑耀石	P-3	I-c	完 形
		38	(10.60)	13.50	4.70	(0.8)	黑耀石	P-3	I-b	先端部欠损
		39	21.50	15.20	8.20	2.5	黑耀石	P-3	I-b	完 形
		40	10.65	10.00	2.40	0.1	硬砂岩	P-3	I-d	完 形
		41	20.80	17.00	3.90	0.9	黑耀石	P-4	III-c	完 形
		42	(11.50) (11.20)	5.60	(0.6)	黑耀石	P-4	—	脚 部 欠 损	
		43	(17.50) (13.40)	2.60	(0.3)	黑耀石	P-4	V-c	先端部欠损	
		44	12.80	11.10	2.75	0.2	硬砂岩	P-5	V-d	完 形
		45	19.40 (10.10)	3.00	(0.2)	黑耀石	P-9	V-c	脚 部 欠 损	
		46	(7.50) 19.60	3.90	(0.4)	黑耀石	Q-3	II-a	先端部欠损	
		47	(20.00) (10.80)	4.50	(1.0)	黑耀石	Q-3	II-b	脚 部 欠 损	
		48	14.60 (11.00)	2.70	(0.3)	硬砂岩	第2号生源带	III-d	脚 部 欠 损	
		49	(15.90) 13.10	3.00	(0.4)	黑耀石	R-8	I-c	先端部欠损	
		50	(11.80) 12.70	2.90	(0.3)	黑耀石	S-8	I-c	先端部欠损	
		51	23.05	15.35	3.80	0.8	硬砂岩	V-0	III-b	完 形
		52	23.40	17.95	3.65	1.0	黑耀石	V-1	V-b	完 形
		53	30.70	26.95	3.65	1.4	黑耀石	V-2	V-a	完 形
		54	12.75	15.00	3.35	0.4	黑耀石	W-1	V-c	完 形
		55	24.85 (14.40)	2.45	(0.5)	黑耀石	X-1	III-b	脚 部 欠 损	
		56	(13.85) (6.45)	2.30	(0.2)	黑耀石	X-1	—	脚 部 残 存	
		57	10.10	10.40	2.80	(0.2)	黑耀石	X-2	III-d	完 形
		58	(14.25) (9.60)	2.90	(0.4)	チャート	Y-1	—	基 部 欠 损	
礁	30	59	(59.10)	60.55	26.35	(128)	砂 岩	B-9	II	$\frac{1}{3}$ 欠 损
		60	(112.15)	81.20	34.45	(433)	砂 岩	C-10	II	$\frac{1}{3}$ 欠 损
		61	(111.45)	(90.50)	(45.50)	(517)	安山岩	G-10	I	$\frac{1}{3}$ 欠 损
		62	(82.70)	64.20	55.20	(412)	砂 岩	D-1	III	$\frac{1}{2}$ 欠 损
		63	(88.10)	84.40	57.45	(508)	砂 岩	J-5	III	$\frac{1}{2}$ 欠 损

第6表 石器計測表②

磨 石	64	133.25	53.40	39.10	410	安山岩	N-2	Ⅲ	完	形	
	65	121.40	52.20	48.05	555	砂 岩	N-2	Ⅲ	完	形	
	66	(80.55)	77.40	48.50	(408)	砂 岩	N-3	Ⅲ	欠	損	
	67	(53.85)	57.50	34.20	(153)	砂 岩	N-3	Ⅲ	欠	損	
	68	125.00	(132.70)	48.00	(988)	安山岩	O-2	Ⅲ	略	完	形
	69	124.60	56.70	33.30	342	砂 岩	O-2	Ⅲ	完	形	
	70	110.45	54.45	35.00	282	砂 岩	O-3	Ⅲ	完	形	
	71	105.65	81.10	47.30	(512)	砾 岩	S-4	Ⅲ	略	完	形
	72	110.50	97.40	(48.10)	(500)	砾 岩	V-1	I	1/3	欠	損
	73	98.80	89.75	45.35	588	安山岩	Z-3	I	完	形	
	74	141.60	46.90	36.10	361	砂 岩	O-2	Ⅲ	完	形	
石 器	75	93.20	38.50	13.75	56	安山岩	A-7	I	完	形	
	76	111.50	39.90	16.10	58	玄武岩	B-9	I	完	形	
	77	(78.35)	43.55	12.50	(47)	安山岩	C-3	I	頭部	欠	損
	78	115.40	52.65	19.75	128	輝綠岩	C-8	I	略	完	形
	79	(91.50)	48.00	17.45	(83)	安山岩	E-5	I	頭部	刀部	欠損
	80	(93.75)	49.75	13.30	(115)	砂 岩	F-10	I	略	完	形
	81	(75.75)	56.00	23.85	(122)	安山岩	F-3	I	頭部	欠	損
	82	58.65	46.15	9.75	22	硬砂岩	N-9	Ⅲ	完	形	
	83	(102.10)	49.20	18.80	(96)	砾 岩	O-3	I	刀部	欠	損
	84	131.60	45.80	20.45	122	安山岩	K-9	Ⅲ	完	形	
	85	136.85	56.80	24.90	178	安山岩	第2号住居跡	Ⅲ	完	形	
石 器	86	29.65	43.35	7.15	7	硬砂岩	B-9	I	完	形	
	87	38.25	62.65	12.25	15	硬砂岩	K-6	I	完	形	
	88	58.00	70.45	14.65	42	硬砂岩	M-9	I	完	形	
	89	67.05	27.65	10.70	26	硬砂岩	O-2	Ⅲ	完	形	
	90	99.60	58.10	11.70	57	チャート	K-8	Ⅲ	完	形	
	91	62.20	96.60	18.70	74	硬砂岩	第2号住居跡	I	完	形	
	92	22.30	14.95	3.85	1	真 砂	M-2		完	形	
	93	28.00	12.25	4.65	0.6	硬砂岩	O-2		完	形	
	94	56.00	32.45	15.25	46	硬砂岩	O-2		完	形	
	95	10.10	12.70	2.25	0.2	黑曜石	N-2		完	形	

第7表 石器計測表(③)

石器について

石 錐 (第27・28図1~58、図版第30)

58点のうち完形品27点=46.5%である。他は先端部7点・片側脚部15点・両脚部3点・先端・脚部3点・基部2点を欠損、脚部残存1点である。

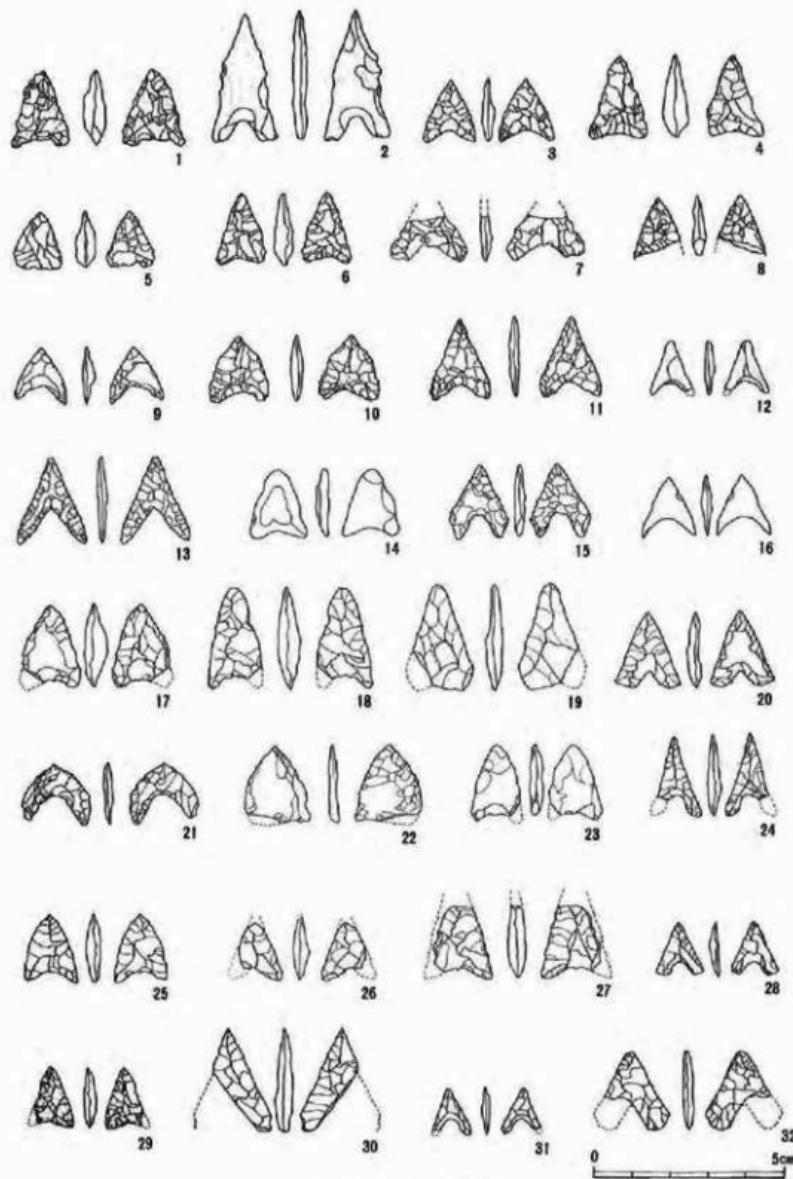
石錐の形状

基部・両脚部欠損で形状不明を除くと、全て茎をもたない平基式無茎錐^{9%}—17%と、凹基式無茎錐^{12%}—83%である（以下、平基式・凹基式）。平基式^{9%}—44.4%、凹基式^{22%}—53.5%の完形品をみる。

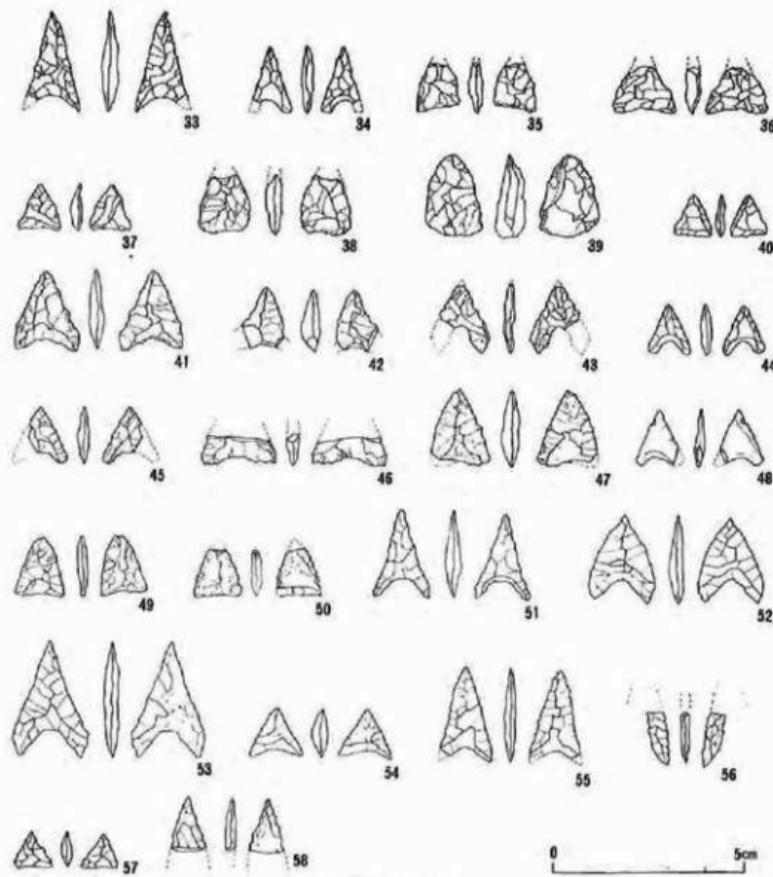
欠損の状況

平基式 先端部^{1/2}—80%・脚部^{1/2}—20%

凹基式 先端部^{1/2}—25%・脚部^{1/2}—90%（先端、脚部をあわせて欠損するものを加える）



第27図 石器実測図①



第28図 石器実測図②

平基式が先端部、凹基式が脚部を80%以上欠く。凹基式の形状に因をなすであろうが、凹基式に先端部欠損が少なく、平基式に多い状況は素材の節理・選別（いわゆる縦長剝片・横長剝片等）に関係するかも知れない。平基式に縱欠損する資料はあまり見ない。

石器の材質

黒耀石製 $\frac{1}{2}$ —70%・硬砂岩製 $\frac{1}{2}$ —16%・頁岩製 $\frac{1}{2}$ —7%・チャート製 $\frac{1}{2}$ —7%で黒耀石製が圧倒する。

平基式 黒耀石製 $\frac{1}{2}$ —89%・硬砂岩製 $\frac{1}{2}$ —11%

凹基式 黒耀石製 $\frac{1}{2}$ —67%・硬砂岩製 $\frac{1}{2}$ —19%・頁岩製 $\frac{1}{2}$ —7%・チャート製 $\frac{1}{2}$ —7%

平基式は黒耀石製がさらに圧倒し、凹基式は黒耀石製が卓越しながら他石材に分散する傾向を示す。

完形品の材質別遺存度

黒耀石製 $\frac{1}{2}$ —49%・硬砂岩製 $\frac{1}{2}$ —44%・頁岩製 $\frac{1}{2}$ —50%・チャート製 $\frac{1}{2}$ —25%

チャート製に完形品が少ない他は、各材質とも50%前後で完形品が遺存する。

材質による欠損の状況

黒耀石製 先端部 $\frac{1}{2}$ —33%・基部 $\frac{1}{2}$ —10%・脚部 $\frac{1}{2}$ —43%・先端、脚部 $\frac{1}{2}$ —14%

硬砂岩製 脚部 $\frac{1}{2}$ —100%

頁岩製 脚部 $\frac{1}{2}$ —100%

チャート製 基部 $\frac{1}{2}$ —33%・脚部 $\frac{1}{2}$ —67%

凹基式卓越下で脚部欠損が各石材とも目立つが、先端部欠損は黒耀石製が全てである。

石鎚の長さ

平基式—最長21.5mm (39)・最短10.65mm (40)・差10.85mm・平均14.7mm・平均以上 $\frac{1}{2}$ ・未満 $\frac{1}{2}$

凹基式—最長34.0mm (2)・最短10.1mm (57)・差23.9mm・平均18.9mm・平均以上 $\frac{2}{3}$ ・未満 $\frac{1}{3}$

石鎚の巾

平基式—最長15.2mm (39)・最短10.0mm (40)・差5.2mm・平均12.5mm・平均以上 $\frac{1}{2}$ ・未満 $\frac{1}{2}$

凹基式—最長20.95mm (53)・最短10.4mm (57)・差10.55mm・平均14.9mm・平均以上 $\frac{16}{23}$ ・未満 $\frac{7}{23}$

石鎚の厚さ

平基式—最厚8.2mm (39)・最薄2.4mm (40)・差6.0mm・平均4.0mm・平均以上 $\frac{1}{2}$ ・未満 $\frac{1}{2}$

凹基式—最厚6.45mm (4)・最薄2.2mm (31)・差4.25mm・平均3.3mm・平均以上 $\frac{27}{23}$ ・未満 $\frac{2}{23}$

石鎚の重さ

平基式—最重2.5g (39)・最軽0.15g (40)・差2.35g・平均0.93g・平均以上 $\frac{1}{2}$ ・未満 $\frac{1}{2}$

凹基式—最重1.9g (2)・最軽0.2g (28他)・差1.7g・平均0.72g・平均以上 $\frac{16}{23}$ ・未満 $\frac{7}{23}$

石鎚の法量は小形品に平基式・凹基式とも共通する。平基式に大形品が欠除するため、凹基式に変動巾が大きい。平基式に比して長さ2.2倍、巾2倍を示す。長さと巾の比率(巾を1)は平基式1.18:1、凹基式1.27:1、先端部角度は46°・43°と若干凹基式に長さが目立つが、数値的には平基式に比例した変動巾をもつと言える。石鎚の大小の機能差をおいて、大きく石鎚をとらえた場合に大過なくなる。

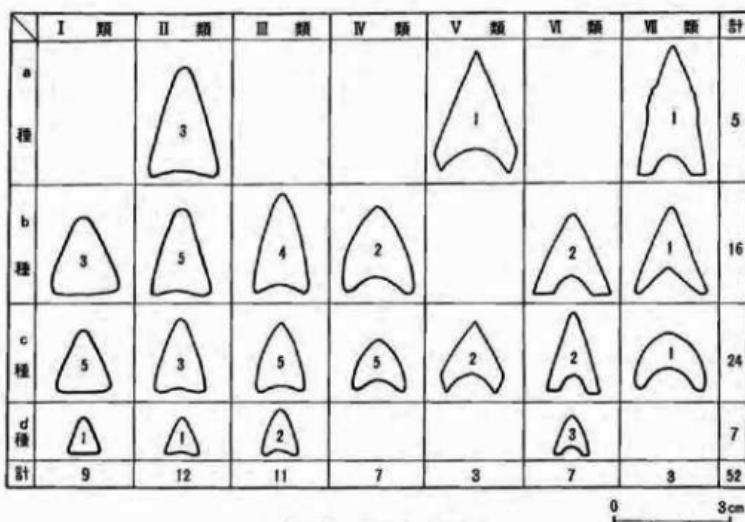
註4

石鎚の長さと巾の変動巾は24mm・11mmと長さに対して巾は少ない。これは巾に基準をもって器種別に長さをわりだす結果らしい。

註5

石鎚の厚さと重さは相関関係をもつ。平基式が厚く重い。平基式最厚・最重(39)が群をぬく。除いた平均は厚さ3.48mm・重さ0.41gと下降して凹基式に同値、あるいは以下となる。しかし大形品欠除のなかでやはり厚く重い傾向をみる。

平基式・凹基式の数値的相違は形状そのものと言える。すなわち脚部(逆刺)の造り出しに



第29図 石鏃分類図

よる行為である。平基式の長さを増せば、それはすでに石鏃の概念からはずれたものとなり、凹基式の抉りの深浅・広狭は長さ・巾に相関する。そこには当然機能差が含まれて数値的な操作ではあまりにも大略すぎる。平基式から凹基式の抉りが深くなる（長脚）に比例して、造作が精巧、かつ薄く軽く覗くなっていくのは普遍といえよう。

石鏃の分類

52点の形状を把握される石鏃は7類に分けられ、さらに法量の大小によってa～d種される。本来、長さ・巾・先端部の角度・側辺の湧曲度・抉りの深さ・脚部形状等の数値的な分類法をとらねばならぬであろうが、大略にそって、視感に頼った。

I類 平基式石鏃である。

a種なし・b種% (22・38・39) · c種% (5・35・37・49・50) · d種% (40)

大形品を欠除して、c種が目立つ。d種が硬砂岩製の他は黒曜石製である。

II類 凹基式石鏃である。抉りは1.0～2.0mmを測る。

a種-% (19・27・46) · b種-% (1・4・17・36・47) · c種-% (14・23・29) · d種-% (57)

大形品から小形品を含み、もっとも出土例が多い。b種が多く、a・c種に集中する。概して大形の傾向をもつ。a種に硬砂岩、c種に頁岩が各1点使用される。他は黒曜石製である。

III類 凹基式石鏃である。抉りは3.0mm内外である。全体的な形状はII類に似るが抉りが深いだけ逆剥部が明瞭となる。造作も精巧差を増す。

a種一なし・b種 $\frac{1}{11}$ (18・33・51・55)・c種 $\frac{1}{11}$ (6・11・25・26・41)・d種 $\frac{2}{11}$ (12・48)
大形品を欠除するが、b種では大形に属する。b・c種に集中して、d種もこの種では目立つ。b種に硬砂岩製、チャート製各1点が含まれ、d種は2点とも硬砂岩である。c種は全て黒耀石製である。

IV類 四基式石鐵である。抉りは4.0~5.0mmを測る。長さ・巾の差が少なく平基式に似る。側辺部は円弧状に近い。

a種一なし・b種 $\frac{2}{11}$ (10・52)・c種 $\frac{1}{11}$ (3・9・16・45・54)・d種一なし
大形品、小形品を欠除して、c類が目立つ。c種に頁岩製、チャート製各1点を含む他は黒耀石製である。

V類 四基式石鐵である。抉りは6.0~7.0mmと深い。直線的な側辺から逆刺外側が削がれる。

a種 $\frac{1}{11}$ (53)・b種一なし・c種 $\frac{1}{11}$ (15・43)・d種一なし
資料は少ないが、中形品・小形品を欠除する。全て黒耀石製である。

VI類 四基式石鐵である。抉りは4.0~6.0mmを測る。抉りの巾と逆刺の巾が同値を示して、逆刺が直線的になる。いわゆる銀形鐵タイプのものである。

a種一なし・b種 $\frac{1}{11}$ (20・32)・c種 $\frac{1}{11}$ (24・34)・d種 $\frac{1}{11}$ (28・31・44)
大形品は欠除する。b~d種に分散して、特に小形品にこの類が多い。b種が黒耀石製、c種が硬砂岩製、チャート製各1点、d種が黒耀石製1点、硬砂岩製2点と黒耀石の遺存度が少ない特徴をもつ。

VII類 上記に分類されない四基式石鐵である。

a種(2) 平基式を除くと厚さ・重さ・長さで最高品である。硬砂岩製。抉りは5mmで逆刺の形態は鉛形に近い。側辺のなか程に対応する4つの刺状の突起をもって、五角形状となる。いわゆる飛行機鐵とは違うらしい。註6

b種(13) 黒耀石製で作成は特に精巧である。抉りは8.5mmと深く、側辺・抉りとも直線的である。二等辺三角形の長脚鐵タイプである。

c種(21) 黒耀石製で作成はやはり精巧である。長さより巾がひろい唯一の例である。抉りは5.5mm、側辺・抉りとも円弧状を呈する。円脚鐵タイプである。

本遺跡で出土する石鐵はI類 $\frac{1}{12}$ -18%・II類 $\frac{1}{12}$ -23%・III類 $\frac{1}{12}$ -21%・IV類 $\frac{1}{12}$ -13%・V類 $\frac{1}{12}$ -6%・VI類 $\frac{1}{12}$ -13%・VII類 $\frac{1}{12}$ -6%である。II類が最多であるが、近似するIII類を加えて $\frac{2}{12}$ -44%でこの両者が卓越する。

法量ではa種 $\frac{1}{12}$ -10%・b種 $\frac{1}{12}$ -31%・c種 $\frac{1}{12}$ -46%・d種 $\frac{1}{12}$ -13%である。c種が圧倒して、b種が続く。a・d種はd種が若干多いがほぼ同様で存在する。

本遺跡の主体となる石鐵はI類c種、II類b・c種、III類b・c種、IV類c種である。

類別による材質依存度はI類黒耀石製 $\frac{1}{9}$ -90%・硬砂岩製 $\frac{1}{9}$ -10%、II類黒耀石製 $\frac{10}{12}$ -84%

硬砂岩製 $\frac{1}{12}$ —8%、頁岩製 $\frac{1}{12}$ —8%、Ⅲ類黒耀石製 $\frac{1}{11}$ —64%、硬砂岩製 $\frac{3}{11}$ —27%、チャート製 $\frac{1}{11}$ —9%、Ⅳ類黒耀石製 $\frac{1}{7}$ —72%、頁岩製 $\frac{1}{7}$ —14%、チャート製 $\frac{1}{7}$ —14%、Ⅴ類黒耀石製 $\frac{1}{7}$ —100%、Ⅵ類黒耀石製 $\frac{1}{7}$ —43%、硬砂岩製 $\frac{1}{7}$ —43%、チャート製 $\frac{1}{7}$ —14%、Ⅶ類黒耀石製 $\frac{1}{3}$ —67%、硬砂岩製 $\frac{1}{3}$ —33%である。

法量別による材質依存度は a 種黒耀石製 $\frac{1}{5}$ —60%、硬砂岩製 $\frac{1}{5}$ —40%、b 種黒耀石製 $\frac{14}{16}$ —88%、硬砂岩製 $\frac{1}{16}$ —6%、チャート製 $\frac{1}{16}$ —6%、c 種黒耀石製 $\frac{19}{21}$ —79%、硬砂岩製 $\frac{1}{21}$ —5%、頁岩製 $\frac{2}{21}$ —8%、チャート製 $\frac{2}{21}$ —8%、d 種黒耀石製 $\frac{1}{7}$ —29%、硬砂岩製 $\frac{1}{7}$ —71%である。

材質別の平均値は黒耀石製70%、硬砂岩製16%、頁岩製7%、チャート製7%であったことから、類別ではⅦ類・Ⅰ類・Ⅱ類の順で黒耀石依存度がたかく、Ⅷ類に極端にひくい。法量別では黒耀石製が b 種に目立つが、b 種・a 種には他石材、特に硬砂岩の依存度がたかい。Ⅰ類 b・c 種、Ⅱ類 b 種、Ⅲ類 c 種、Ⅴ類 a・c 種は全て黒耀石製である。中形品に集中する傾向をみる。造作も比較的精巧であって、本遺跡ではもっとも一般的なタイプである。黒耀石製以外の材質、特に硬砂岩製はⅥ類 d 種に特徴である。さらにⅡ類 a 種、Ⅶ類 a 種、Ⅷ類 b 種と大型品・小形品に限られて依存されている。頁岩・チャート製は中形品、凹基式の逆刺の発達のないⅡ・Ⅲ類 b・c 種に混在する。

本遺跡は縄文時代早期中葉～末葉・前期後半～中期初頭の2時期にまたがる。したがって石器が2時期を含んでいることは言うまでもない。幸い、早期中葉～末葉土器分布図がL～Q一1～5グリッドに限られることから、それをひろうと27点である。Ⅰ類 b 種 $\frac{7}{3}$ ・c 種 $\frac{5}{6}$ ・d 種 $\frac{1}{1} \cdot \frac{5}{6}$ —55%、Ⅱ類 a 種 $\frac{1}{3}$ ・b 種 $\frac{1}{3}$ ・c 種 $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{7}{12}$ —58%、Ⅲ類 b 種 $\frac{2}{4}$ ・c 種 $\frac{3}{5}$ ・ $\frac{5}{11}$ —45%、Ⅴ類 c 種 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ —33%、Ⅵ類 b 種 $\frac{1}{2}$ ・c 種 $\frac{1}{2}$ ・d 種 $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{7}{1}$ —100%に分けられる。Ⅷ類、すなわち獣形器タイプは全て早期分布図より出土する。Ⅰ・Ⅱ類は半数以上、Ⅲ・Ⅴ類が約半数である。Ⅰ～Ⅲ類は縄文時代に普遍的な存在であろう。

磨石（第30・31図59～74、図版第31）

磨石が複数の機能を果たすことは知られている。本遺跡も例外なく転用が認められる。したがってふつう磨石・凹石・敲石等と呼称される石器を含んでいる。

16点のうち完形品6点—37.5%である。うち2点（64・74）は出土地点を異にした接合資料である。他は略半分を欠損する資料が多い。 $\frac{1}{16}$ ～ $\frac{1}{12}$ 程の破片9点があるがここに含めなかった。

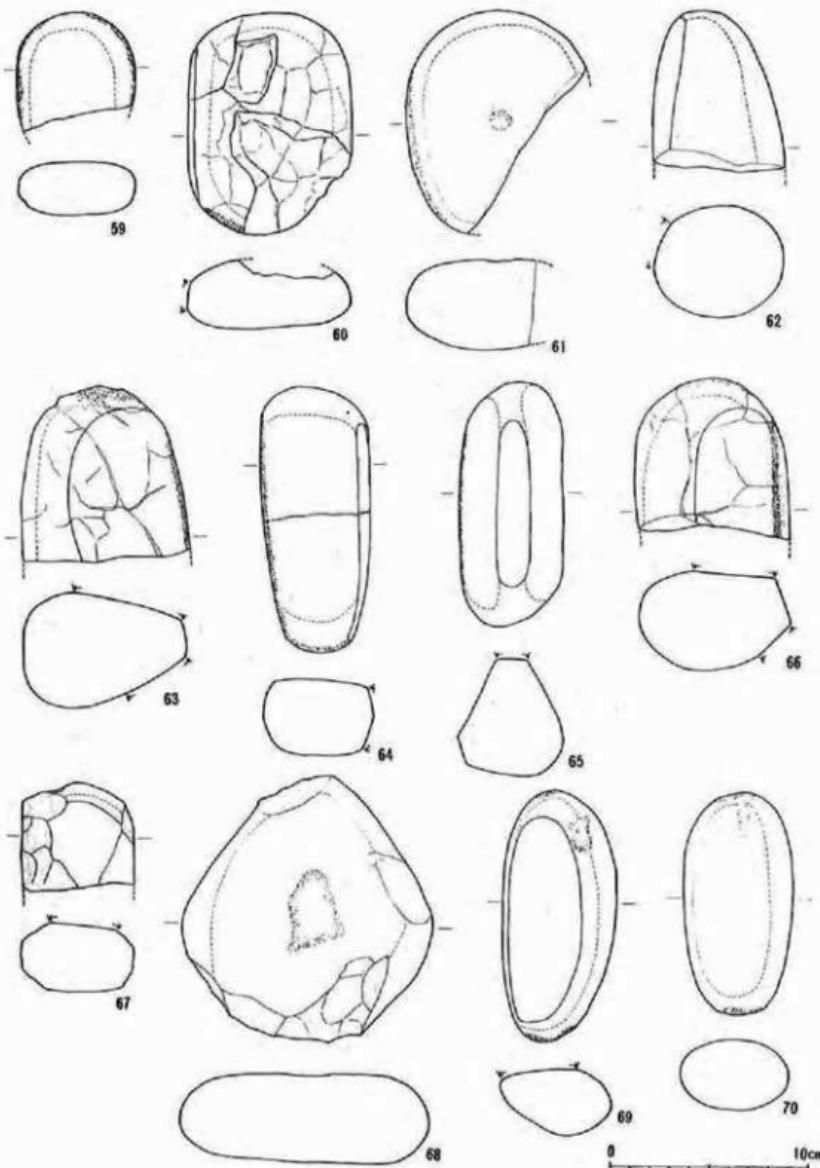
磨石の形態

平面形がほぼ円形・断面が長円形のもの（Ⅰ類）、小判形、あるいは「石輪」状、「たわし」状のもの（Ⅱ類）、棒状のもの（Ⅲ類）に大別される。

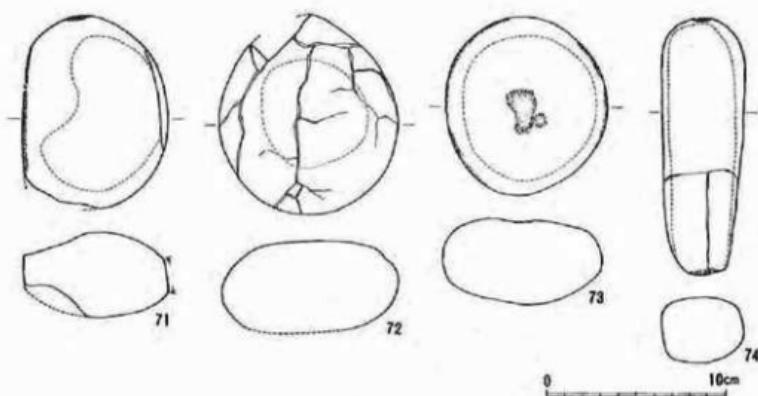
Ⅰ類 $\frac{3}{16}$ —19%、Ⅱ類 $\frac{5}{16}$ —31%、Ⅲ類 $\frac{5}{16}$ —50%である。

欠損の状況

Ⅰ類 $\frac{1}{3}$ —33%、Ⅱ類 $\frac{1}{2}$ —40%、Ⅲ類 $\frac{1}{2}$ —62.5%、全体で $\frac{7}{16}$ —43.7%がほぼ中央部を長辺に対



第30図 石器実測図③



第31図 石器実測図④

して横に切断されるように欠損する。長辺に対して横から大きな蓄力が加わったためと考えられる。Ⅲ類に顕著である。さらにⅠ類 $\frac{1}{4}$ —25%・Ⅱ類 $\frac{2}{3}$ —60%が側面を大きく欠損する。その部分を敲打したためであろう。

他に「ひび割れ」をするものがⅡ類 $\frac{1}{4}$ —25%・Ⅲ類 $\frac{2}{3}$ —25%がある。いずれも砂岩製である。

磨石の材質

砂岩製 $\frac{7}{16}$ —56%・安山岩製 $\frac{1}{16}$ —25%・礫岩製 $\frac{1}{16}$ —19%である。

Ⅰ類 安山岩製 $\frac{2}{3}$ —67%・礫岩製 $\frac{1}{3}$ —33%

Ⅱ類 砂岩製 $\frac{2}{3}$ —60%・安山岩製 $\frac{1}{6}$ —20%・礫岩製 $\frac{1}{6}$ —20%

Ⅲ類 砂岩製 $\frac{5}{16}$ —75%・安山岩製 $\frac{1}{16}$ —12.5%・礫岩製 $\frac{1}{16}$ —12.5%

Ⅰ類に砂岩の依存がないが、全体をとらえると砂岩・礫岩製等の堆積岩が圧倒する。

磨石の法量

欠損品が多いことから積極的に計測に頼れない。

磨石の分類

形状によって3類に分けられ、視感による大方の法量でさらに細分される。

Ⅰ類 平面形がほぼ円形・断面が長円形のものである(61・72・73)。

最大例(72)が長さ110.5mm・巾94.4mm・厚さ略48mm、最小例(73)が長さ97.4mm・巾89.75mm・厚さ45.35mmである。重さは50g前後である。計測不能例(61)も同位であり、他類に比して均等している。

61は過半を欠損する。側面に打痕、表面に若干の凹み痕をもつ。72はいわゆる磨石である。「ひび割れ」によって碎化したものを見出された。したがって $\frac{1}{3}$ 程度を欠くため敲打によるものかは判然としない。別の要因も考えられよう。73は側面に打痕、表面に凹み

痕をもつ。「ひび」が無数に認められる。

Ⅱ類 小判形、あるいは「石輪」状・「たわし」状のものである。欠損品が特に多いが、残存する巾によって大形～小形の a～e 種に細分される。

a 種一 (68) 偏平・菱形状で形状・大きさからすれば台石的である。表面中央部に細かい打痕による凹みが認められる。菱形状の角部分が敲打によって欠損され、下部に特に顕著である。

b 種一 (60・71) 偏平・小判形である。60は側面下部に打痕が認められ、そこから波及するように表面 $\frac{1}{2}$ が欠損する。左側面に磨耗痕をもつ。「ひび割れ」が顕著である。71は裏面 $\frac{1}{4}$ をやはり敲打によって欠損する。側面頭部・左側面に打痕、右側面に磨耗痕が認められる。

c 種一 (59・67) 本遺跡出土磨石中、もっとも小形品である。両資料とも略 $\frac{1}{2}$ を敲打によつて欠損する。59は偏平・小判形で側面に細かい打痕をみる。67は「石輪」状・「たわし」状で両側面に大きく打痕が残る。表面には磨耗痕が認められる。

Ⅲ類 棒状のものである。大形のもの—a 種、四角柱状のもの—b 種、三角柱状のもの—c 種、細長い自然石風のもの—d 種に分けられる。

a 種一 (62・63・66) 全てが中央部を長辺に対し横に切断されている。62は左側面に磨耗痕がみられる。63は表面・裏面の左半部に磨耗痕がみられ、側面頭部・左側面に細かい打痕が認められる。「ひび割れ」が顕著である。66も表面・裏面の左半部に磨耗痕。側面頭部・左側面に細かい打痕をみる。「ひび割れ」も顕著で、構造は63にまったく同じである。

b 種一 (64) 四角柱状で右側面に段をもって磨耗痕が残る。極端か再度の使用のためか。左側面から下部にかけて細かい打痕をみる。したがって「する」・「たたく」の機能を同時に併用したとしてよい例といえる。中央部を切断され、同グリッド内であったが、出土地点を異にした接合品である。

c 種一 (65) 三角柱状で角部分の 1 辺に磨耗痕が、さらに 1 辺は細かい打痕が認められる。やはり64同様に「する」・「たたく」を同時に併用したと言えよう。第5号集石跡の南西部分に出土した。構築面と同レベルであったことから、集石跡に組まれたものであろう。

d 種一 (69・70・74) 長細い自然礫を使用した敲石的タイプのものである。69は表面全体に磨耗痕がみられ、側面頭部・下部と頭部下半の 3箇所に細かい打痕が認められる。70は明瞭な磨耗痕は認められないものの、69同様に側面頭部・下部と頭部下半の 3箇所に細かい打痕をもつ。74は磨耗痕をもたず、側面頭部・下部に細かい打痕をもつ。もっとも敲石的性格の強いものであろう。同グリッド内であったが、64同様に出土地点を異にするものであった。

本遺跡で出土する磨石は「する」・「たたく」を併用した例が圧倒的に多い。

I 類はいわゆる縄文時代に一般的な磨石である。磨石が凹石に併用されることも一般に認められることであつて、2点が凹みを施す。さらに不明な1点を除くと側面に打痕が認められる。明瞭な磨耗痕は認められず、「する」より「つぶす」機能を考えるべきで、それに「たた

く」を併用したとするのが妥当であろうか。

II類も縄文時代一般に磨石として普遍である。a種が形状・凹みの有・敲打による大きな剝離痕等から複数の機能を有して、磨石の概念からは離れるかも知れない。b種は側面に打痕・磨耗痕を併用して、いずれも打痕から波及するように裏面を欠損している。「する」・「たたく」の他に強い敲打をなしたと思われる。c種は側面打痕のみと、側面に打痕、表面に磨耗痕を併用された例がある。後者は石斧の可能性もあったが、打痕が極端であることから磨石と判断した。したがって両者には機能差を考えなくてはならないであろう。

いずれも断面形が偏平であるためか、側面によって「する」・「たたく」され、磨り巾が狭く、直線的となる。

III類はa～c種がいわゆる「特殊磨石」で、信州地方でいう「こくずり石」に該当しよう。
注7
a種は大形で全て略半分を欠損する特徴をもつ。断面形は略三角形状で、1点が角部分に磨耗痕をもつ。他の2点は形状がまったく同様で、三角形の二辺に磨耗痕、その頂部に打痕をもつ。磨耗痕は巾広いものではなく平面的・直線的であって、広く鷺曲しない。磨耗は顕著であって、頂部の打痕、すなわち打面の整形のためときえ受けとれる。とにかく簡単な「する」・「たたく」が特徴である。b種・c種も形状こそ四角・三角形と相違はあるものの、簡単な「する」「たたく」は同様である。磨面・打面の巾に意味をもって、そうした角をもつ素材が選ばれた感覚である。d種は表面に大きく磨耗痕をもつ例もあるが、長細い自然石の長端部に打痕をもって、敲石的色彩の濃いものである。

出土区はIII類が全てとII類a種・c種(67)が早期土器分布圏から、I類の全てとII類b種・c種(59)はそれ以外である。III類がやはり早期的な磨石であろう。

なお、磨石と対をなす石皿の出土はない。

石斧(第32図75～85、図版第32)

全て打製である。11点のうち大略完形品7点で、他の4点は刃部、ならびに頭部・刃部を欠損している。

石斧の形状

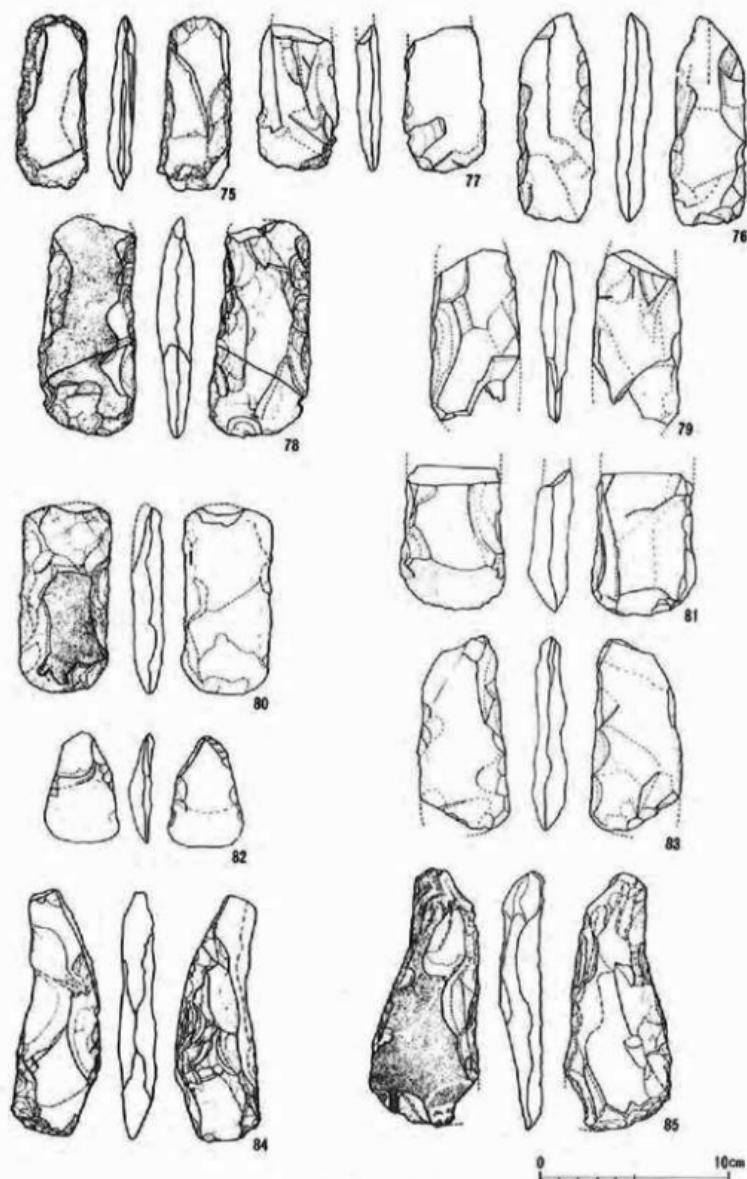
短冊形(I類)・楔形(II類)・小形(III類)に大別される。欠損品4点も残存する側辺から短冊形であって、I類 $\frac{9}{11}$ —73%、II類 $\frac{3}{11}$ —18%、III類 $\frac{1}{11}$ —9%である。I類が圧倒する。

欠損の状況

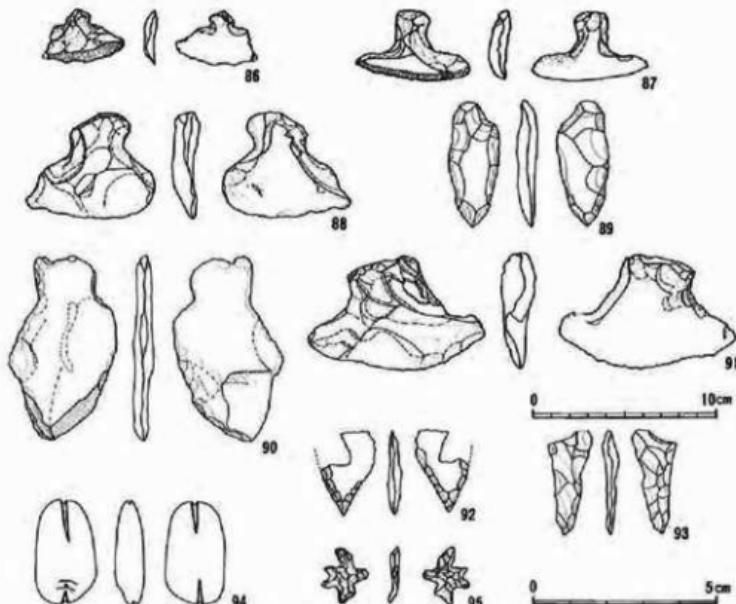
刃部、ならびに頭部・刃部を欠損するなど使用によるであろう欠損品が多い。したがって他も刃部の細かい欠損、刃こぼれ、磨滅痕等が目立つ。絶対量の差もあるがI類に欠損例が多い。

石斧の材質

安山岩製 $\frac{6}{11}$ —55%、玄武岩製 $\frac{1}{11}$ —9%、輝緑岩製 $\frac{1}{11}$ —9%、砂岩製 $\frac{1}{11}$ —9%、硬砂岩製 $\frac{1}{11}$ —9%、珪岩製 $\frac{1}{11}$ —9%である。安山岩の遺存度がたかい他は分散する。材質的には硬質な火成



第32図 石器実測図⑤



第33図 石器実測図⑥

岩に依存され、砂岩系、すなわち堆積岩は極端に少ない。当然ながらその機能差をもって磨石と相反する。

石斧の法量

I類 最大品長さ115.40mm・巾52.65mm・厚さ19.75mm・重さ128g、最小品長さ93.20mm・巾39.90mm・厚さ16.10mm・重さ58gである。比較的均等する。

II類 2点の資料であるが計測値は似る。長さ131.60mm・巾45.80mm・厚さ20.45mm・重さ122gと、長さ136.85mm・巾56.80mm・24.90mm・重さ178gである。I類より大振りである。

III類 長さ58.65mm・巾40.51mm・厚さ9.75mm・重さ22gで超小形である。

全体的に大形品はない。

石斧の分類

I類 短圆形である。両刃（a種）と片刃（b種）に細分される。

a種—（75・77～81）77・79・81は頭部・刃部を欠損するが、残存する側辺が直線的であり片側刃部も認められることからa種とした。

%—55%で本遺跡中もっとも多い。頭部・刃部の巾が同値にちかいため長方形を呈する。78・80・81に自然面が表面に残って、78・81はそのまま刃部を作成している。78・80は刃部・側辺とも入念な敲打によって調整される。80は砂岩製のためか磨滅による鈍化が著しい。他は第

I 刺離面、またはそれを簡単な敲打をもって刃部・側面を造作する例が多い。刃部に使用による磨滅、鈍化するが、側辺中央部が若干くびれて、「円滑化した磨滅」が観察される。

b種一 (76・83) 片刃のためか頭部より刃部が若干巾ひろい。したがって頭部はまったく加工がなされず、側辺・刃部も簡単な敲打により造作される。全体的に粗雑である。83は刃部の大半を欠く。側辺中央部が若干くびれて、「円滑化した磨滅」が観察される。

II類 撥形である (84・85)

側辺が湾曲して片側によれる形状である。刃部は弧状を呈する。頭部より刃部が圧倒して巾ひろいため大きく撥形ととらえたが、概念からははずれ気味である。

84は第1次刺離面、85は自然面をひろく残す。頭部には加工がなされず、湾曲する外側側辺に敲打が顕著であるが、内側側辺・刃部は簡単な敲打によって造作されるに過ぎない。外側側辺の集中的敲打は本類の湾曲を意図としたときえ受け取れる。側辺中央頭部寄りから頭部にかけて「円滑化した磨滅」が観察される。握斧的なタイプと言えるかも知れない。

III類 小形品である (82)

刃部は弧状を呈する。頭部より刃部が巾ひろく撥形的である。表面には自然面をひろく残して、刃部は打ち放しで加工されない。したがって断面形は「カマボコ」状となって、裏面にかけて若干内湾する。側辺から頭部にかけて簡単な敲打によって造作する。形状・法量から『石鎚』的である。

石 鎚 (第33図86~91、図版第32)

6点が出土している。全て完形である。形状は横形 (I類) と縦形 (II類) に大別される。

I類 $\frac{5}{6}$ 、II類 $\frac{1}{6}$ である。

石鎚の材質は $\frac{5}{6}$ が硬砂岩製で、 $\frac{1}{6}$ がチャート製である。硬砂岩に依存がたかい。

石鎚の法量

I・II類とも大形品~小形品を有するため各個体間の差異が大きく、また資料数も限られることから、法量的な偏差に頼れない。

石鎚の分類

I類 横形である (86~88・91)

大形品から並べると91→73→87→86である。91はいわゆる大形粗製石鎚で巾96.60mm・長さ62.20mmを測る。刃部は第1刺離面をそのまま使用している。つまみ部の造作も大まかな敲打で大きく刺離痕が残る。したがってつまみ部が巾広く、明瞭でないため三角形にちかい。第2号住居跡の出土である。73も粗製で頭部に自然面の残す大振りの剝片に左右より敲打してつまみ部を造作する。敲打は荒い。刃部は刺離面の両側から軽く敲打され造作される。風化が激しい。87は刃部に自然面を残している。刃部には明瞭な加工になされない。つまみ部の造作は比較的入念になされて、くびれ部分は磨滅されている。86はもっとも小形品で巾43.35mm・長さ29.65mm

で91の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程である。やはり刃部に自然面をもった剝片に左右より敲打してつまみ部を作成している。刃部は加工されず、使用痕が目立つ「ノコギリの刃」状となっている。

Ⅱ類 線形のものである (89・90)。

90は大形粗製石匙で長さ99.60mm・巾58.10mmを測る。刃部に自然面を残した薄く大振りの剝片に敲打によってつまみを製作している。敲打は主に片面からなされて、刃部の製作に自然面の裏面を軽く敲打している。89は長さ67.05mm・巾27.65mmを測る。一見すると尖頭器を思う。風化が激しいため細部は不明であるが調整は両面からなされて、他に比して入念である。

石 錐 (第33図92・93、図版第32)

2点が出土している。92は頁岩製で三角形状の剝片の両側辺を軽い敲打によって刃部を作成している。93は硬砂岩製で棒状の剝片の両側辺を入念に敲打して刃部を作成している。

石 鍤 (第33図94、図版第32)

1点が出土している (94)。擦り切り磨製石鍤である。長さ56mm・巾32.45mmの偏平・小判型の硬砂岩を用いて、鍤の両端の中心に巾2～3mm程を擦り切って縦掛溝を作成している。

異形石器 (第33図95、図版第32)

「人手」状を呈する、用途不明の石器である (95)。製作は入念で石錐の済入する凹基式の連続のように感ずる。同様の石器を富士川町木島遺跡で実見している。

註1 囲本勇 1961 「三浦市鶴ガ島台遺跡」「横須賀市博物館研究報告5」

註2 福井県教育委員会 1979 「鳥浜貝塚」—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—

註3 今村啓爾 1972 「宮の原貝塚」武藏野美術大学考古学研究会

註4 佐原真 1964 「石器」「紫雲出」諏訪町文化財保護委員会

註5 神村透 1976 「石錐と統計(1)」「長野県考古学会誌」23・24合併号

1978 「石錐を見て一群と型式からの私考ー」「信濃」30-11

註6 鈴木道之助 1974 「縄文時代晩期における石錐小考—所謂飛行機錐と晩期石錐について—」

『古代文化』26-7

註7 八木光則 1976 「いわゆる『特殊磨石』について—中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起ー」「信濃」28-4

第V章 歴史時代

第1節 遺構

1. 円形土壙

大沢ラビリ層上面に33基が確認された。分布はA地区平坦面に27基、C地区斜面に6基であり、B地区・D地区に皆無であった。傾向はB・D地区とした小丘鞍部・急斜面ではなく、平坦から平坦にちかい斜面、すなわち大沢ラビリ層の堆積状況の良好な個所に多い。

それらは調査区に一様に分布するのではなく、数基を1単位として群在する様子も伺われた。形状は乱れのない正円形である。規模は最大126×121cm、最少56×47cmであるが、大半の土壙が100cm内外の径を測る。深さは検出面より3~36cmと差をもつが、土層観察より表土下層から構築されていることは明確で、本来の深さは50~60cm程度であろう。断面形は全て「L」状を呈する。埋土には表土質の黒褐色土が主体となっていた。

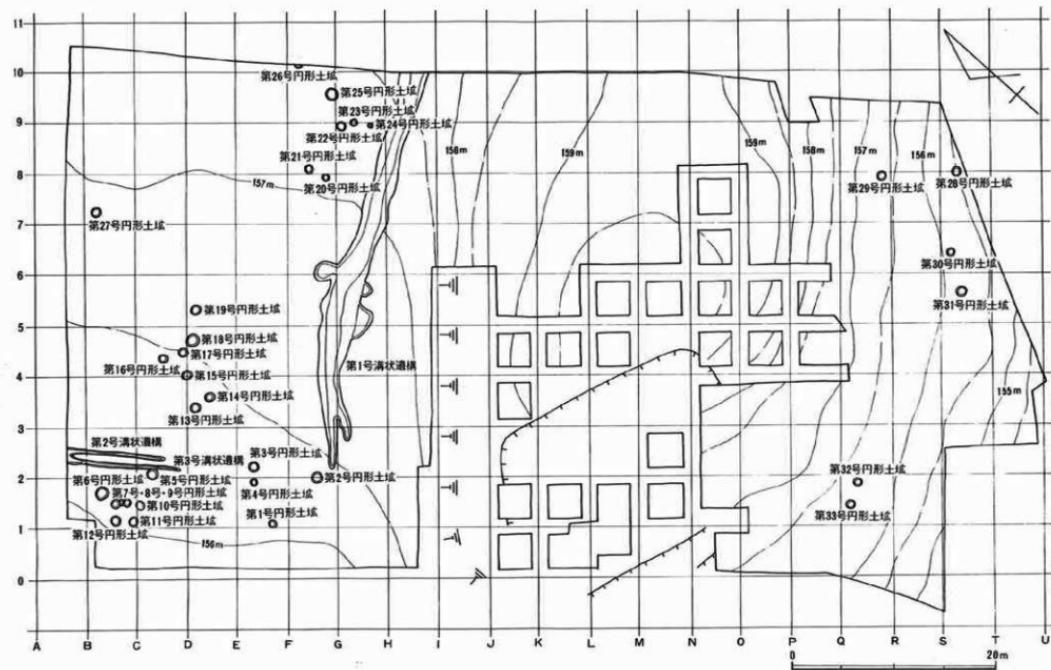
塹内より遺物の出土は皆無であった。

第27号円形土壙 (第35図、図版第16)

B-8グリッドの西隅に検出された。規模は105×101cm、深さ36cmを測る。埋土の状況は、底底が明褐色土層(=橙色土層)まで達するため、ロームブロックを他土壙より含む。壁・底面に明褐色土がブロック状となって混入し、その上部・内側をロームブロックを混入した暗褐色土、さらに暗褐色土・黒褐色土(表土質土)が覆う。状況は自然理没を示さず、塹内に空間を有していたものがある時点で崩れて、上部埋土がそこに流入した痕跡が伺えられた。

No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	備考	No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	備考
1	107×105	8	E-2		18	121×117	18	D-5	
2	118×114	27	F-3		19	100×96	18	D-6	
3	119×116	12	E-3		20	79×76	6	F-8	
4	87×87	12	E-2		21	90×83	6	F-9	
5	106×96	6	C-3		22	107×93	10	G-9	
6	126×117	3	B-2		23	88×82	5	G-9	
7	93×90	9	B-2	8号と重複	24	56×47	4	G-9	
8	60×-	3	B-2	7・9号と重複	25	126×121	11	F-10	
9	88×86	7	B-2	8号と重複	26	-×-	7	F-11	大手が調査区外
10	92×90	12	C-2		27	105×101	36	B-8	
11	87×86	16	B-2		28	88×83	14	S-9	
12	104×93	8	B-2		29	96×91	4	Q-9	
13	101×100	21	D-4		30	107×103	25	S-7	
14	102×100	23	D-4		31	94×88	6	S-6	
15	96×91	8	C-5		32	82×82	23	Q-2	
16	95×93	18	C-5		33	91×90	19	Q-2	
17	98×98	15	C-5						

第8表 円形土壙計測表



第34図 歴史時代遺構全体図

円形土堤について

本遺跡より検出された円形土壙は伴出遺物の出土がなく、明確な時期判断はなされない。

近年、大規模な発掘調査がなされて類例が多い。富士宮市内にも月の輪平遺跡20基以上、月の輪下遺跡48基、月の輪上遺跡22基、若宮遺跡A地区4基がみられる。^{註1}近隣では富士市の同路線内発掘調査で1,200基以上、駿東郡長泉町平畦遺跡^{註2}で26基が検出され、さらに資料は増加し^{註3}
^{註4}てある。

本地域に類例はないが、円形土坑は方形・長方形土坑を伴うらしい。富士市、長泉町例はそうした方形・長方形土坑内に入骨片・六道銭（六文銭）・土器部品・須恵器片（陶器片？）・捕鉢片を伴って円形土坑とも中世～近世にかけての埴墓としている。

円形土壙は一般的に遺物を有さず、方形・長方形土壙に遺存がたかく、またそれらが中心となつて群・グループを形成することから、当時の社会的階層の分化の反映とされる。本地域に^{註5}王墓内の塚がうかぶ。4基の長方形土壙内には人骨片・六道鏡等が遺存して、上部を長方形石組みがなされていた。特権階級の存在は理解されるが、円形土壙との関連はつかんでいない。

円形土墳は庶民階級が座棺・箱式棺あるいは座位・側臥屈葬の埋葬法で形成した墳墓らしい。本遺跡、ならびに本地域出土の円形土墳もそれに準じておきたい。

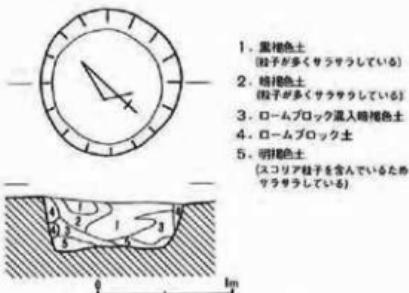
しかし本地域に円形土壙と方形・長方形土壙の共存がいまだ確認されないこと、階級差は理解されても、同じ墳墓でありながら円形土壙に入骨片の遺存が皆無に等しい状況は不安である。

2.溝狀微構

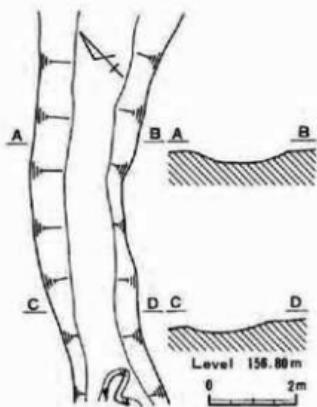
大沢ラビリ層上面に3基が確認された。全てA地区である。

第1号溝状遺構（第36図、図版第15）

F-3グリッドより北東～東に向ってH-10グリッドで調査区外に達する。約40m程が検出された。占地はB地区小丘裾部西側を南西～北東に沿って走る。溝巾は1.0～2.2m程で亂れがある。深さは中程がもっとも深く90cmを測って南端部で6cm、北端部で13cmと浅くなる。これは検出面下の値であって溝底は凸凹であるが、南端から北端に向って一様に高度を増していく。断面形は「皿」状であった。埋土の状況は自然的で平坦面側よりスコリア含有黒褐色土が流入した後、小丘側より小礫・スコリアブロック含有暗褐色土が覆っていた。表土下層より構築さ



第35図 第27号円形土塹測量



第36図 第1号溝状遺構(部分)実測図

溝状遺構は前述の円形土壙、もしくは椭円形、方形、長方形土壙群に伴って検出される場合が多い。若宮遺跡A地区、富士市同路線発掘調査、平畦遺跡等である。

溝内に遺物を伴う例は極く稀で時期判断、性格等不明な部分が多い。土壙群を切る例・切られる例の両者があることから、土壙群構築前後の存在らしい。

平畦遺跡では断面形「U」字状、「V」字状の両溝状遺構を得て、畠地の境界（道路を含めて）や根切り溝、排水溝を想定している。本遺跡に積極的な論考は資料不足であるが^{註7}、同様の遺構を若宮遺跡で確認した。それは地籍図の「うすずみ」すなわち畠地の境界（道路を含めて）に一致していた。第1号溝状遺構を「古道」に、第2・3号溝状遺構を「畠地の境界・根切り溝」に推測しておきたい。

註1 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群』 富士宮市文化財調査報告書第1集

註2 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群Ⅱ』 富士宮市文化財調査報告書第2集

註3 日本道路公团名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士市教育委員会 1979『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士地区)概報』昭和53年度

註4 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・静岡県長泉町 1976『陣場上・平畦遺跡』一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告

註5 植松章八 1976『土壙と溝状遺構について』『陣場上・平畦遺跡』 同上

註6 註1と同じ

註7 註5と同じ

れたことは間違ひなかった。

溝内より遺物の出土はない。

第2号溝状遺構(図版第16)

C-3グリッド中央より北西にむかって調査区外に達する。約12mが検出された。調査区境いで第3号溝状遺構と接する。したがって同一遺構の可能性がある。溝巾は50cm、深さは数cmを測った。

第3号溝状遺構(図版第16)

第2号溝状遺構の南側1mに平行して約14mが検出された。溝巾、深さとも第2号溝状遺構と同様であった。

溝状遺構について

溝状遺構は前述の円形土壙、もしくは椭円形、

第VI章 調査総括

1. 遺跡

代官屋敷遺跡は中央の低地を境に南北にはしる2丘陵を含む。包蔵面積50,000m²が推定されて、本調査の対象は遺跡北辺部6,100m²であった。

地形は本調査区域がもっとも東西2丘陵がはっきりして、南へむかって除々に同一化して平坦面を多くもつようになる。そこから急激に標高を減じて沖積地に没する。この南側平坦面に土器類・須恵器が採集される。また西側丘陵の南辺部では遺跡発見のきっかけとなった山形押型文土器・縄文時代前期後葉～末葉の土器片が採集される。地形条件は本地域の縄文時代中期後葉～後期初頭にかけて盛隆する大規模遺跡（有力歴代遺跡）が占地する広域な台地とは完全に性格を異なる。したがって遺跡の内容はそうした地形条件に起因して多岐多彩であることは充分に予想され、本調査に得た資料が遺跡全てを物語るものではない。

代官屋敷遺跡北辺部に検出された遺構・遺物は前述したとおりである。それは縄文時代早期中葉～末葉、前期後葉～中期初頭、中世～近世と断続的ながら長期にわたって営まれる。この時期の造構・遺物を発掘調査によって得たことは初例である。従前の富士宮市遺跡分布図作成事業によって、市内の遺跡がおおかた網羅されて「歴史的環境」に述べたが、確認される縄文時代早期中葉～末葉、前期後葉の遺跡は比較的多い。しかし本調査でそうであったように、前期初頭木島式土器を出土する出水遺跡、峯石遺跡以降、前期後葉に至るまでの間、遺跡が断絶してしまう。本地域の特色とすべきか。

2. 縄文時代早期中葉～末葉

東側丘陵南東平坦面の約400m²に限られて開始される。第Ⅰ～Ⅴ群土器が検出される。

層序関係を明確に把握できないこと（特に前記土器の出土層序）は『土層』に述べたが、包含層最下層（富士黒土層上部～褐色土層下部）に第Ⅰ～Ⅴ群土器が、その上部（褐色土層下部～褐色土層中）に第Ⅵ～Ⅷ群土器が置く状況は指摘されて、さらに下層の富士黒土層内に遺物の包含がないことから、隣接の若宮遺跡より確実に後出であると言える。^{註2}

集石跡5基はそれら第Ⅰ群～第Ⅴ群土器に覆われて遺存する。しかし集石跡の性格上、内部に遺物が遺存しにくい状況下にあって、第5号集石跡が第Ⅱ群土器燃糸文系土器群、第2号集石跡（集石土塙）が第Ⅴ群土器広義の茅山系土器群を伴う予想がされるだけで、他は不確実なものである。時期差、形態差をもちろん、一般に報告される集石跡（含集石土塙）と大過ない。しかも構成礫には人為的削礫、加熱礫、加熱による削礫が認められず、共通して『火』に関する行為を欠除する。したがって周辺に焼土跡なども確認されず、煮沸に関する可能性も

皆無である。火山性赤色礫の混在が興味深い。

本調査に得た押型文土器は第Ⅰ群土器に分類された楕円押型文土器である。これらについて『土器』に詳しく述べるが、再度まとめる。口縁部より胴部にかけての文様構成が①縦位→横位②横位→横位③横位→縦位④横位→斜位(口唇部刻み目)、さらに胴部下半部には縦位→横位が推定されるものもある。これらは明らかに帶状効果を意図するとみなすべきで、仔細な理解はされないながらも『密接帯状施文』が妥当に思える。さらに器形も胴下半部がふくらみ気味となるもの、単純な形狀の碗彈型などバラエティをもち、器厚も極端に厚手ではないなど、諸要素をもって細久保式土器の構成に類似する。細久保式土器は楕円文が $\frac{1}{2}$ 程を占め、^{註3}鶴沢式土器における山形文比率と立場を逆転させ楕円文卓越化への前哨を示して、高山寺式土器に発展していく。したがって一部の小範囲内に4~5個体の楕円文が集中することも充分考^{註4}えられるが、胎土内に若干の纖維痕、楕円粒肥大化の兆候がみられるなど、幾分後出的要素を感じない訳でもない。

網目状撚糸土器は関東撚糸文土器第一様式第Ⅱ文様帶にみられ、押型文土器に伴出する例として立野遺跡に存在が確認されている。しかし本遺跡第Ⅱ群土器は文様構成・胎土など、それらとまったく違った様相を呈する。東海地方には高山寺式土器に伴出する網目状、ないしは格子目状と称される撚糸文土器が存在する。それは楕円文、とくに菱型文とされる特別に粗大な楕円押型文土器と同じ効果をもつことが予想され、菱型文が楕円文を卓越して高山寺式土器の^{註5}新しい段階をむかえ、最終末期には撚糸文土器が楕円押型文土器(菱型文も含めて)より多くなる地域性をもつ。本地域でも撚糸文土器は関東撚糸文土器の消滅後も依然として沈線文系、あるいは条痕文系土器群に伴出して、胎土に纖維を混入することで理解されている。

第Ⅲ群土器に纖維の混入はないが、これをもって渦の事実となり得るのは衆知である。第2類の網目状撚糸文土器は上記の東海地方に類似をみて、後出として間違いかう。しかし第1類の乱走する撚糸文土器が高山寺式特有の乱雜施文に対応するものか、あるいは乱走によって楕円文を意識するものは今後の検討をまつしかないが、いずれにしても地域的な撚糸文系土器の文様構成からすれば後出的なものと理解するのが妥当であろう。3類の斜状撚糸文土器は施文状況に横位の回転を見るなど特殊な構成をもつ。現状では地域性を考えるしかない。第Ⅳ群の圓文土器は胎土・焼成等が第Ⅱ群に似る。

第Ⅴ群土器は田戸下層式土器に類似する要素をもつが、資料的には1個体である。遺構内に遺存の事実もなく(全ての遺物に言えるが)、あくまでも客体的存在であって、從来、本地域でいわれる田戸下層式土器に押型文・撚糸文土器が伴出るとされる事柄を摘出したとは言い難い。条痕文系土器は第Ⅵ・Ⅶ群にまとまる。いずれも広義の茅山系土器群である。

第Ⅷ群土器は本調査でもっと多くの資料を得て、第Ⅰ~Ⅶ群土器をひらく覆っていた。指頭、あるいは太い棒状工具によって描出される凹線を区画状文として、内部を集合沈線によって充填し、さらに凹線によって作られる細隆起線状の凸帶部に連続した刺突文を有する第1

・3類土器、刺突文を欠損するが、他は同様の手法をとる第2類土器、このなかには段をもつて上下に文様帯を有する例、隆帯に刻み目状押捺痕をもつ例もある、に分類される。充填する沈線に太い・細いの差はあるが、区画状文に上記の凹線を用いる点から大きな時間巾を持つものではなかろう。

野島式～鶴ヶ島台式土器への系譜は知れて、主要な文様の違いを文様単位の交叉点の押捺の有無を^{註10}言う。第V群土器第1・3類の連続する刺突文をもって形式的相違は言えない。野島式土器に細隆起線上に連続刺突文を見るが、細隆起線を本群にみない。指頭、あるいは太い棒状工具（多くは指頭による）のなぞる行為で抽出される平行凸帶部が細隆起線文を意図しているものか、それとも次型式の低隆線の発達、連続する刺突文の前哨とするか判断されない。文様形式は口縁部より垂下することを基調に対角状に分割されて、充填する沈線文も古式的色彩が強い。垂下する隆帯上に刻み目状押捺痕、2段の文様帯の発生も野島式段階より認められるらしいが、現状では巾広くとらえて類例をまちたい。

第VI群土器は条痕文のみが施工されて、茅山系土器群後出のものであろう。

石器は第I～V群土器分布圏内に鍬形鐵タイプの石鐵、さらにいわゆる『こくずり石』等の特殊磨石が遺存して、明らかに早期的な色彩をもつ石器が抽出される結果を得る。

3. 繩文時代前期後葉～中期初頭

前述したように第V群土器以降、第VI群土器の出現をみると断絶する。第VI群土器は諸磧b・c式、十三菩提式、さらに関西系の北白川下層式、大歳山式に比定・類似されて、繩文時代前期後葉～第VII群土器・五領ヶ台I式に至るまでの全ての諸型式をもって継続される。しかしも第I～VI群土器による早期分布圏が東側丘陵南東平坦面の一部に集中するのに対して、発掘区全域（早期分布圏とは重複しないが）に分散する傾向を示すとともに、かつ集中する。それは面的なひろがりをもつものの点的な分布の集合と言え、集団の軌跡を抽出したにすぎない。西側丘陵東側斜面に多くが集中して、主体がそれより南にむかって存在することは間違いないが、いずれにしても貧弱な分布を考えるしかない。これを主体部分の外縁の実情とするか、地域的な繩文時代前期～中期初頭の遺跡実情とするか判断されないが、有力歴代遺跡をもっても同様であることは、中期中葉～後葉への発展性のない文化とされるべきか、地形条件は確実に違う。

土器群の分布状況は『土器』に検討されて、諸磧b式土器が東・西側丘陵、諸磧c式土器が西側丘陵から中央低地にかけて分布をみる。この時期に至って西側丘陵へ主体が移って十三菩提式期にひきつがれる。これに關西系土器群が混在してくる。中期をむかえて西側丘陵は断絶して、東側丘陵斜面に五領ヶ台I式土器をもって第2号竪穴住居跡が単独で當まれる。

本地域の繩文時代前期後葉～中期初頭にかけては上記の遺跡背景に因をなすのか、遺構が檢

出されるのは極く稀である。諸条件を欠くが諸磯式期に想定されて、柱穴に方形的配置を感じられる第1号竪穴住居跡、五領ヶ台I式期の第2号住居跡の2棟が検出される。前期～中期の方へ→円への住居跡形状の転換について問題とされる時期の竪穴住居跡であったが、現状では曖昧な点が多く資料の報告に止めるしかない。ただ、この時期の竪穴住居跡が単独的に占地する事実はいえて、それが中期後葉～後期初頭に営まれる『キャンプーサイト』的な占地とは性格を異なるもののように思える。

以後、完全に文化圏と隔絶される。

褐色土層、さらに橙色土層等の褐色系土に10基の黄褐色土を内包する土塙の検出をみたが、これは『風倒不眞』^{註12}としたい。

4.歴史時代

中世～近世にかけて構築されたであろう円形土塙、溝状造構の検出をみると、いまや広域な発掘調査に普遍の造構となっている。円形土塙は墓跡説、溝状造構は畑の根切り溝、古道説が一般とされつつある。^{註13}円形土塙は長方形・方形土塙に伴つくるらしいが、本地域に共存の例がなく、同じ墳墓でありながら円形土塙に人骨片の遺存が皆無に等しい状況もあって、若干の問題も含んでいる。

註1 富士宮市教育委員会 1979『富士宮市遺跡地名表』付富士宮市遺跡分布図

註2 日本道路公团名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1980『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報Ⅱ—昭和54年度—』

註3 松沢聖生 1957『細久保遺跡の押型文土器』『石器時代』第4号

註4 戸沢光則 1955『櫛沢押型文遺跡』『石器時代』第2号

註5 浦 宏 1939『紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告—押型文土器の単純造詣に就て—』『考古学』10—7

註6 小林達雄 1966『撫文早期前半に関する問題』『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』

註7 松島透 1957『長野県立野遺跡の捺型文土器』『石器時代』第4号

註8 安達厚三・徳松正広 1976『原始時代の八百津』『八百津町史』愛知県八百津町

註9 山下勝年 1980『先菊貝塚出土の押型文土器について』『先刈貝塚』愛知県知多町教育委員会

註10 岡本勇 1961『三浦市鶴が島台遺跡』『横須賀市博物館研究報告5』

註11 今村啓爾 1972『宮の原貝塚』武藏野美術大学考古学研究会

註12 能登健 1974『発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として』『信濃』第26卷第3号 信濃史学会

註13 植松章八 1976『土塙と溝状造構について』『陣場上・平野遺跡』一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・静岡県長泉町

図 版

図版第1



A 航空写真(1)



B 航空写真(2)

図版第2

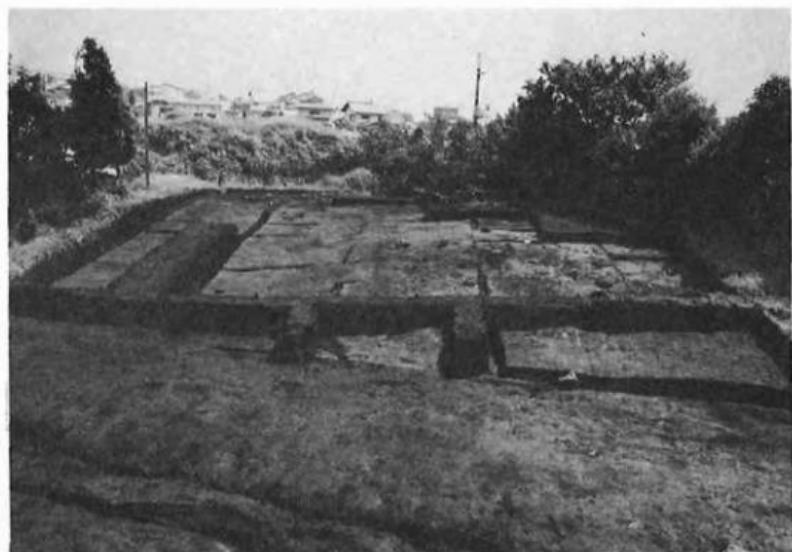


航空写真(3)

図版第3



A 発掘調査状況(1)



B 発掘調査状況(2)

図版第4



A 発掘調査状況(3)

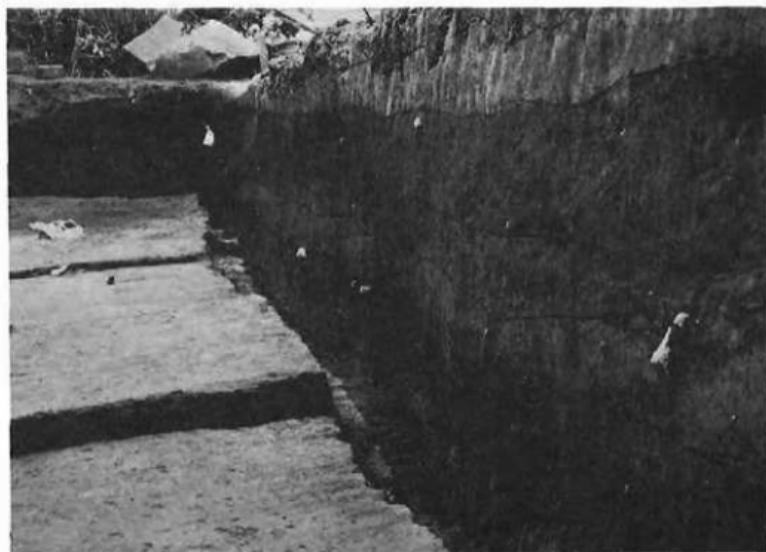


B 発掘調査状況(4)

図版第5



A 土層堆積状況(1)



B 土層堆積状況(2)

図版第6



A 遺物出土状況(1)



B 遺物出土状況(2)

図版第7

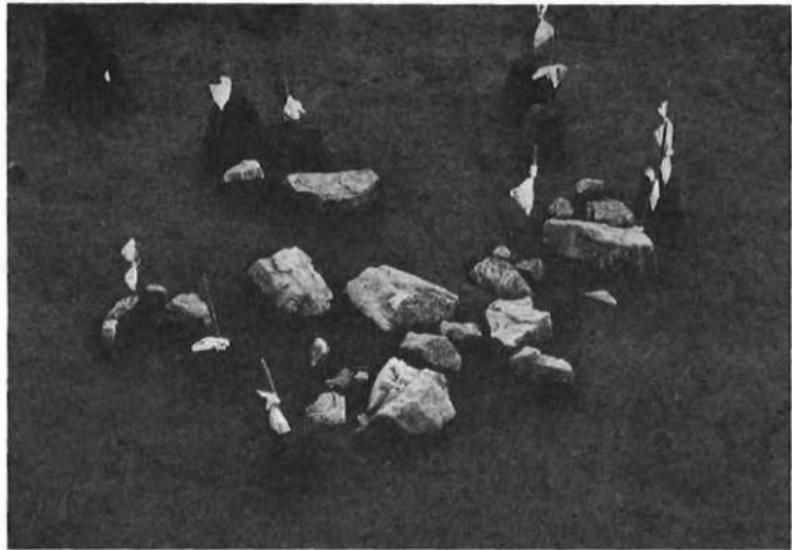


A 遺物出土状況(3)



B 遺物出土状況(4)

图版第 8



A 第 1 号集石跡全景

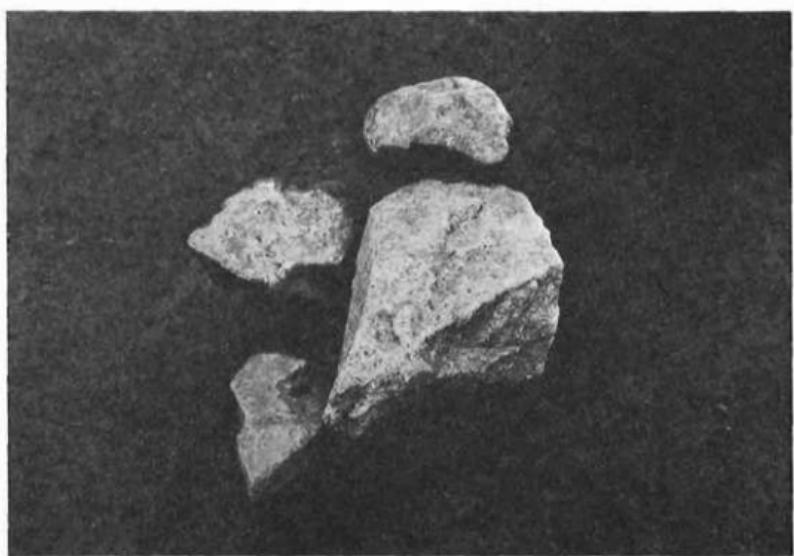


B 第 2 号集石跡全景

圖版第 9



A 第3号集石跡全景



B 第4号集石跡全景

圖版第10



A 第5号集石跡周辺遺物出土状況

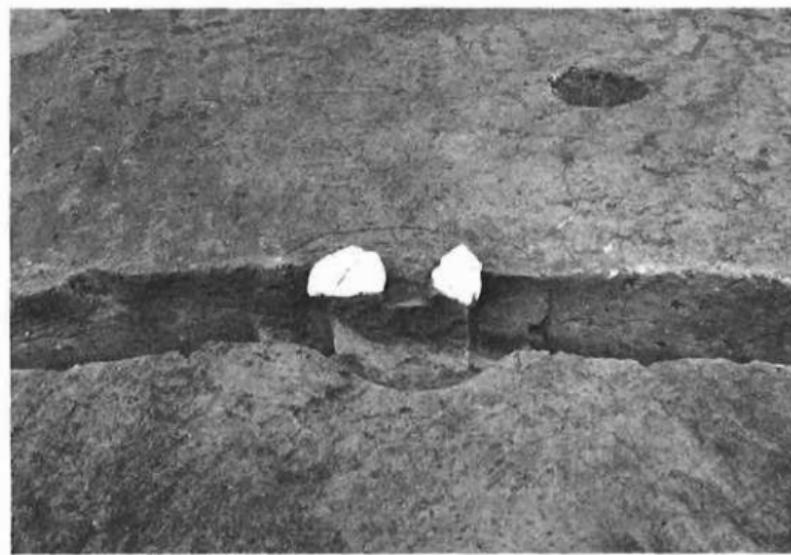


B 第5号集石跡全景

图版第11



A 第1号住居跡全景



B 第1号住居跡炉断面状況

圖版第12

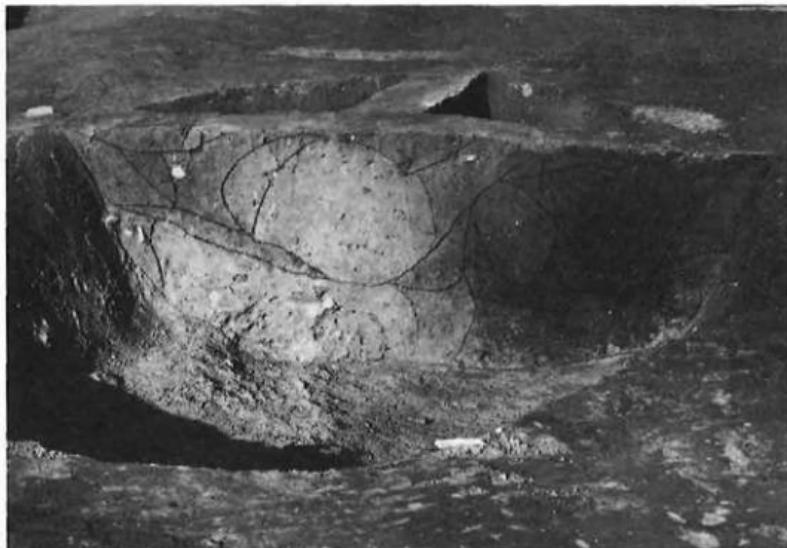


A 第2号住居跡遺物出土状況

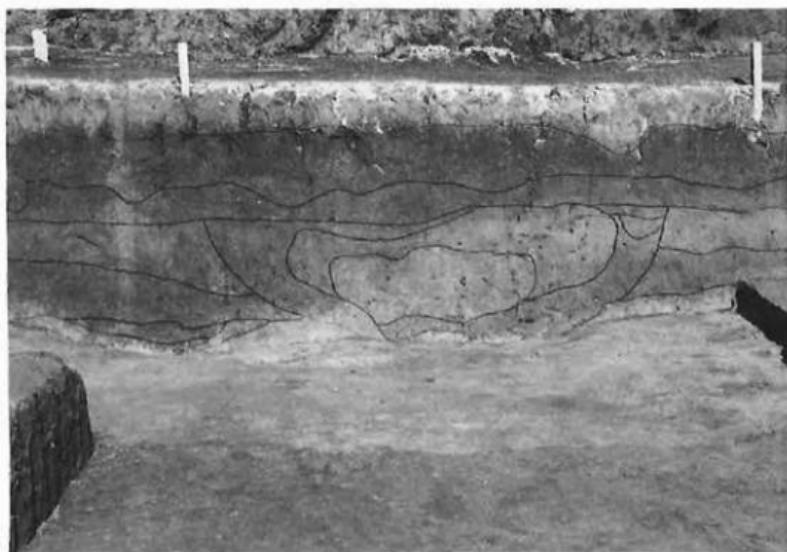


B 第2号住居跡全景

図版第13

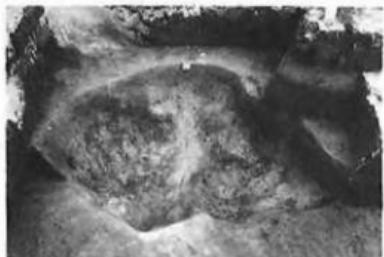


A 第5号ドーナツ状遺構断面状況

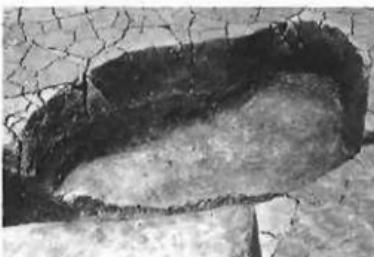


B 第8号ドーナツ状遺構断面状況

図版第14



A 第1号ドーナツ状造構全景



B 第3号ドーナツ状造構全景



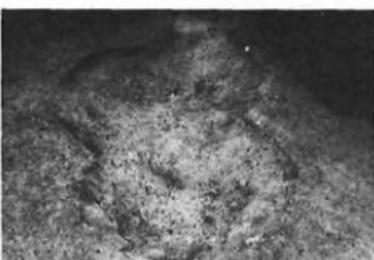
C 第4号ドーナツ状造構全景



D 第5号ドーナツ状造構全景



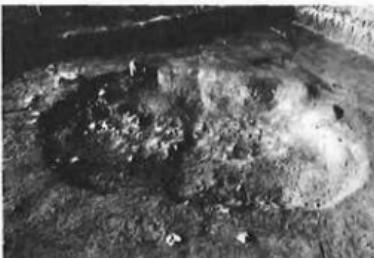
E 第6号ドーナツ状造構全景



F 第7号ドーナツ状造構全景



G 第8号ドーナツ状造構全景



H 第9号ドーナツ状造構全景

図版第15



A 大沢ラビリ面遺構全景(A地区南側)



B 第Ⅰ号溝状遺構全景

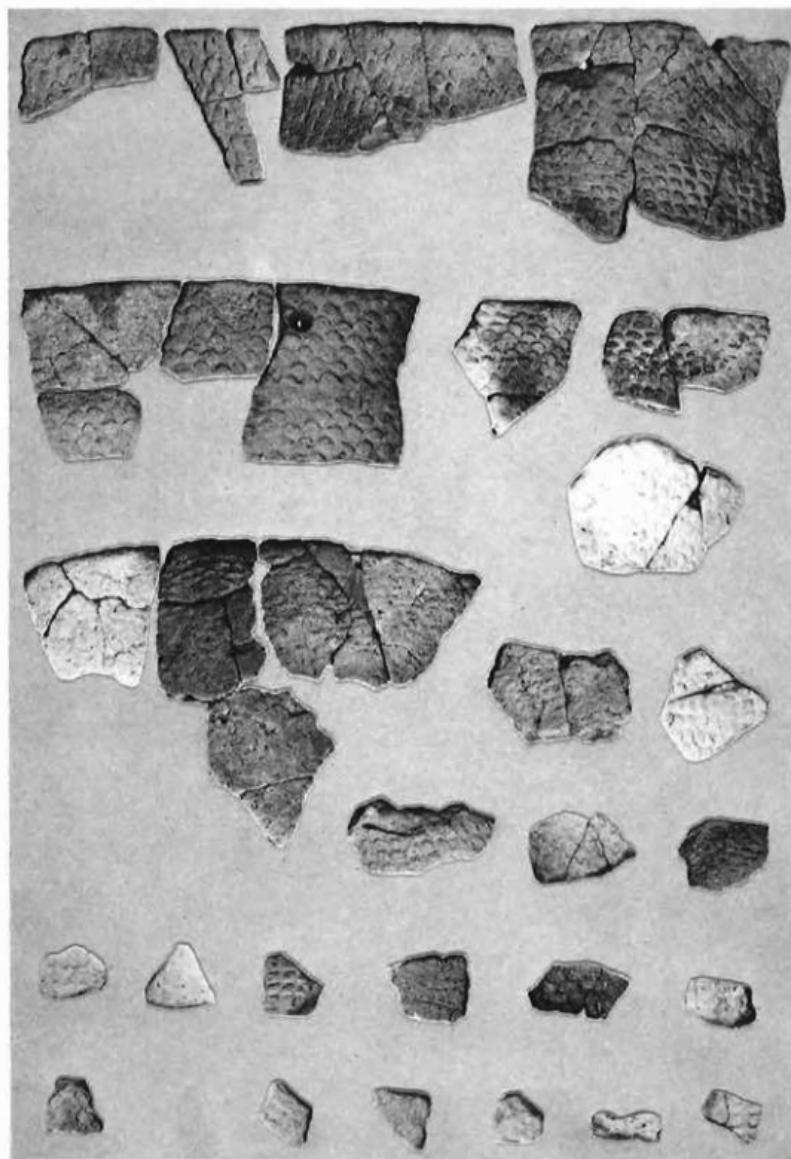
圖版第16



A 第5~12号円形土塙完掘状況

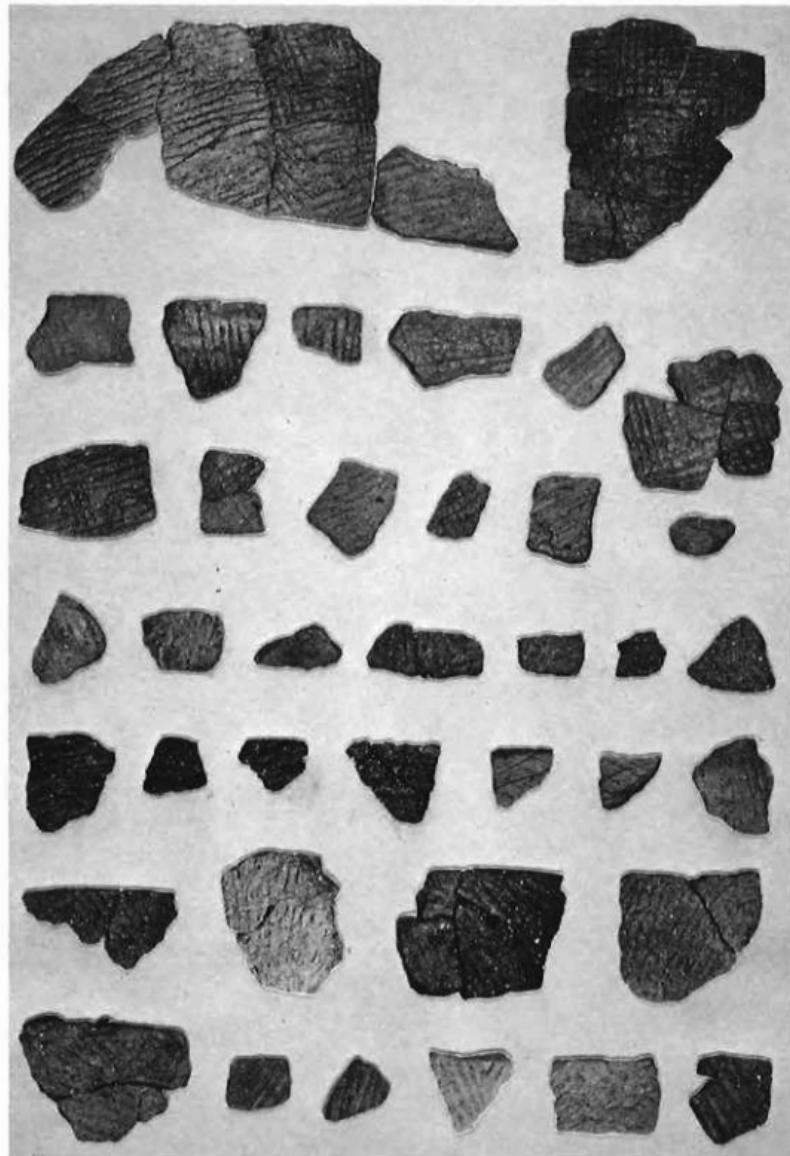


B 第13~18号円形土塙完掘状況

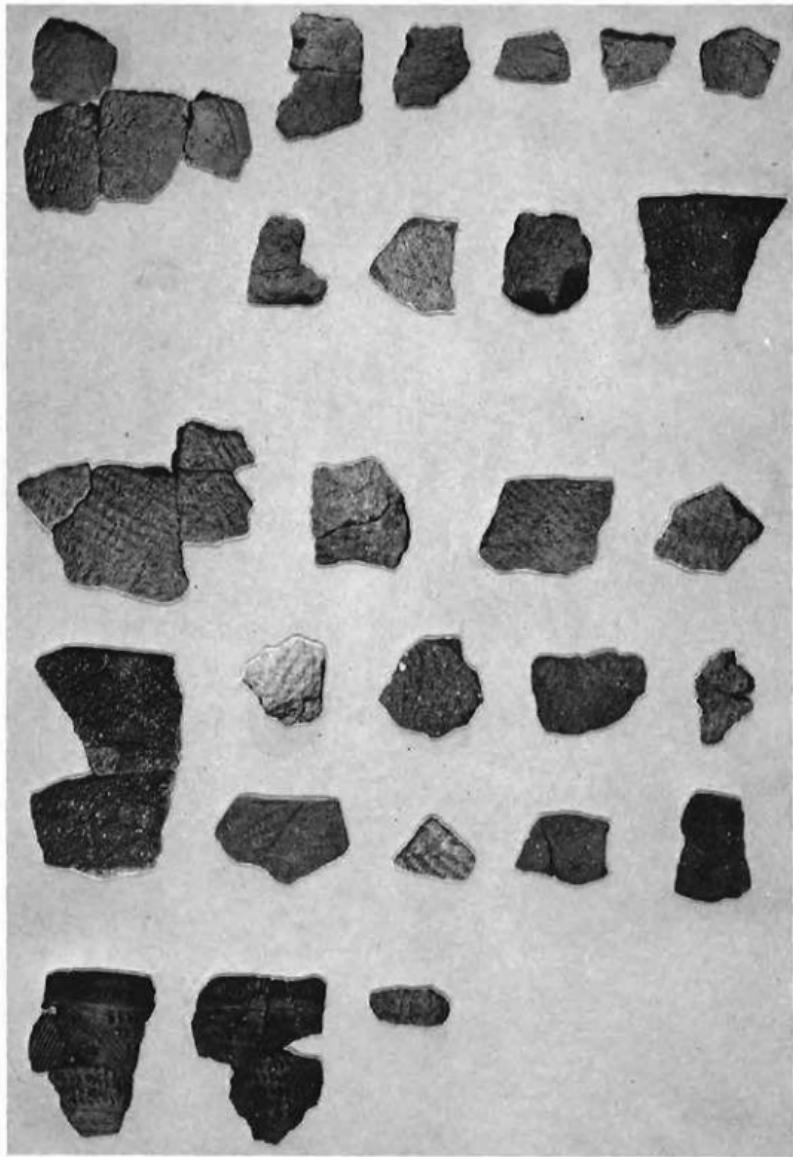


第Ⅰ群土器

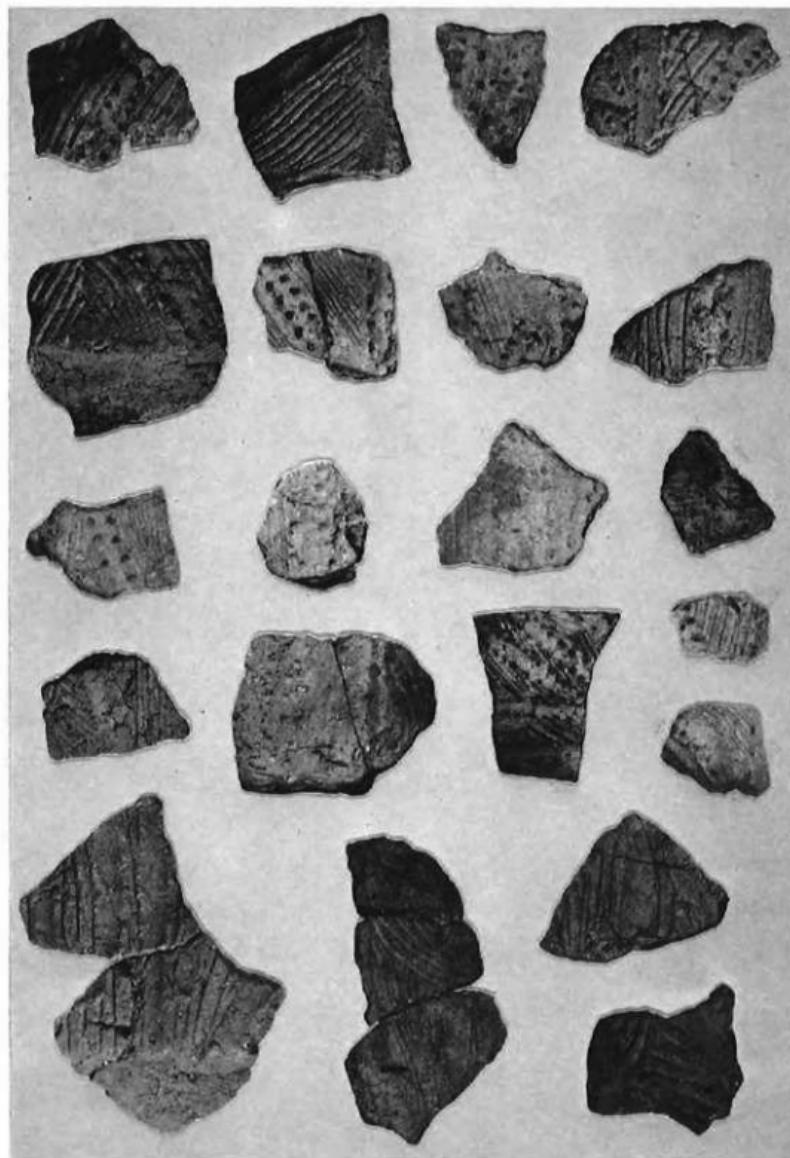
图版第18



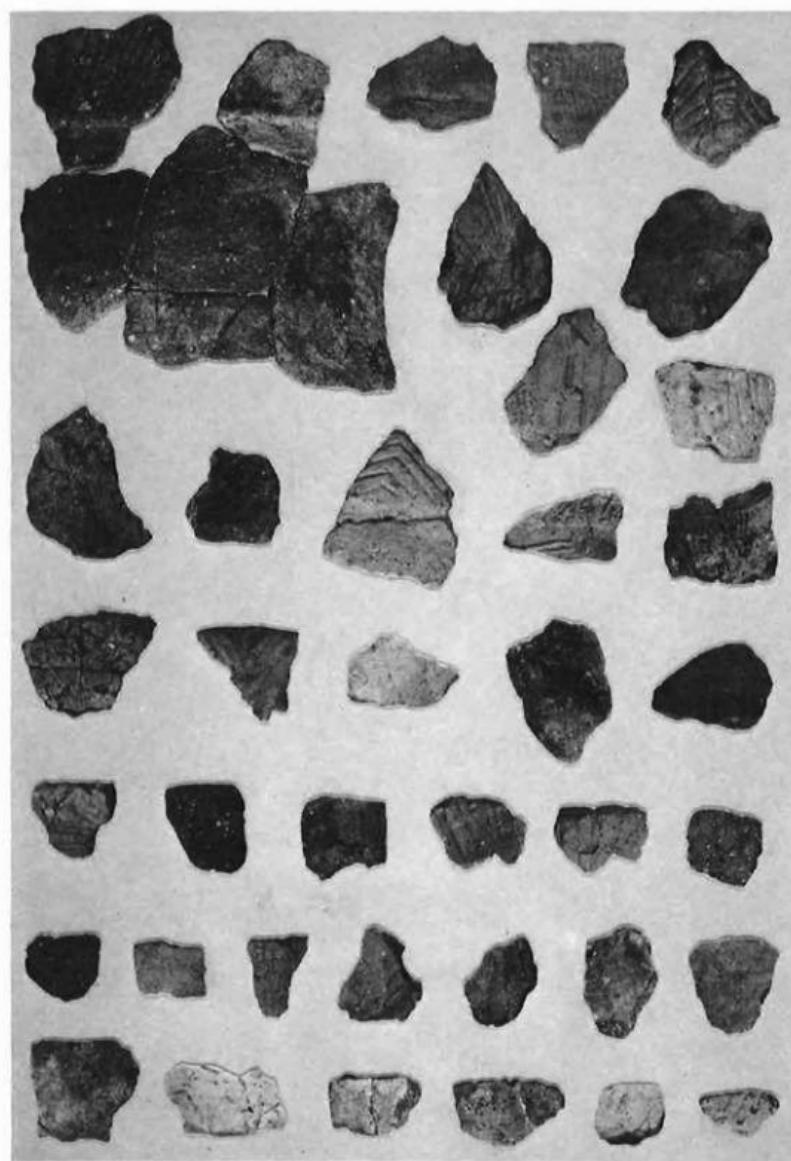
第II群土器



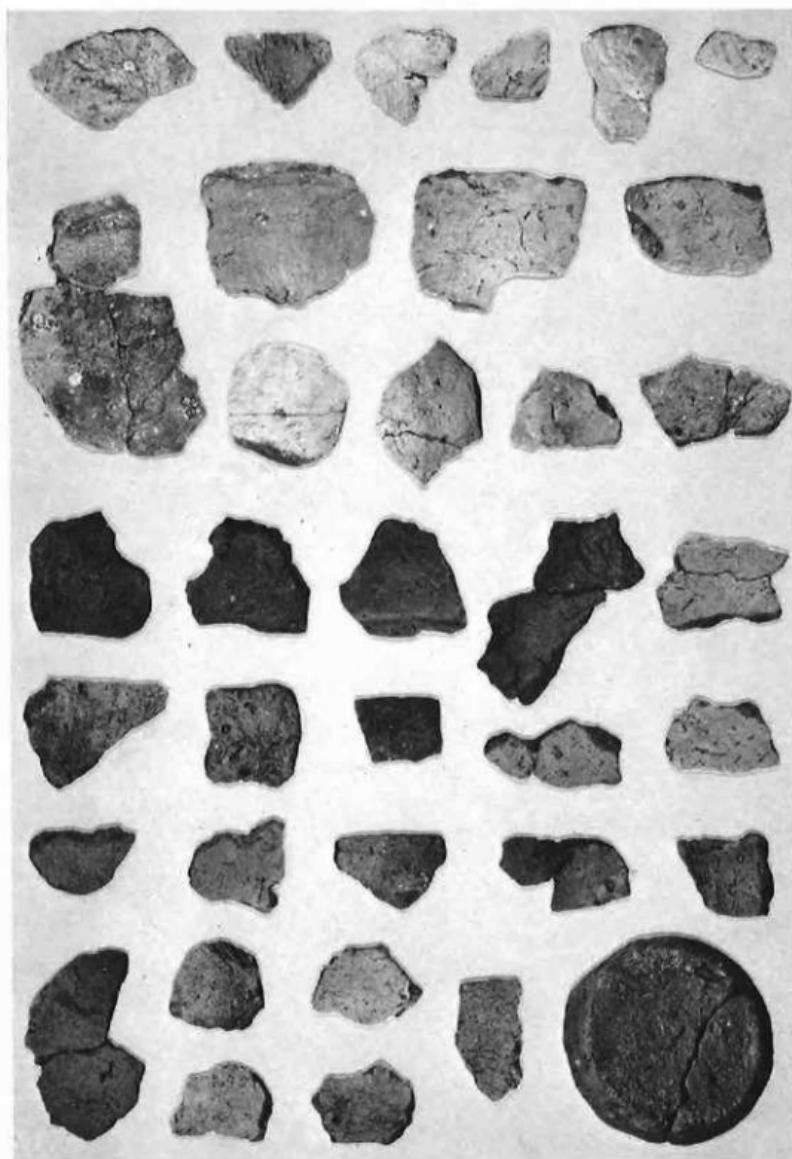
第II・III・IV群土器



第V群土器(1)

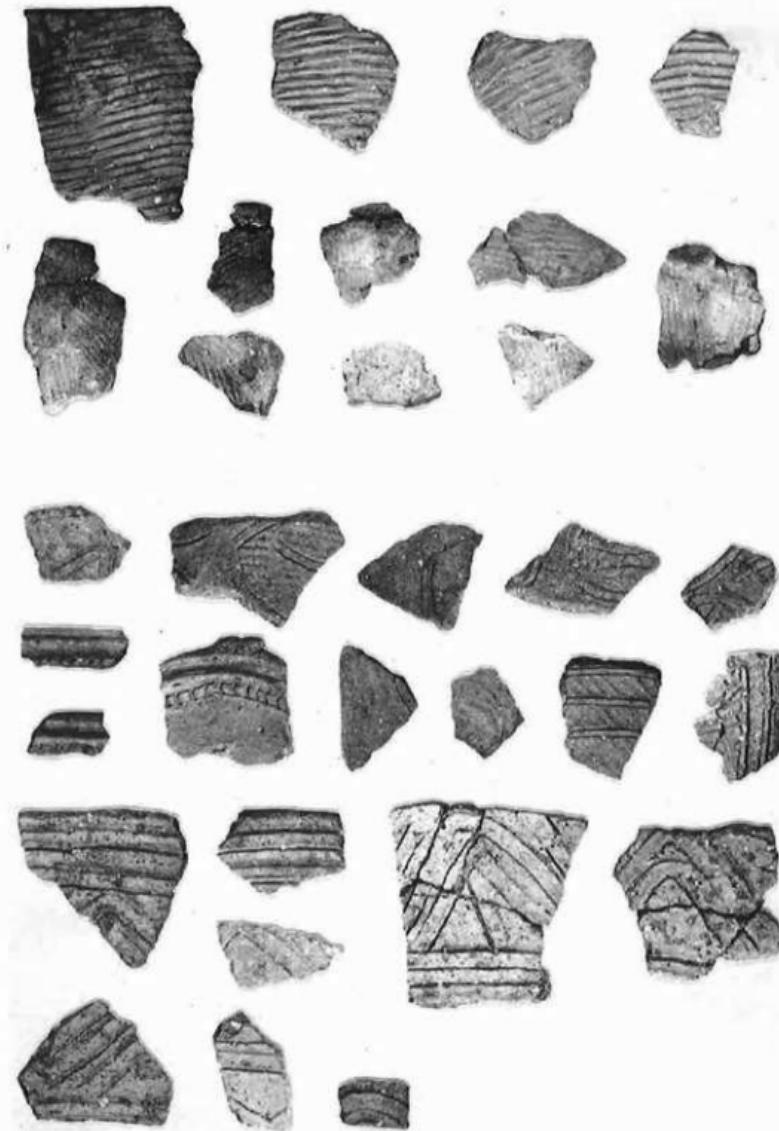


第V群土器(2)

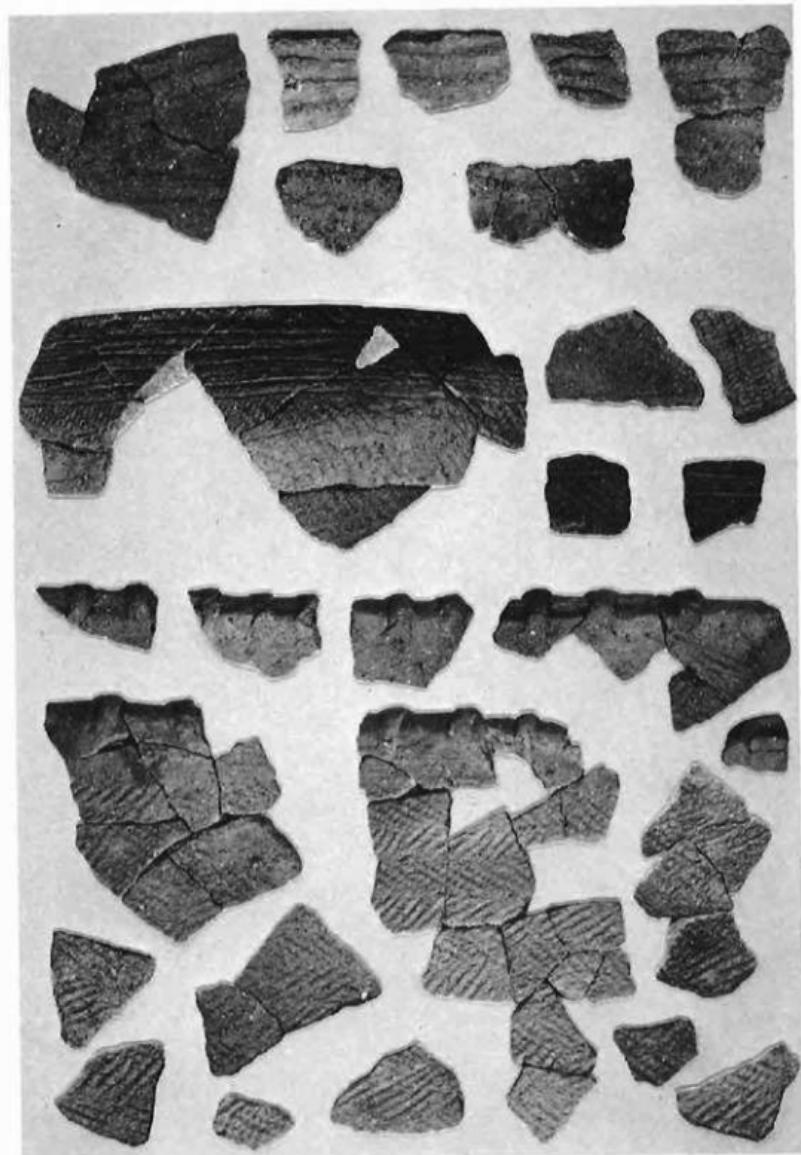


第V群土器(3)

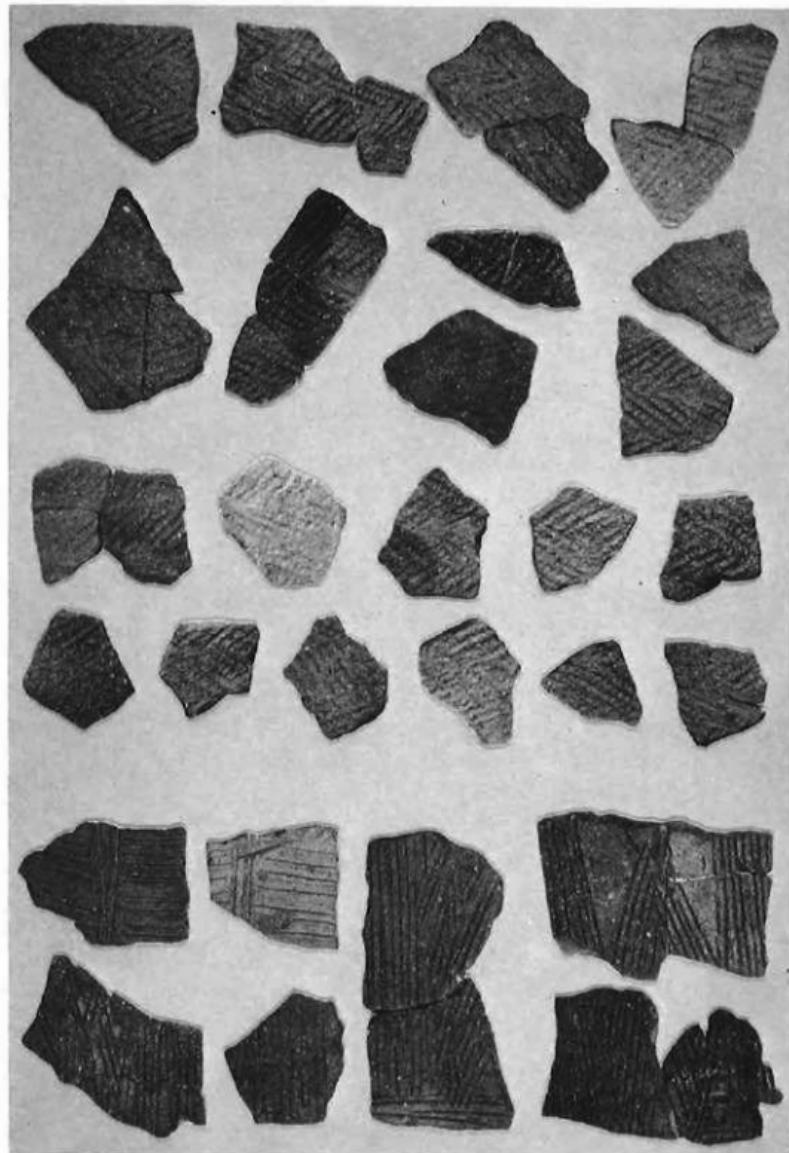
圖版第23



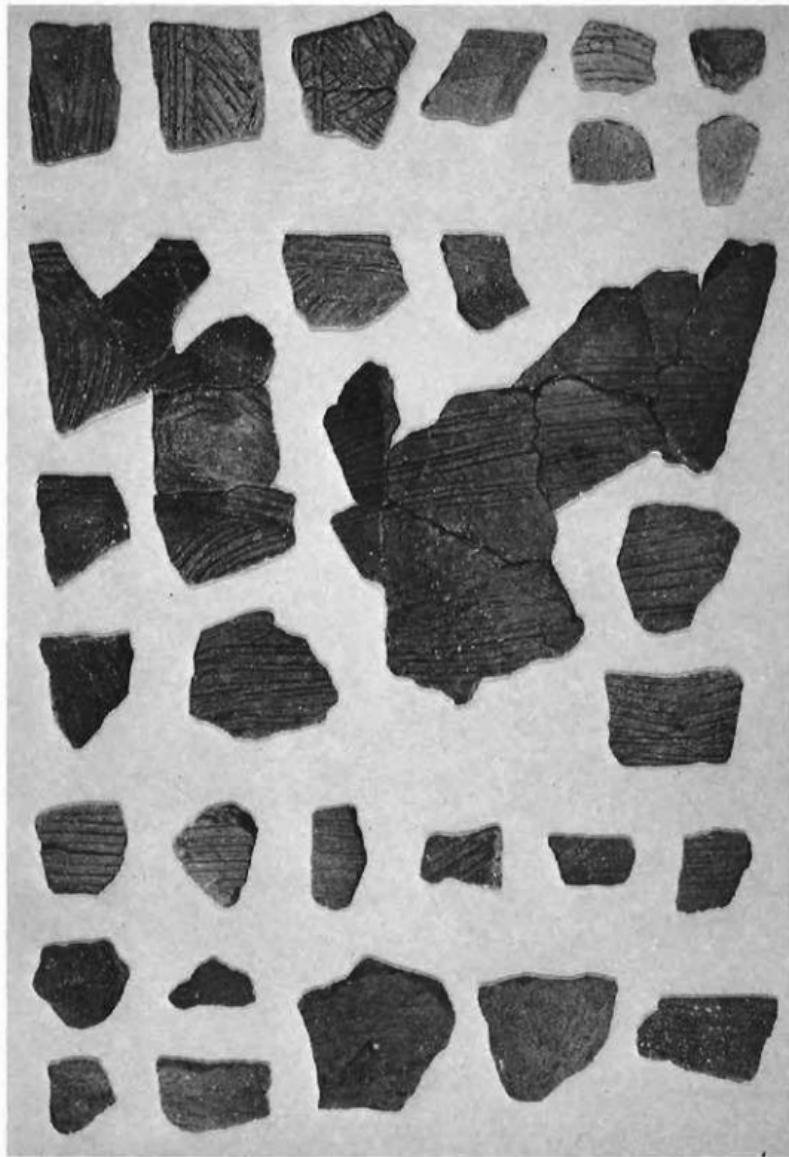
第VI・Ⅳ群土器(1)



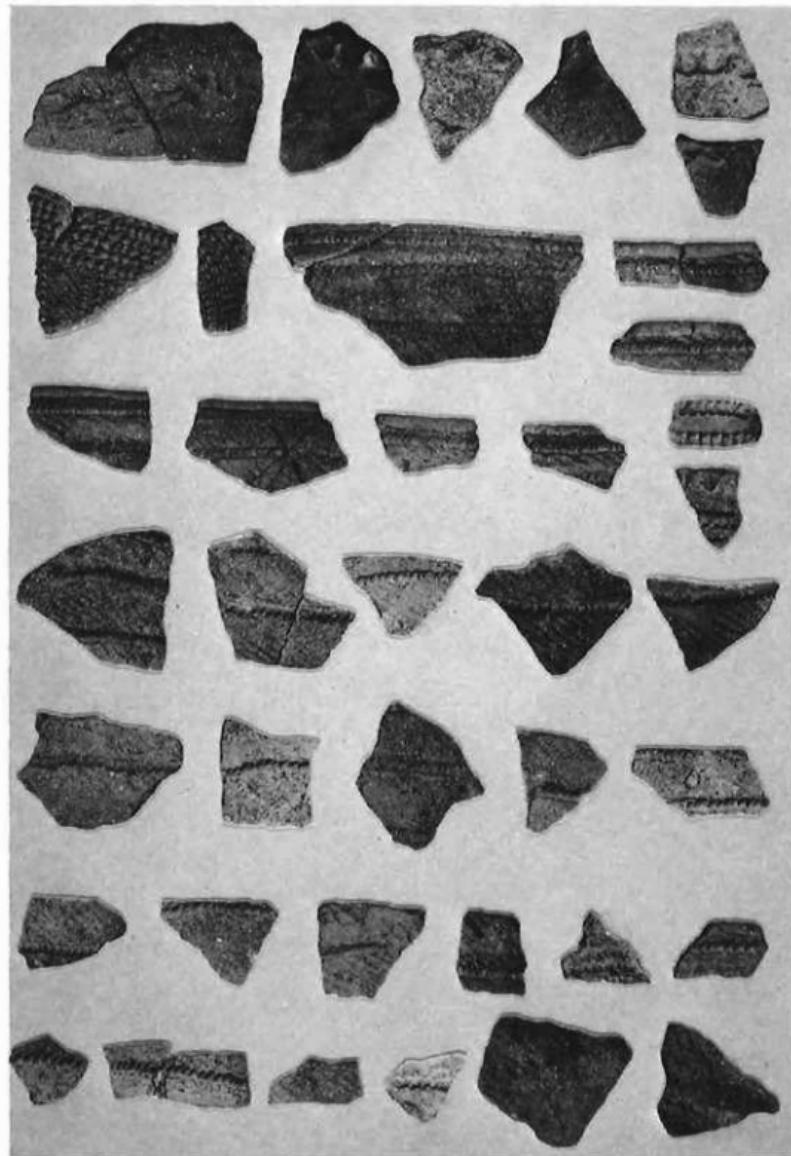
第Ⅳ群土器(2)



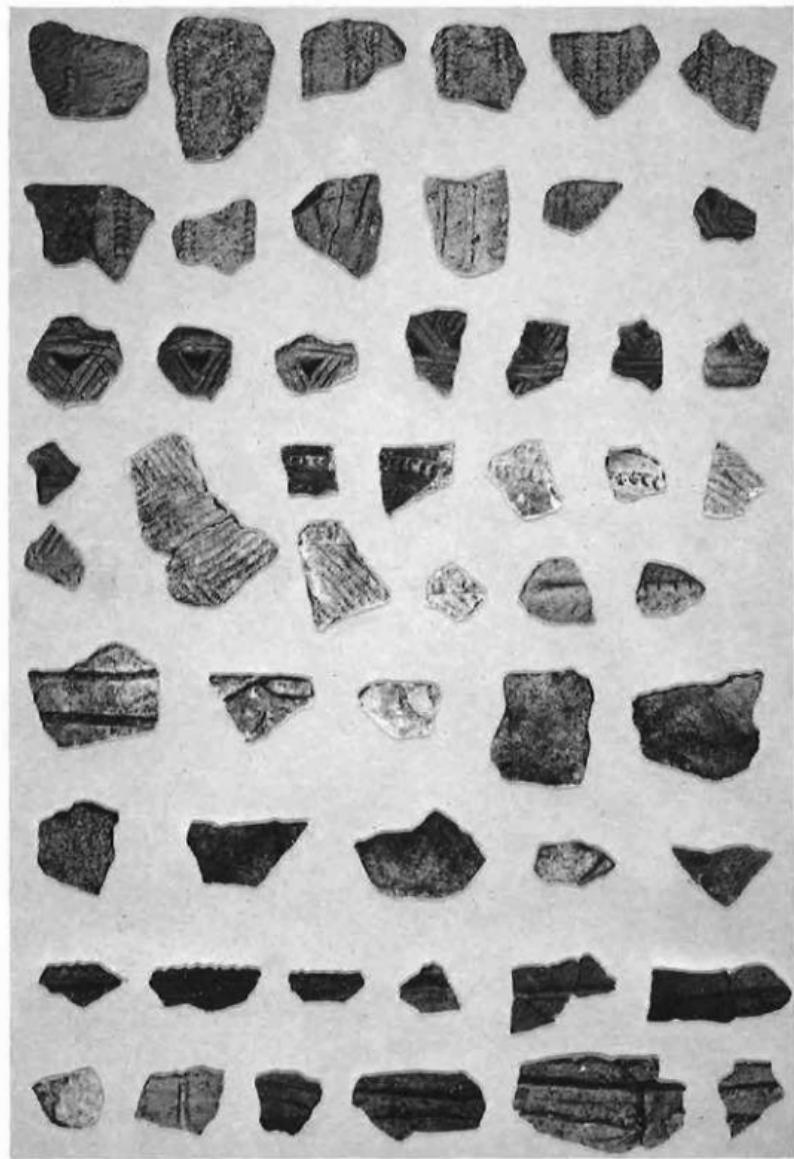
第廿群土器(3)



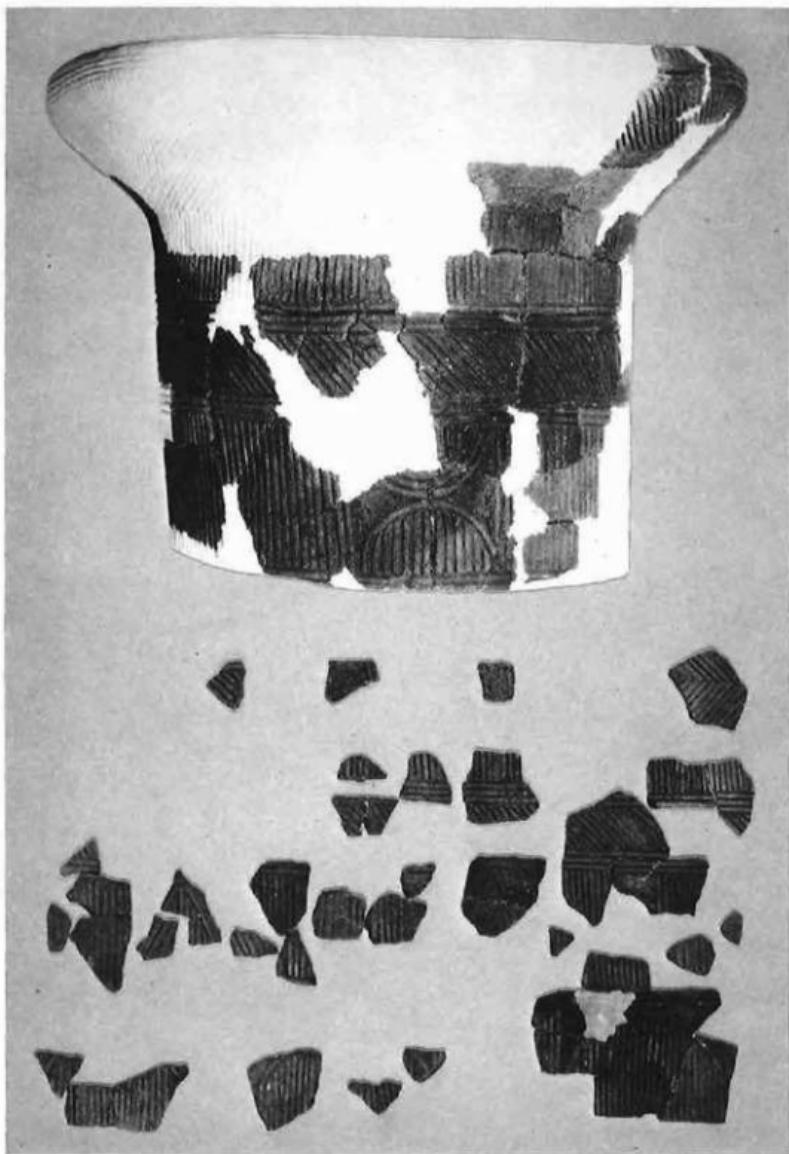
第26圖
器物群第4



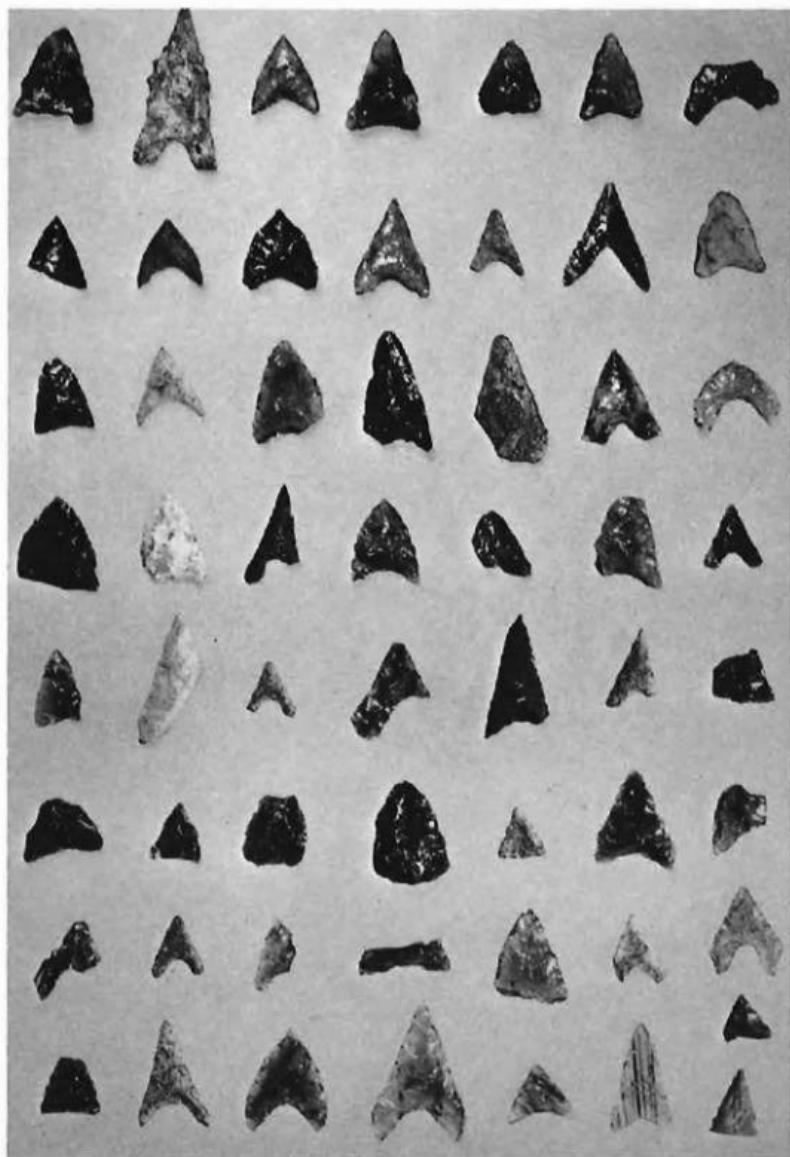
第27群土器(5)



第VI群土器(6)

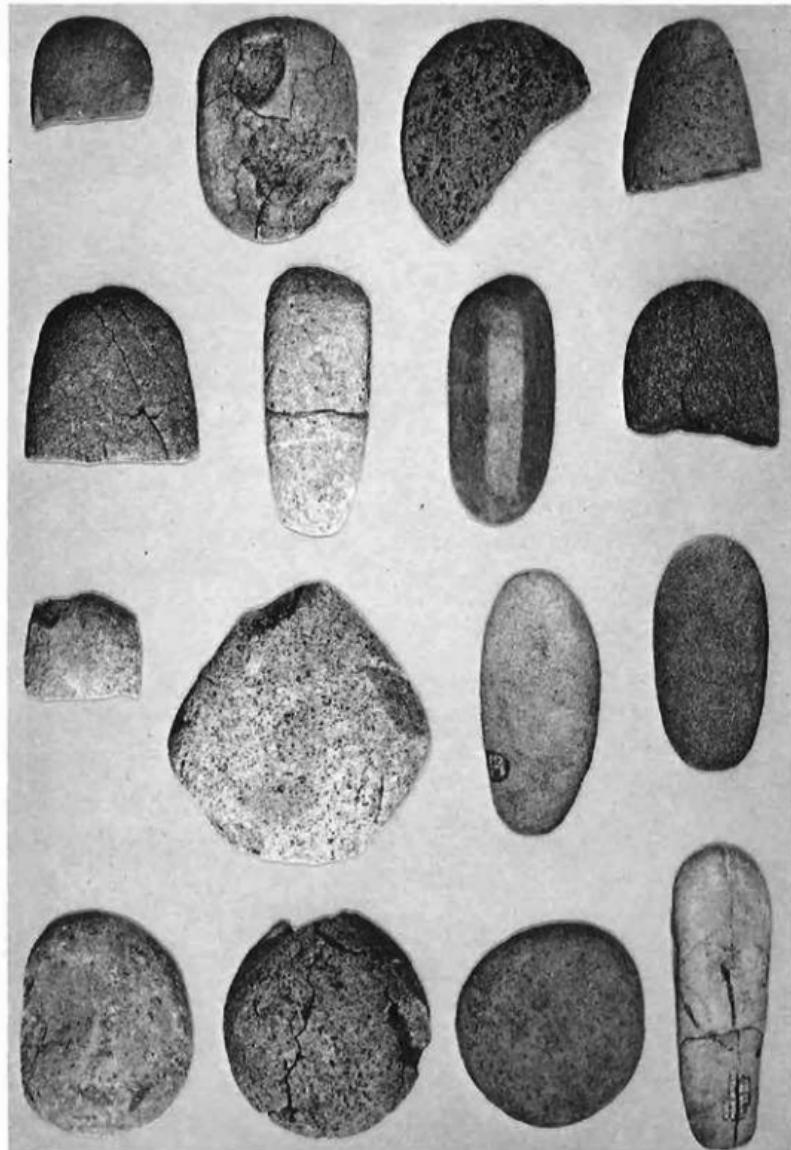


第29群土器

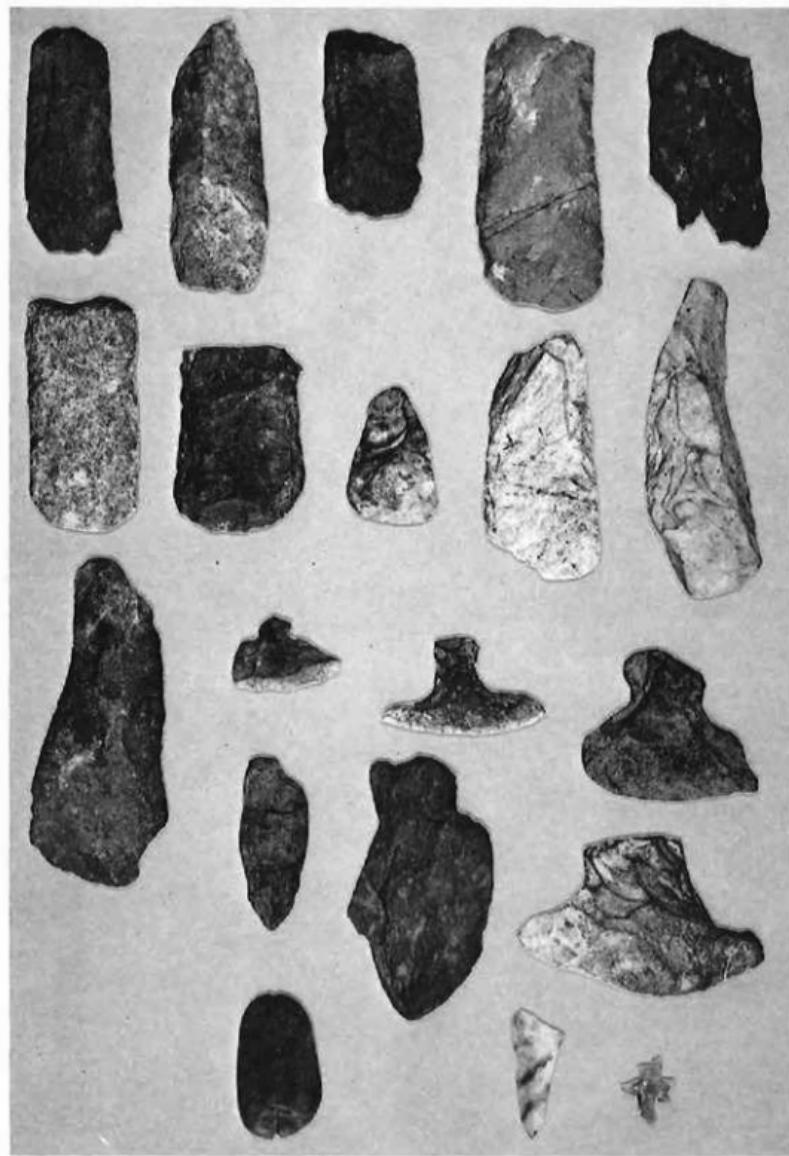


石器(石鑿)

图版第31



石器(磨石)



石器(石斧·石匙·石鎚·石錐·異形石器)

富士宮市文化財調査報告書第5集

代官屋敷遺跡

—西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)—

昭和57年3月30日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418 静岡県富士宮市元城町1番1号

電話 (0544)27-3111(代)

印刷 (株) 緑星社

〒418 静岡県富士宮市阿幸地132-5

電話 (0544)23-2882